

和歌山県海南市所在

溝の口遺跡発掘調査報告書

——団体営農道整備事業棕の木線建設にともなう発掘調査報告書——

1997年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

和歌山県海南市所在

溝の口遺跡発掘調査報告書

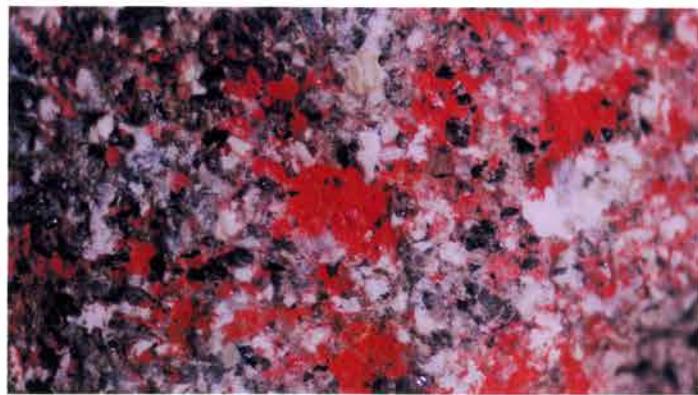
——団体営農道整備事業棕の木線建設とともになう発掘調査報告書——

1997年3月

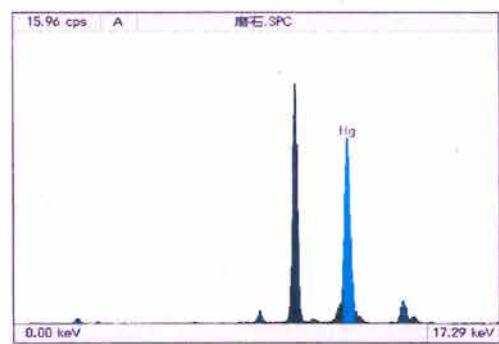
財団法人 和歌山県文化財センター



水銀朱のついた凹み石 (206)



実体顕微鏡写真 (赤色) 15倍



XRFチャート (赤色)

序 文

溝の口遺跡は縄文時代の遺跡としては、和歌山県でも屈指の規模のものであります。縄文時代がけっして野蛮な未開の時代ではなく、その生活や文化が想像以上に豊かなものであったことは、有名な青森県の「三内丸山」遺跡を始めとする昨今の発掘調査の成果から、私達の知るところとなりました。

溝の口遺跡でも過去何回かの発掘調査で、住居跡や土器棺墓のほかに配石遺構などが見つかり、縄文時代の文化を知ることのできる近畿圏では珍しい遺跡として予てから注目されておりました。

このたびの発掘調査でも、おびただしい数の縄文時代の遺構が見つかり、土器や石器もたくさん出土しました。さらに、弥生時代の竪穴住居跡も計5棟見つかり、この地での縄文時代から弥生時代への移り変わりもだんだんと分かるようになってまいりました。

発掘調査終了後に記録類や出土遺物整理作業を進めてまいりましたが、ようやくその成果をまとめあげることができましたので、このたび調査報告書として刊行する次第でございます。不備な点も多々あろうかとは存じますが、広く皆様方に活用頂ければ幸いでございます。

最後ではありますが、調査ならびにその後の整理作業中に、一方ならぬお世話になりました方々には厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 西 口 勇

例　　言

1. 本書は海南市溝の口・椋の木に所在する溝の口遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は団体営農道椋の木線建設に先立つもので、海南市農政課の委託を受けた財団法人和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会・調査委員会の指導の下に現地調査を実施した。
3. 発掘調査・整理作業の担当者は以下のとおりである。

発掘調査

平成 6 年度 財団法人和歌山県文化財センター主査　　武内 雅人

　　同　　上　　佐伯 和也

平成 7 年度　　同　　上　　村田 弘

整理作業

平成 8 年度 財団法人和歌山県文化財センター主任　　松下 彰

　　同　　上　　武内 雅人 (平成 8 年10月より)

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査専門員)

4. 本書の作成は武内 雅人が担当した。
5. 出土した骨片の鑑定は大阪市立大学医学部第二解剖学教室 安部 みき子氏に御願いしたほか、出土した縄文土器については財団法人大阪市文化財協会 松尾 信裕氏の御教示を得た。

溝の口遺跡発掘調査組織

平成 6 年度

岡 田 英 男 奈良大学教授
羯 磨 正 信 県文化財保護審議会委員 (平成 7 年 1 月 4 日逝去)
巽 三 郎 県文化財保護審議会委員
都 出 比呂志 大阪大学教授
藤 澤 一 夫 帝塚山大学客員教授

平成 7 年度

岡 田 英 男 奈良大学教授
巽 三 郎 県文化財保護審議会委員
都 出 比呂志 大阪大学教授
藤 澤 一 夫 帝塚山大学客員教授

平成 8 年度

岡 田 英 男 奈良大学教授
巽 三 郎 県文化財保護審議会委員
都 出 比呂志 大阪大学教授
藤 澤 一 夫 帝塚山大学客員教授

凡 例

1. 調査で使用した基準線は国土座標第VI系のもので、座標値はm単位で使用した。標高は東京湾標準潮位 (T. P +) の数値である。
2. 調査で使用した土色名は新判標準土色帳に従った。
3. 本書で示した遺物の数量は、特にことわりの無い場合は接合前の破片数である。
4. 本書に掲載した遺構・遺物の番号は、本文・挿図・図版・遺物一覧表のすべてに共通する。
遺構番号は種類に関わらず 1 からの通し番号としたが、調査が二ヶ年度に及んだため、平成 7 年度の分については遺構番号の頭に「2-」を付して区別している。
遺物のうちで写真図版にだけ掲載したものには1000番台の番号を使用した。
5. 本書では遺物の諸属性 (出土地区・遺構名・層位・法量、および土器の胎土・色調焼成・手法の状況や遺存率) は遺物一覧表に示した。ここでいう土器の遺存率とは、残存高相当分の復元径に対する%である。

目 次

本 文 目 次

第Ⅰ章 遺跡	1	第Ⅱ章 調査の成果	16
第1節 地理的・歴史的環境	1	第1節 繩文時代	16
1. 遺跡の立地	1	1. 土器棺	16
2. 既往の発掘調査	1	2. 大規模土壙	18
第2節 調査の経緯	2	3. 配石遺構	23
1. 調査に至る経緯	2	4. 柱穴状埋土のピット	25
2. 調査の方法	2	5. 円形土壙	26
a. 地区割り	2	6. 楕円形土壙	31
b. 掘削	2	7. その他の遺構	31
c. 出土遺物の扱い	2	第2節 弥生時代	36
第3節 遺跡の概要	2	1. 壁穴住居跡	36
1. 遺構・遺物の時期別分布	4	2. 上壙状の遺構	39
2. 突帯文土器の分布	4	第3節 古墳時代以降	43
3. 繩文時代の遺構	6	第Ⅲ章 付章	49
4. 弥生時代の遺構	6	第1節 繩文遺構の時期区分	49
5. 古墳時代以降の遺構	8	第2節 繩文土器の胎土と繩文原体	49
第4節 基本層序	8	1. 繩文土器の胎土	49
1. 調査で使用された層名	9	2. 繩文の原体	49
2. 繩文時代の遺物包含層	10	第3節 石鏃の形態と調整	51
3. 遺物包含層と遺構の検出状況	11	1. 石鏃の形態分類	51
a. 第3c層上面検出の遺構	12	2. 形態分類・調整と出土状況	51
b. 第4層上面検出の遺構	12	3. 命題の検証	52
c. 出土遺物と埋土	12	第4節 繩文遺構から出土した獸骨	53
d. 遺構の重複関係と埋土	12		
4. 遺物包含層出土遺物	12		

挿 図 目 次

第1図 地区割り	3	第29図 壇穴住居跡 60・61	37
第2図 遺構の時期別分布	5	第30図 壇穴住居跡 87	38
第3図 出土遺物の数	6	第31図 壇穴住居跡 149	39
第4図-1 土器の平面分布	7	第32図 壇穴住居跡出土遺物	40
第4図-2 土器の平面分布	8	第33図 土壙 2-648	40
第5図 基本層序	9	第34図 土壙状遺構	41
第6図 D13・14区包含層出土遺物の分布	11	第35図 遺構出土の弥生土器	42
第7図 遺物包含層出土遺物	13	第36図 弥生時代遺構出土石器・石製品・他	43
第8図 遺物包含層出土石器	14	第37図 掘立柱建物跡 385	44
第9図 土器棺 597	17	第38図 鋳造遺構 378	45
第10図 土器棺 652	18	第39図 古墳時代以降の遺物	46
第11図 土器棺 2-1008	19	第40図 繩文土器出土時期別分布図	50
第12図 土器棺 598・638・666	20	第41図 石鎌の形態	51
第13図 大規模土壙 520・558	21	第42図 検出遺構	67・68
第14図 土壙 558 出土土器	22		
第15図 土壙 558 出土土器	23		
第16図 配石遺構	24		
第17図 柱穴状埋土のピット	26		
第18図 円形土壙 943・958	27		
第19図 土壙 943・958 出土土器	27		
第20図 円形・楕円形土壙	28		
第21図 土壙 420 出土土器	29		
第22図 土壙 420 出土土器	30		
第23図 土壙 495 出土土器	31		
第24図 遺構出土の繩文土器	32		
第25図 遺構出土の繩文土器	33		
第26図 晩期遺構出土土器	34		
第27図 繩文時代遺構出土石器・石製品	35		
第28図 壇穴住居跡 2-551	36		

表 目 次

第1表 調査で使用された層名と標識遺物	9
第2表 第3a～c層の遺物の組成	10
第3表 黒褐色土・暗褐色土の遺物の組成	10
第4表 柱穴状埋土のピット状遺構一覧	46
第5表 楕円形土壙状遺構一覧	47
第6表 その他の遺構一覧	47・48
第7表 繩文土器の胎土	49
第8表 繩文原体の種類	51
第9表 繩文時代の石鎌	52
第10表 弥生時代の石鎌	52
第11表 その他地区別の石鎌	52
第12表 骨片を出土した繩文遺構	53
遺物一覧表他	54～66

図 版 目 次

- PL-1 遺跡遠景（西から）・D14・15付近遠景（北から）
- PL-2 D14区全景（西から）・二次D14区・二次D13・14区全景（西から）
- PL-3 D14区遺物包含層と遺構の検出状況 R19東・南壁（西から）・D14区土器棺墓群（西から）・土器棺597（東から）
- PL-4 土器棺652（南から）・土器棺666（東から）・土器棺598（西から）・土器棺638（南から）・土器棺2-1008（南から）
- PL-5 土壙520・558（西から）・土壙520（南から）・土壙558（西から）
- PL-6 配石土壙群（西から）・配石土壙472（西から）・472骨片出土状況（東南から）・配石土壙452（西から）・配石土壙479（南から）・452骨片出土状況（西から）
- PL-7 配石土壙546（南から）・土壙518（南から）・土壙551（東から）・土壙420（西から）・配石土壙657（東から）・土壙445（南から）・土壙958（西から）
- PL-8 D17区全景（西から）・D17区全景（東から）・竪穴住居跡2-551（東から）
- PL-9 溝状遺構2-647・土壙2-648（東から）・土壙2-648遺物出土状況（西から）
- PL-10 D16全景（西から）・竪穴住居跡60・61・87（西から）
- PL-11 竪穴住居跡87（北から）・竪穴住居跡149（西から）・竪穴住居跡149炉跡（南から）
- PL-12 竪穴住居61石皿出土状況（南から）・土壙97（西から）・ピット状遺構389遺物出土状況（北から）・ピット状遺構142石斧出土状況（南から）・土壙89遺物出土状況（南から）・土壙118（北から）
- PL-13 鋳造遺構378（東から）・鋳造遺構378粘土貯蔵穴（西から）・掘立柱建物跡385（南から）

第Ⅰ章 遺跡

第1節 地理的・歴史的環境

1. 遺跡の立地 第2図 PL-1

溝の口遺跡は紀ノ川の主要な支流である貴志川の右岸に位置する。貴志川は高野山系を源頭として飯盛山系の南側を西流するが、溝の口遺跡の西側で流れを北に変えて紀ノ川に注ぎ込んでいる。

溝の口遺跡は貴志川右岸に形成された標高52～54mほどの高さの河成段丘上に立地しているが、もとは扇状地形であったもようで、遺跡の真ん中辺りの標高が最も高い。遺跡の所在する河成段丘は東西約1.5km・南北約0.6kmの大きさがあり、貴志川流域の河成段丘のなかでは最も面積が広い。

遺跡と現在の河床面との比高差は凡そ15mあり、このあたりが貴志川に浸食されたのが相当古いことを示している。左岸側には河成段丘は発達しておらず、河に山裾が迫っている。

周辺の地質構造は中央構造線の外帯である三波川結晶片岩系のうちの鞆淵互層群に属し、優勢な黒色片岩・砂質片岩とその間に挟まれた数枚の緑色片岩・石英片岩層で構成されている。遺跡の立地する表層は扇状地の礫層およびその上に堆積したシルトを基調とする地層である。

2. 既往の発掘調査

この遺跡は昭和26年に故鞠磨正信氏によって発見された遺跡である。このときにも小規模な発掘調査がおこなわれたが、その後昭和40年に大成高校郷土部による確認調査が実施され、この遺跡が縄文時代後期前葉から晩期まで続く縄文時代の遺跡であることが確認された。

昭和56年に宅地造成工事のため第一次発掘調査がおこなわれ、配石遺構・土壙や多数のピット状遺構が発見された。この多大な成果を契機に海南市教育委員会は国庫補助を得て、第二～六次にわたる遺跡の範囲確認調査を実施した。

その結果、多量の遺物とともに縄文時代後期の竪穴住居跡・土器棺墓・ピット群や弥生時代前期の竪穴住居や土壙、古墳時代前期の竪穴住居、平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡や井戸が発見された。この遺跡が複合遺跡であることがわかったとともに、遺跡の範囲や遺跡内での各時代毎の遺構の分布状況が判明した。この成果は既に報告書として公刊されているので参照されたい（海南市教育委員会 1984・1987）。

このように溝の口遺跡は、県下でも計画的に調査が進められた数少ない遺跡である。多数出土した遺物のうち、縄文時代の配石遺構や耳栓・玉類・土偶などの遺物の発見は豊かな縄文文化が

この地にあったことを物語る重要な物証であった。調査例の少ないとあって、今のところ近畿地方の縄文文化の内容は存外貧弱なものにとどまっていたため、溝の口遺跡の成果は研究者によって注目されるところであった。

第2節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

溝の口遺跡の立地する河成段丘の縁辺に沿って農道の敷設が計画されたため、平成5年度に路線予定地内を海南市教育委員会が試掘調査をおこなったところ、周知の遺跡内全域で出土遺物や遺構が確認された。そのため関係諸機関が協議の上、今次の発掘調査の範囲を確定した。

発掘調査は二ヶ年にわたり、年度毎の調査の範囲は第1図に示したとおりである。94年度に調査したD14区は、当初は95年度の調査範囲であったが、諸般の事情で急に94年度に調査することになった。そのため時間的な制約が大きな障害となり、調査の精度に少なからず影響した。

なお、D14区とD15区の間は現有道路にあたるため、工事と平行して県教委・海南市教委が立会調査で対処した。その結果、この部分でも縄文時代のピット状の遺構が多数検出された。

2. 調査の方法

a. 地区割り

調査にあたっては国土座標軸を基準線に用いた4m方眼を設定した。具体的には第1図に示したとおりで、100m区画名と4m区画名を組み合わせて地区名とした。この地区名は遺物の取り上げの単位でもある。

b. 掘削

後にふれる第1・2層はバックホーで掘削し、その後は人力による精査をおこなったが、年度によっては第3層まで機械掘削が及んだところもある。

c. 出土遺物の扱い

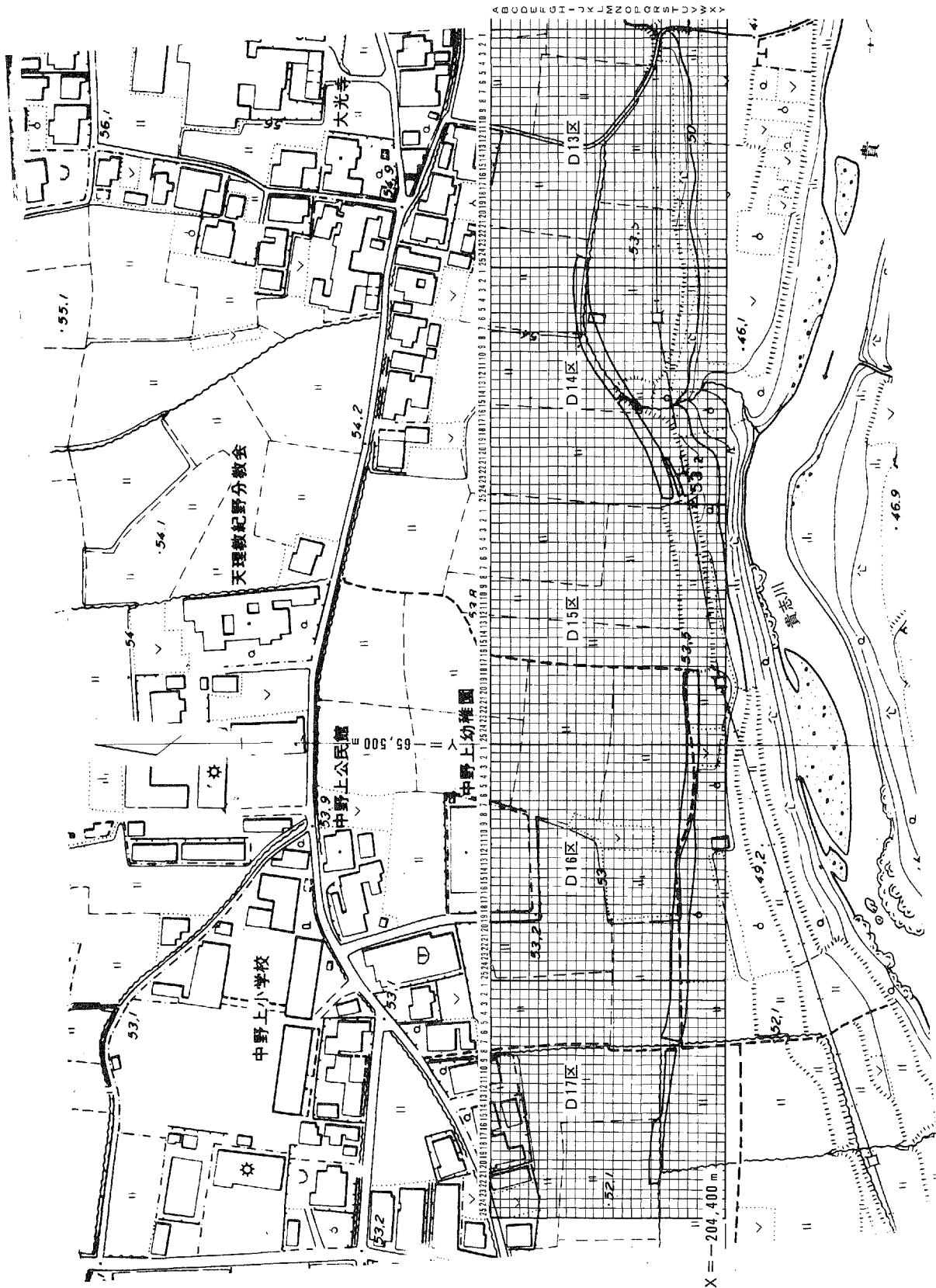
各年度毎に遺物の取り上げ単位（袋・コンテナ）に1番からのシリアル番号（登録番号）を与える、台帳を作成して管理した。

整理作業に際しては、この台帳の項目に遺物の種類や時期区分及び数量等を追加してパソコンに入力した。遺物接合作業や集計及び分布図の作成や層位の検討にはこの電子台帳は威力を發揮した。実測した遺物は登録番号に枝番号を与えて管理している。

遺物の注記は年度（94・95）と遺跡略号（02・33）と登録番号および枝番号を記入した。

第3節 遺跡の概要

この遺跡では海南市教育委員会が国庫補助事業として詳細分布調査を実施しており、遺跡のあ



第1図 地区割り

らましは判明していた。今回の調査の結果もおおまかには、過去の知見を追認するものであるが、今までの成果と併せて遺跡の概略を述べておく。

遺跡の規模は東西約500m・南北約200mと推定されており、今回の調査は遺跡の南端に遺跡の東西幅いっぱいに長いトレンチを設定したものということができる。その結果、遺跡内での時代毎の生活空間の変遷がよくわかった。

この遺跡は段丘化する前は南北に中心軸のある扇状地であった。水田化のおりに旧地形は改変されて今では分かりにくくなっているが、扇状地形の中心軸は調査の地区名にしたがうとD15・16区に相当する。このへんの一部の地域は水田化のために地盤が削られているため、遺物包含層は遺存していないし遺構の上部も削りとられている。そのため、D15区から16区にかけての範囲では遺構の数は少ない。

一方、扇状地の傾斜面にあたる部分は遺物包含層が遺存していた。D14・13区とD17区である。これらの範囲に遺存した遺物包含層の大部分は、中世以降に再堆積したもので、古い時期の遺物包含層はD14区西半部に遺存していただけであった。

このように、調査地の遺構の遺存状況には、水田開発の際に加えられた地形の改変がかなり影響しているが、調査地全域で多数の遺構が検出された。検出された遺構は縄文時代から中世にかけての時期のものであるが、縄文時代・弥生時代のものが多数を占める。そして、これらの遺構の時期別の分布状況は顕著な傾向を示している。

1. 遺構・遺物の時期別分布

第2図は所属時期の判明した遺構を時期別に示したものである。縄文時代の遺構はD14区の西部からD15区にかけての部分に集中しており、弥生時代の遺構はD16・17区に集中する。古墳時代の遺構はD16区で土壙状のものが見つかっただけで、分布の傾向をみることは出来ない。中世の遺構は密度こそ高くないが全域に分布している。

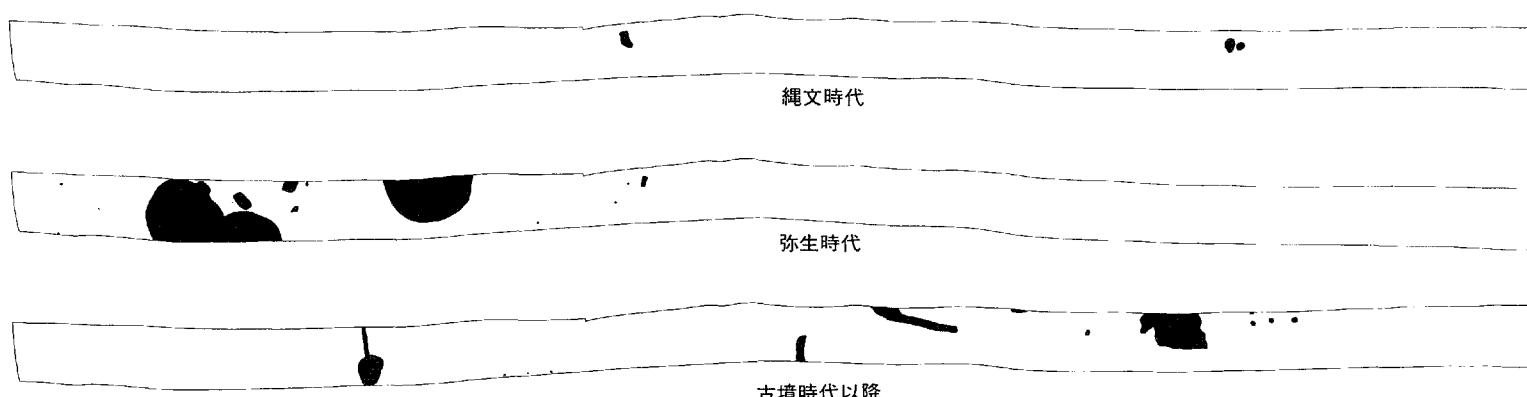
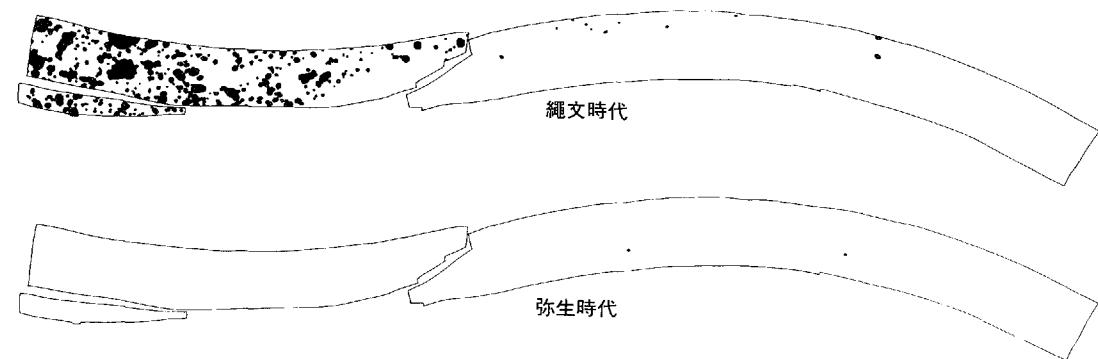
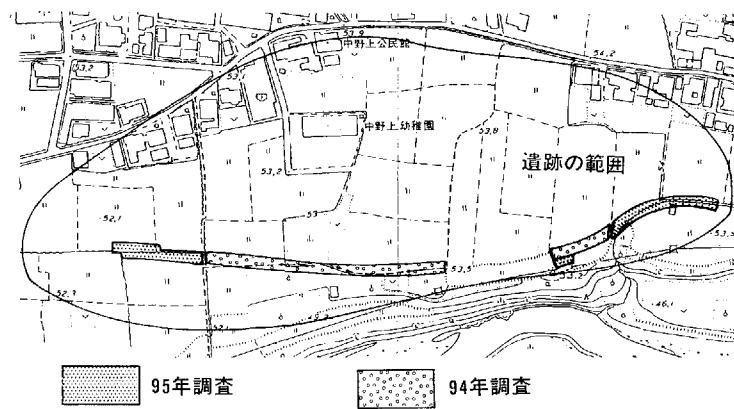
第3図は出土遺物の種別数量を地区割り大区画にしたがって示したものである。なお、出土遺物の種類で、土師器と分類した土器の殆どは平安時代中期から中世のものである。また、この図では面積の少ないD13区はD14区と合計して示している。

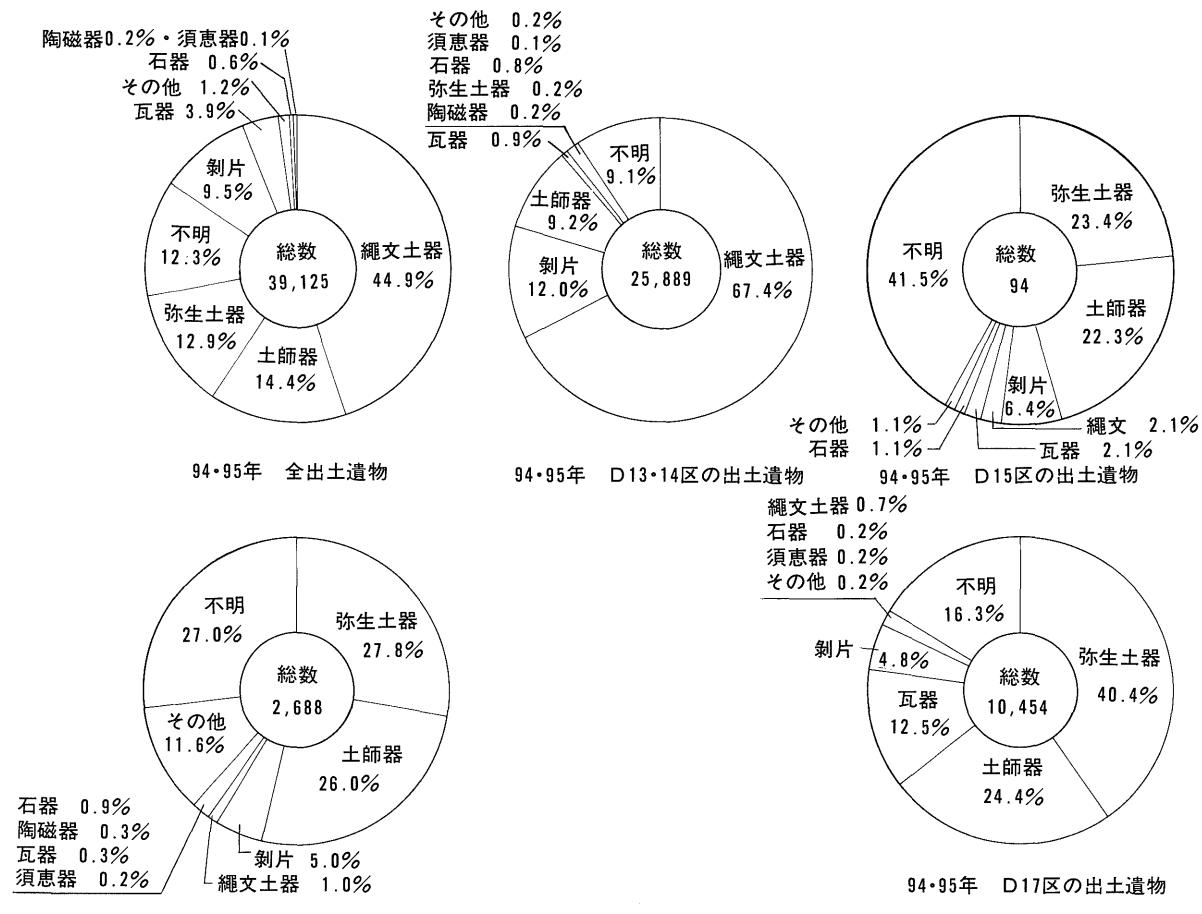
第4-1・2図は出土遺物の種類別の平面的な度数分布を4m地区別に示したものである。第3・4図とも第2図に示した時期別の遺構分布傾向を如実に反映しているといえるが、第4図をもうすこし検討してみる。

縄文時代の土器はD13・D14区に集中する。少数の中期に属する遺物はあるが、後期前半の北白川上層1期から遺構・遺物の量が増える。その後、晩期の滋賀里IIIb式までは一定量の遺物を出土するが、突帯文の時期になると遺物の量は激減する。

2. 突帯文土器の分布

第2図 遺構の時期別分布





第3図 出土遺物の数

突帯文の時期の遺物の平面分布は☆印で示した。☆印は縄文土器の集中する地区よりも、むしろD17・16区に多く見られる。D17・16区は弥生時代の遺構や遺物が多く分布する地区である。D17・16区で出土した突帯文土器はすべて舟橋式の土器で、口唇部に刻み目のある滋賀里IV式の土器はD14区で1点出土しただけである。舟橋式の土器は全部で17点あるが、そのうち15点がD17・16区から出土したもので、しかも5点が弥生時代の竪穴住居跡2-551からである。この竪穴住居は畿内第I様式の新段階に比定できる。このような事例は昭和61年度の調査でも確認されている。

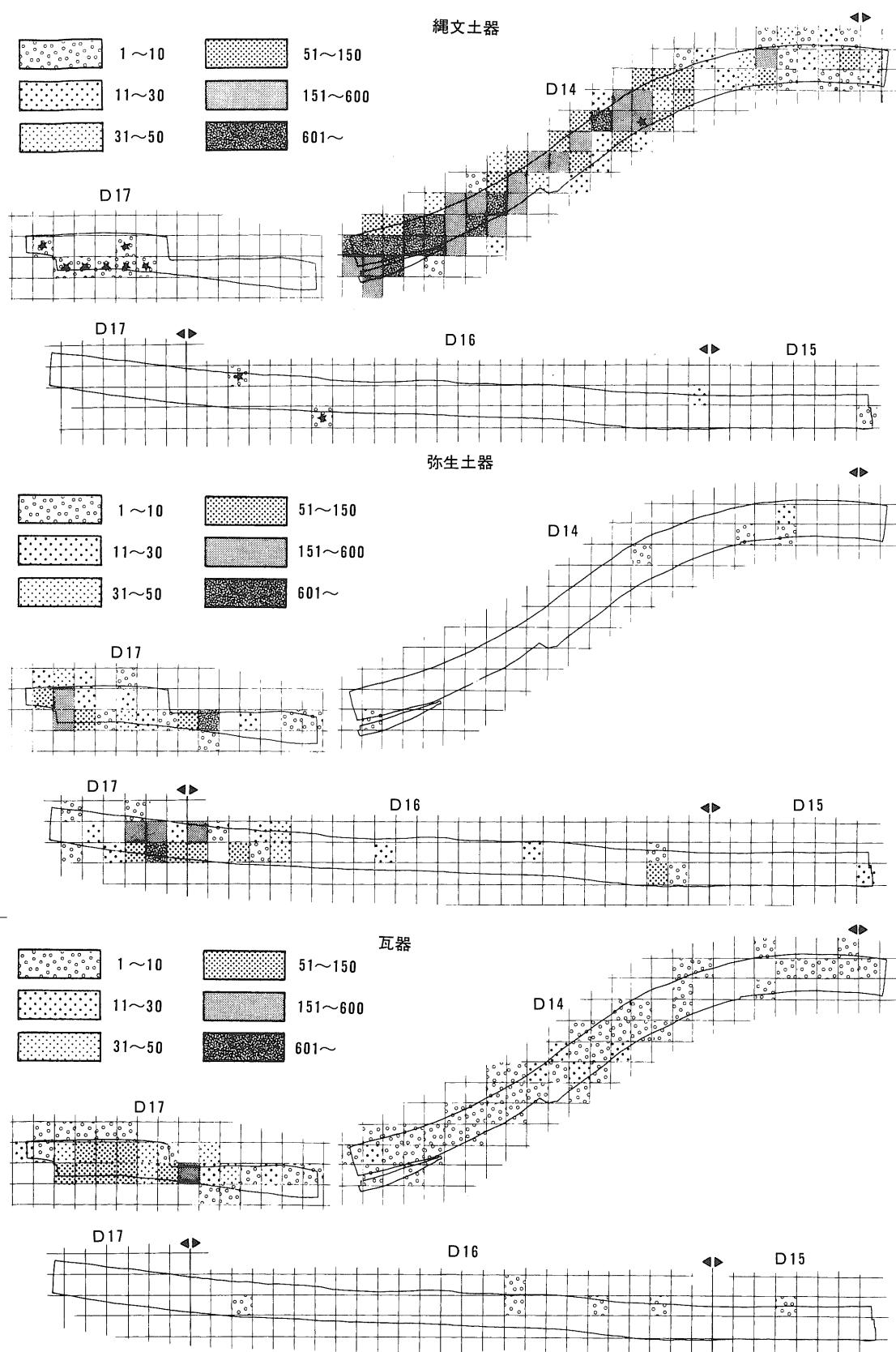
つまり、この遺跡のなかで縄文時代と弥生時代の生活空間が大きく異なることが認められるならば、ここでは縄文晩期の舟橋式の土器は弥生時代前期末の土器と共に伴している公算が大きいといえる。

3. 縄文時代の遺構

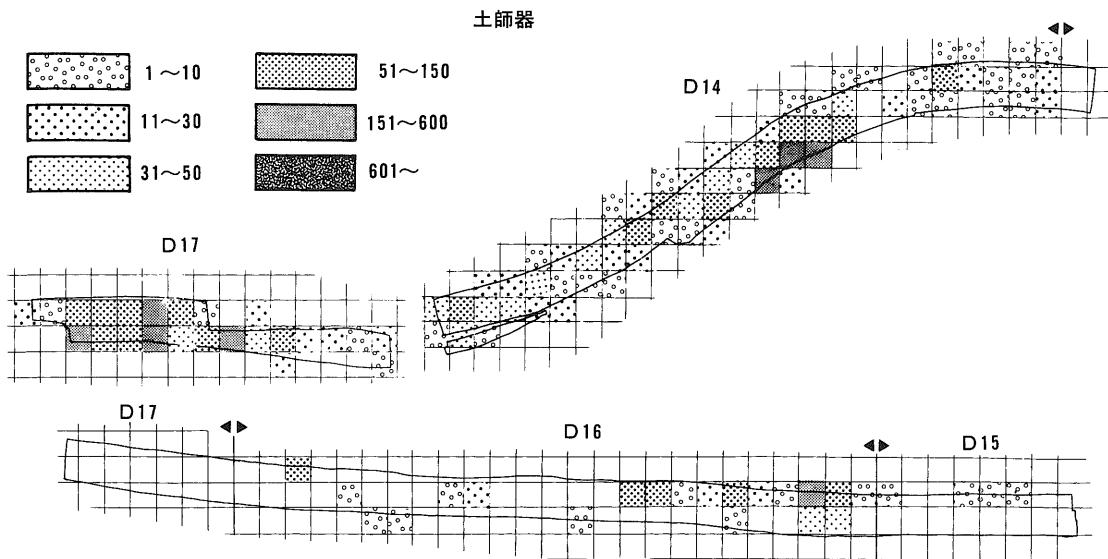
縄文時代の住居跡は昭和59年度の調査で、竪穴住居が一棟みつかっているに過ぎないが、D15区に居住域が求められよう。一方、土器棺を顕著な遺構とする墓域は、D14区西部の段丘縁辺近くに造られている。昭和56年度の調査でみつかった配石遺構もD15区にある。

4. 弥生時代の遺構

弥生時代は今のところ前期の新段階からはじまり、畿内第III様式までの竪穴住居跡は都合六棟



第4図-1 土器の平面分布



第4図-2 土器の平面分布

見つかっている。弥生時代の中心時期は中期前半で、遺構・遺物の分布の中心は遺跡の西側になる。弥生時代後期になると遺構・遺物も殆ど見られなくなるが、少数の遺物がD14区の東側から出土している。

5. 古墳時代以降の遺構

古墳時代になると昭和57年度の調査で前期の竪穴住居跡が一棟検出されているが、遺構・遺物の数はすくない。今回の調査でもD16区で前期のものとおもわれる土壙が1基見つかっているだけである。

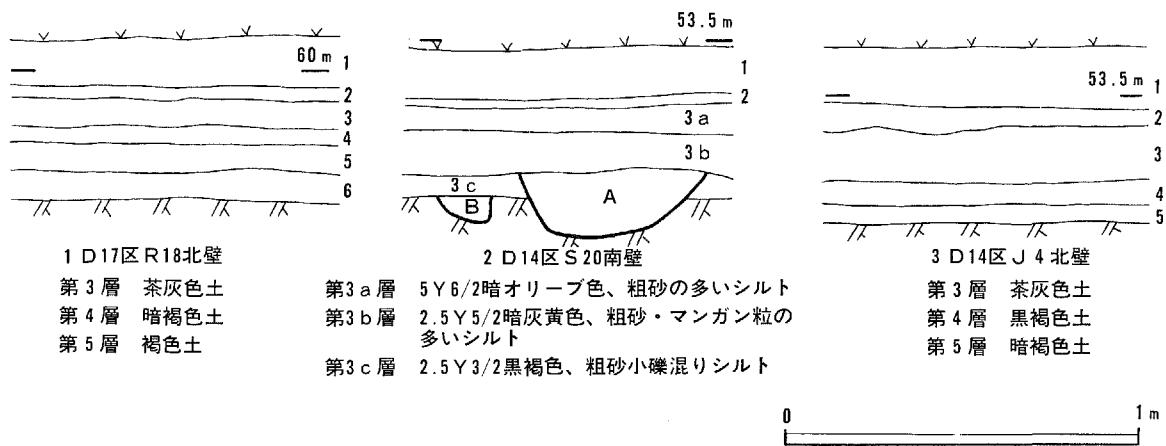
平安時代の掘立柱建物は、昭和56年度の調査でD15区の南部で計三棟みつかりっているだけであるが、この時期の遺物は遺跡の全域から出土する。したがって、数棟の掘立柱建物で構成されるような規模の単位集団が遺跡の全域に散在しているものとおもわれる。

中世の遺物は全域で出土し溝やピット状の遺構は見つかっているが、今まで中世集落の所在は明らかではなかった。今回の調査では、D17区で屋敷地の区画溝と掘立柱建物とおぼしき柱列が見つかった。さらに、中世後期のものとおもわれる鉄釜鋳造遺構も発見された。

そして、鉄釜鋳造遺構が廃絶されてからは顕著な遺構は見つかなくなる。中世後期以降、付近一帯の大規模な水田化がおこなわれたものと推定できる。やがて遺跡の景観は今日の村落景観とさほどかわらぬものになったのであろう。

第4節 基本層序

溝の口遺跡では過去数回の調査がおこなわれているが、各調査毎に基本層序の層名が違ってい



第5図 基本層序

て整合していない。そして、不整合は単に呼び方の違いにとどまらず、基本的な層序の概念にも混乱を生じている。したがって本報告をまとめるにあたって、まず既往の調査の層序概念の整理をはかっておきたい。

1. 調査で使用された層名 第5図 第1表

第1層（表土・整地土・耕作土）と第2層（床土）については、全ての調査で層名および概念に混乱はない。問題はそれより下層の堆積層の分である。今までの代表的な調査で使用された層名と包含された標識遺物を、今回の地区表示の大区画にしたがって表1に示した。

第1表 調査で使用された層名と標識遺物

D13・14区				D17区			
海南市	標識遺物	センター94年	標識遺物	センター95年	標識遺物	センター95年	標識遺物
第3層	瓦器	第3a層	瓦器	茶灰色土	瓦器	茶灰色土	瓦器
		第3b層	瓦器・青磁	黒褐色土	瓦器	暗褐色土	瓦器
	縄文土器	第3c層	縄文土器	暗褐色土	瓦器		
第4層	無遺物	第4層	無遺物	地山	無遺物	地山	無遺物

なお、センター94年度（以下センターを省略）の調査ではD15・16区には遺物包含層は遺存していないかったので今回は検討対象にしない。D17区の遺物包含層については、海南市の調査では弥生時代の遺物包含層の存在の可能性が指摘されているが、今回の調査では瓦器を包含する層しか検出されなかった。

94年度調査第3a・b層と海南市の第3層の所見は、グライ化された土質と鉄分沈澱層の存在および出土遺物からみて、中世後期を上限とする水田耕作層ということで一致を見ている。D17

区の95年度茶灰色土も同じ土層であろう。問題となるのはD13・14区の地層である。

2. 縄文時代の遺物包含層 PL-3

94年度調査のD14区では第4層無遺物層の上部に第3c層が堆積しており、さらにその上部に第3a・b層が堆積していた。第3a・b層は調査区の全面にみられるが、第3c層は段丘の形に沿うように調査区の南側および東側に遺存していた。南側の厚い部分では12cm程の厚さがあるが、北西の部分には遺存していない。

第2表 第3a～c層の遺物の組成

	縄文土器	須恵器	土師器	瓦器	陶磁器	不明土器	石器	剝片	その他	計
第3a・b層	1,370	19	617	100	6	723	61	901	7	3,804
第3c層	1,272	1	8	2	0	20	28	298	1	1,629

第2表に94年度調査の第3a・b層と第3c層に包含される遺物の組成と数量を示した。

この遺物の組成・数量から見るかぎり、第3c層は第3a・b層とは別の層と認定することができる。第3a・b層に包含されている遺物は水田耕作のせいで摩耗が著しく、そのため、この層中の不明土器の比率は大きい。第3c層に包含された土師器や瓦器はその数量から見て、上部層の凹みの残りがあったか、土師器や瓦器の時代の遺構を上部で検出できなかったかの何れかとみることができる。

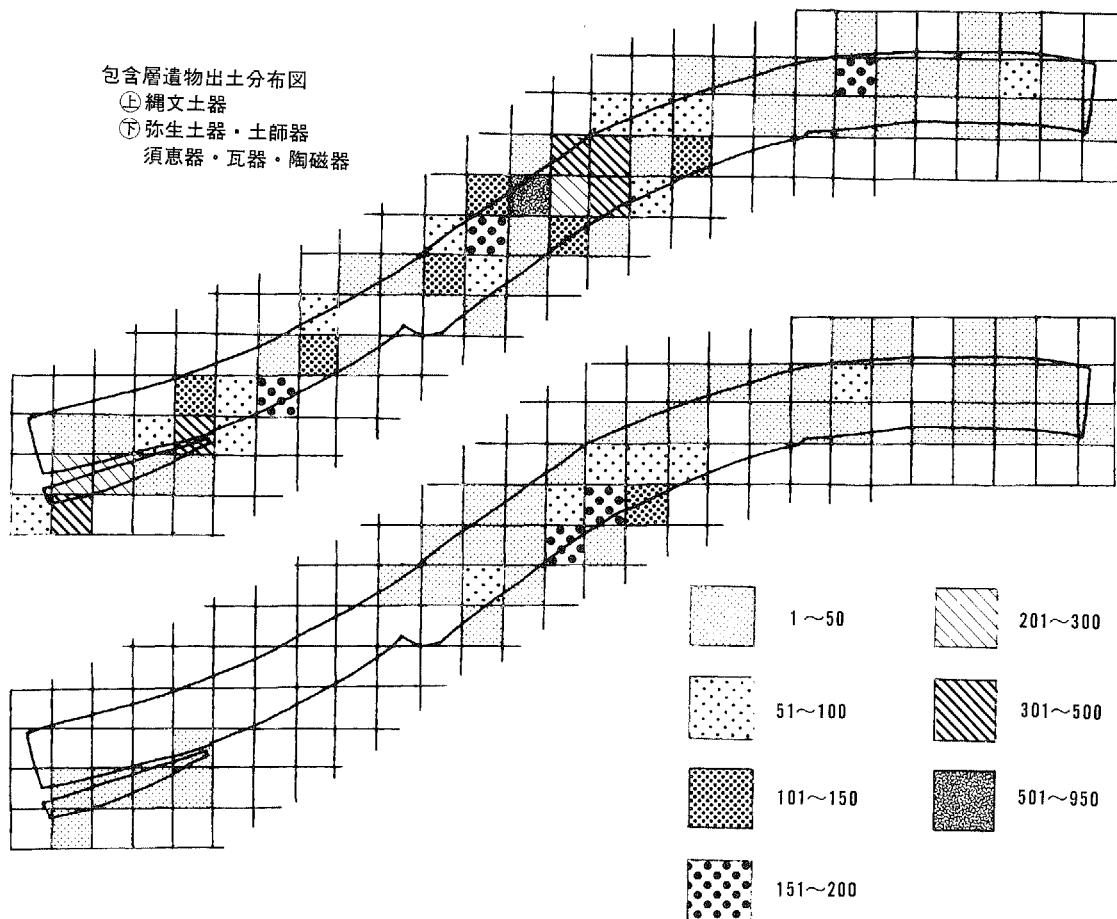
つまり、第3c層は縄文時代の遺物包含層と見ることができる。海南市の第4層は包含された遺物の組成・数量は定かではないが、報告書によると縄文時代の遺物包含層と記されており、土質や色調からみても第3c層と同一の地層とみることができる。

一方、95年度の調査では古い水田耕作層の下層にある地層は、黒褐色土・暗褐色土の二層に分層されている。この二つの地層に包含された遺物の組成と数量は第3表の如きである。

第3表 黒褐色土・暗褐色土の遺物の組成

	縄文土器	弥生土器	土師器	瓦器	不明土器	石器	剝片	計
黒褐色土	1,420	14	507	35	496	6	197	2,675
暗褐色土	2,601	0	244	16	156	13	224	3,254

黒褐色・暗褐色土とも相当数の瓦器や土師器が包含されており、両層とも中世以降の堆積層ということになるが、土層図を接合したところ、調査区の北壁では第3c層と黒褐色土は連続する地層ということになり、調査区の南側では94年度の第3c層と95年度の暗褐色土は同一の地層となる。95年度の調査における基本層序は、海南市の調査および94年度の調査の所見とは明かに矛



第6図 D13・D14区包含層出土遺物の分布

盾することになる。なお、95年度の調査では、94年度の第3a・b層に相当する層のほとんどを重機で掘削したため、この層の資料は数量を提示するほどの量はない。

第6図にD14・15区の遺物包含層出土遺物の平面的な分布状況を示した。上述の矛盾点が明瞭に現われている。次にこの問題を別角度から検討してみる。

3. 遺物包含層と遺構の検出状況

94年度の調査で発見された縄文時代の遺構には、第3c層の上面で検出されるものと、第4層の上面で検出されるものとがあった。第3c層の遺存状況と時間的な制約で、両者を層位的に完全に識別することはできなかったので、遺構の埋土の区分に留意して調査をおこなった。

このデータをもとに、埋土の違いと新旧の関係および出土遺物からみた遺構の所属時期に相関関係があるかどうかをみることにする。

検出された縄文遺構の埋土は、A-10YR3/1黒褐色砂質シルト・B-10YR3/3暗褐色砂質シルト・C-AおよびBにブロック状の第4層が多量に混入したもの、と三種に大別できた。Aに相

当するものが141基でBは315基、Cは104基ある。

a. 第3c層上面検出の遺構

土層の断面観察で確実に第3c層上面で検出できる遺構は8基あり、埋土区分にしたがえばすべてAである。このうち、出土遺物で所属時期のわかるものは4基あり、すべてが晩期に属する。

b. 第4層上面検出の遺構

同様に断面観察の結果、第3c層の下すなわち第4層上面で見つかることが確実な例は26例ある。埋土の区分ではAが5基、Bが17基、Cが4基である。出土遺物から所属時期が判明するものは後期に属する1例しかなく、その埋土の区分はBである。

c. 出土遺物と埋土

次に出土遺物からみた所属時期と埋土の関連をみてみる。埋土Aに区分できる遺構の内45基の所属時期がわかり、後期に属するのが24基で晩期が21基ある。埋土Bに区分できる内、49基の所属時期がわかり、後期が36基で晩期が13基となる。埋土Cに区分できるものの内、後期が5基で晩期が3基ある。埋土Bに区分できるものには後期が多いといえる。

d. 遺構の重複関係と埋土

埋土区分と遺構の重複関係を検討する。埋土AとBではAの方が新しい例が30で、Bのほうが新しいのは13例である。AとCでは、Aが新しいのが10例で、Cが新しいのは1例。BとCでは、Bが新しいのは7例、Cが新しいのは11例である。BとCについてははっきりしないが、B・Cに比べてAの埋土が相対的に新しいといえる。

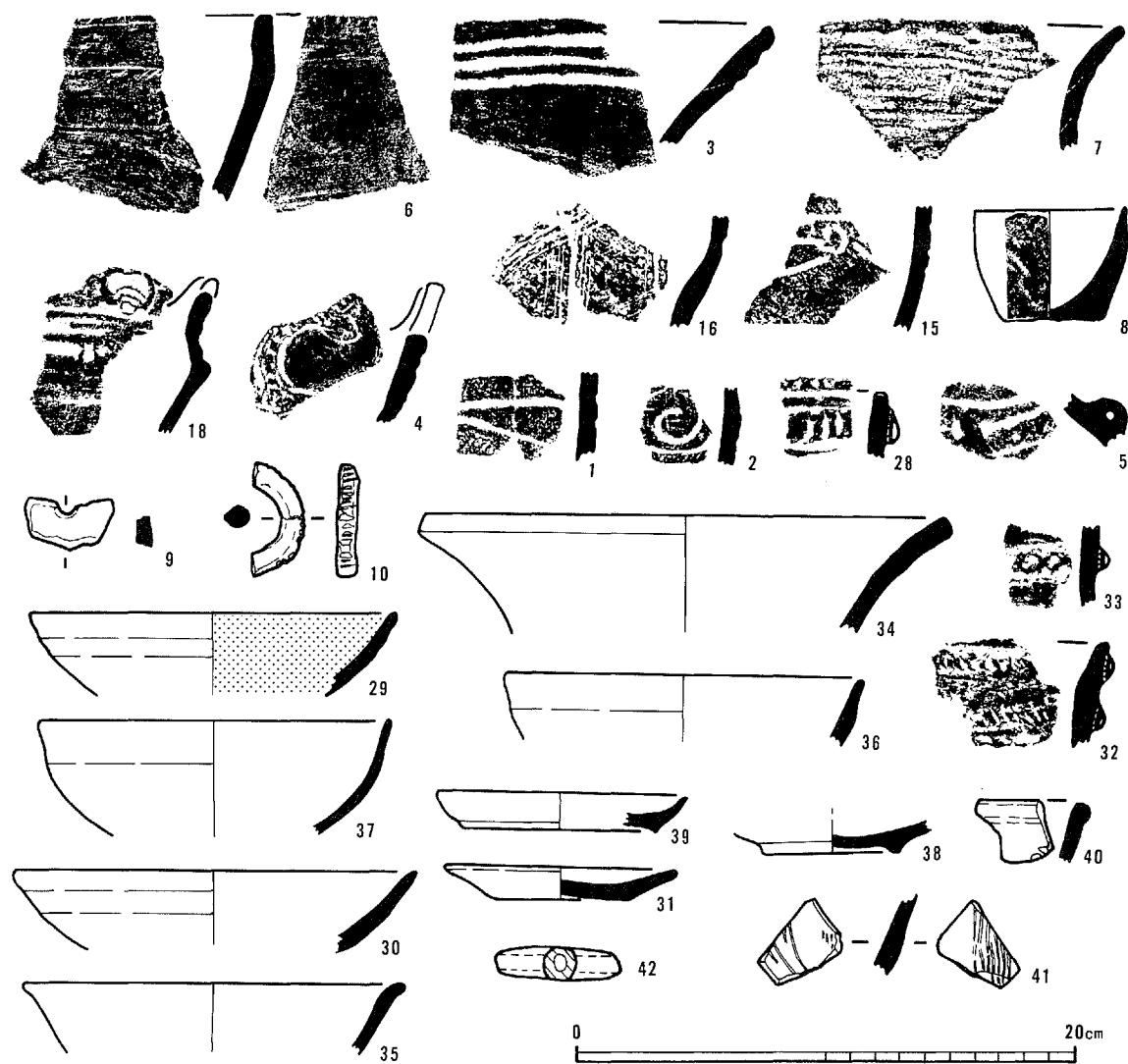
以上a～dがD14区の第3c層と縄文遺構の関係を示す資料である。埋土区分の判定誤差と晩期の遺構でも後期の遺物しか判別できないケースがあることを勘案すると、埋土Aに区分できる遺構は他の遺構より新しく、その所属時期は晩期である公算が大といえる。そして、晩期の遺構は本来は第3c層上面で検出されるものといえよう。

95年度の調査でも土器棺2-1008の検出状況は、この遺構が暗褐色土の上面から掘り込まれたものであることを示しており、上述の第3c層の検討の正しさを裏付けている。つまり、センター-94年度第3c層は95年度暗褐色土と同一の地層とみることができる。

第3c層中に含まれられた縄文土器で所属時期のわかるものは少ないが、後期に属するものが17点で、晩期に属するものが4点あるが、上述のa～dを考慮すると、晩期に属する遺物は第3c層上面で検出することに失敗した遺構に含まれていた公算が強いとみられる。そうだとすると、第3c層は縄文時代後期の遺物包含層であると考えられる。

遺構の検出状況から95年度黒褐色土を検証する術はないが、暗褐色土についての疑問からみると、黒褐色土は二次堆積層であったためと言わざるをえない。

4. 遺物包含層出土遺物 第7・8図 PL-14～17



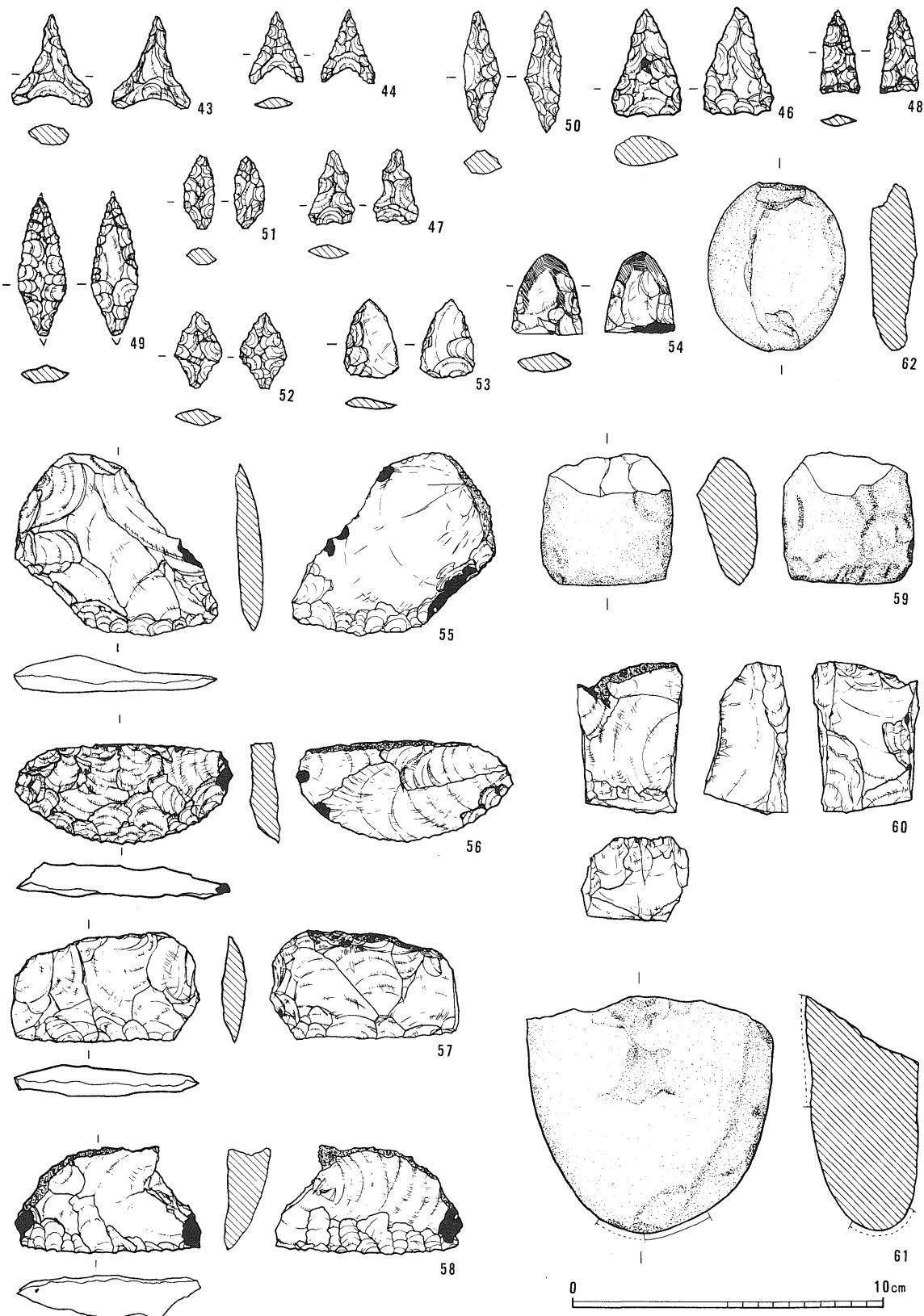
第7図 遺物包含層出土遺物

第7・8図に各々の地区・層に包含される代表的・もしくは注意が払われる遺物を図示した。

第3c層から出土したのは北白川上層式の（1・2）や元住吉山I式の（4・6）、宮滝式の（3）など縄文時代後期中葉から後葉のものが多く、滋賀里3b式の（7）など晩期のものは少数である。第3c層は縄文後期の遺物包含層である公算が大で、少数見られる晩期の遺物は晩期に属する遺構内の遺物を混入させてしまったものと見られる。

（5）は凹線で強調された隆帯の上に凹線を巡らせて橋状の突起がつく。（8）はミニチュアの鉢。（9）は穿孔のある土器片で、紡錘車もしくは補修痕であろうが判断できない。（10）は刻み目のついた環状の土器片。以上四点は珍しいので図示した。

95年度暗褐色土出土遺物には縄文時代後期の北白川上層式（15・16）、宮滝式（18）など後期の土器が多く、（1001）のような晩期に属するものは少数である。この他、この層中からは弥生時代



第8図 遺物包含層出土石器

後期の高杯や瓦器椀・土師器皿など、縄文時代より新しい時代の遺物が相当数出土しているが、先に検討した如くこれらの遺物は混入品の疑いが強いといえる。

95年度の調査区でD14L～P・9～15付近で埋め立てられた谷状の地形を検出した。この地形は現在の水田の形状にも現われている。谷状の地形の埋上からは、縄文土器（28）のほか10世紀後半の黒色土器A類の椀（29）、13世紀の瓦器椀（30）や12世紀もしくは13世紀の土師器皿など出土している。周辺の遺物包含層で谷を埋め立て、水田を形成したのであろう。その工事の上限が13世紀ということになる。滋賀里IV式の土器（28）は非常に少数である。

D17区暗褐色土からは以下のような遺物が出土した。突帶文土器（32・33）のうち、二条突帶の（32）は船橋式のものである。このほか弥生時代中期の（34）、10世紀代の灰釉陶器（35）、12世紀の瓦器椀（36～38）や土師器皿（39）、12世紀の白磁椀（40）や13世紀の柳書き割花文の青磁椀（41）がある。棒状の土錘（42）も相当数出土している。

遺物包含層出土石器 第8回 PL-15・16

ここでは上記の各遺物包含層および新しい時期の遺構から出土した石器類をまとめて紹介する。（59・61・62）以外はすべてサヌカイトが素材となっている。

石鎌（43～53） 基部の形態から、四基式（43・44）・平基式（46～48）・凸基式（49～52）に分類できるが、平基式は図示した三種、凸基式も（49・50）と（51）それに（52）の三種に細分可能である。細分した形態の石鎌は、それぞれ複数以上の数量が出土しており、型式が成立するものとみられる。石鎌の分類とその有意性については第III章で検討する。（53）は平基式の石鎌の未製品であろう。

石剣（54） 先端部分しか遺存していないが、局部磨製の石剣とみられる。

削器（55～58）（55・56・58）は縦長剥片、（57）は横長剥片を素材にして、一側刃に刃部をつけたもので、いずれも一部に原礫面をのこす。（58）の刃部調整は押圧剥離によるものとみられる。

石斧（59） 打製石斧の先端部分とみられる。縞模様があるが素材は砂岩とみられる。

石核（60） 不定形な横長剥片を多方向から作出了したので、一部に原礫面を残す。

凹み石（61） 叩いた痕・叩かれた痕（点線で表示）および擦過痕（実線で表示）が認められ、多目的に使用されたことがわかる。頁岩が素材。

石錘（62） 打ち欠き石錘が1点だけ出土した。頁岩が素材。

第II章 調査の成果

以下、調査で見つかった遺構およびその出土遺物について、時代別に記述していく。なお、第40図に時代別の遺構の分布状況を示した。本章で記述していない遺構の所属時期・平面位置についてはこの図を参照されたい。

第1節 縄文時代 PL-3~7

縄文時代の遺構はD13・14区に集中しているが、一部はD15区でもみつかっている。その総数は477基に達するが、土壙状・ピット状の遺構ばかりで住居跡は見つからなかった。出土した遺物はまとまりを欠いた小破片の場合が多くて遺構の所属時期の判定精度は良くないが、第40図に時期別の遺構分布を示した。これについては第III章で触ることにする。

調査で発見された遺構のうち土壙状のものには、形態や配石の有無あるいは埋土の特徴によって、いくつかの種類に分類できるものがある。それが直ちに遺構の機能や用途を物語るものとは限らないが、分類に即して記述を進める。

1. 土器棺 PL-3

小規模な土壙のなかに深鉢を埋納したものが合計6基あり、これらは土器棺墓とみられる。そのうち埋納した深鉢の底部を打ち欠いたものが4基あり、蓋とみられる別の深鉢の大破片や浅鉢の大破片が出土したものが2基ある。これらのうち5基は調査区の北側に集中しており、4基は直線的にならんで見つかっているが、埋納した深鉢の向きに規則性は認められない。埋納された土器は何れも晩期の滋賀里IIIb式に比定できる。

597 第9図 PL-3・17・18

D14 R22。長径約0.61m・短径約0.46m・深さ約0.30mの規模の土壙を掘り、深鉢(63)を横にして埋納している。深鉢は南北方向に置かれ、口縁部は南にある。(64)の大破片が(63)の内部に落ち込んでおり、これは蓋につかわれたものとみられる。

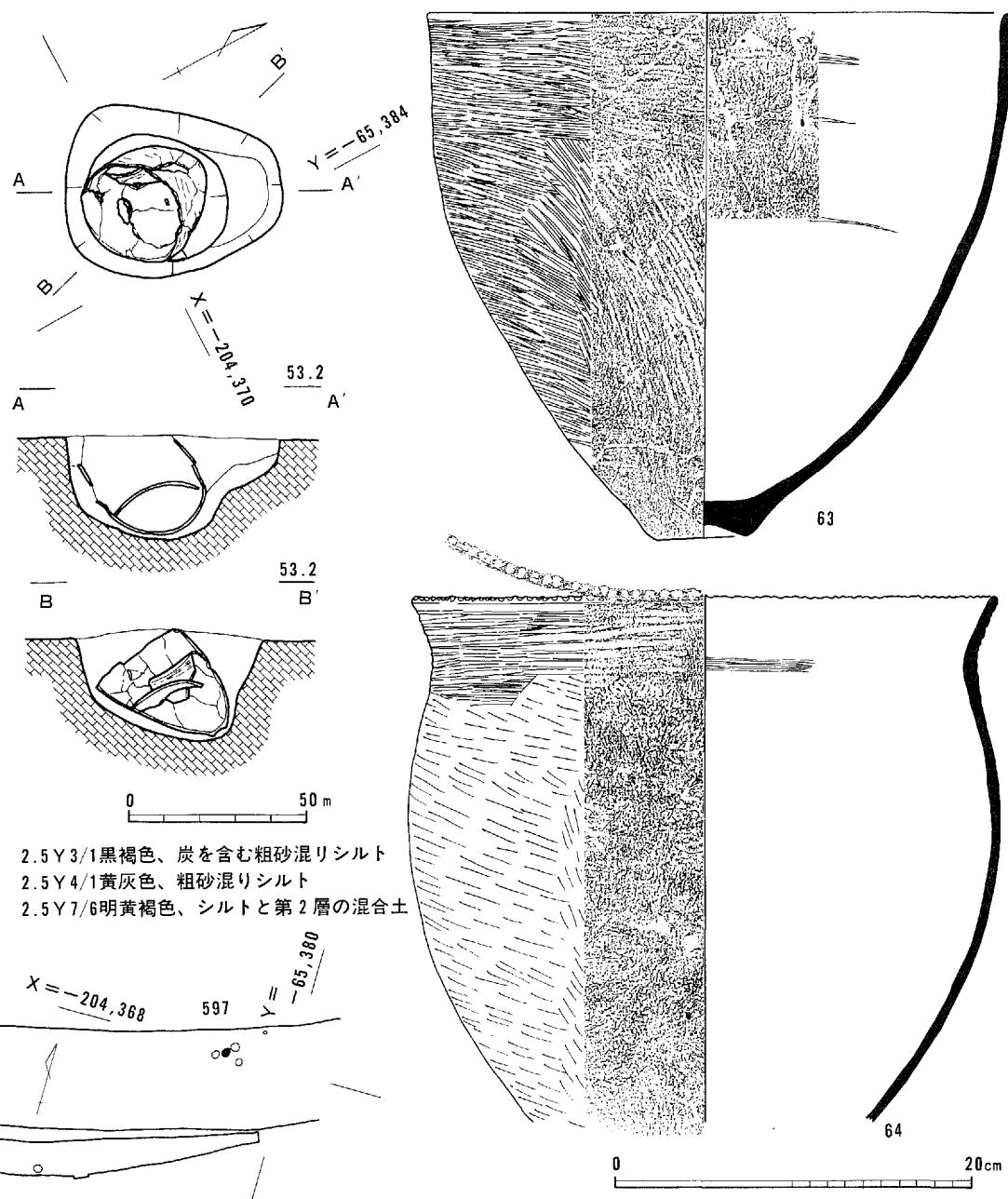
(64)は口唇部に棒状工具で刻み目をつける。内面には一次調整の刷毛目状の痕跡がみられるが、これは二枚貝の殻頂部の条痕とみられる。

652 第10図 PL-4・17

D14 R21。長径約0.67m・短径約0.42m・深さ約0.24mの規模の土壙を掘り深鉢(65)を斜めに埋納している。深鉢は東西方向に置かれ、口縁部は東にある。深鉢の底部を打ち欠いている。

2-1008 第11図 PL-4・17・18

D14 T25。長径約0.82m・短径約0.62m・深さ約0.36mの規模の土壙を掘り、深鉢(66)を横に



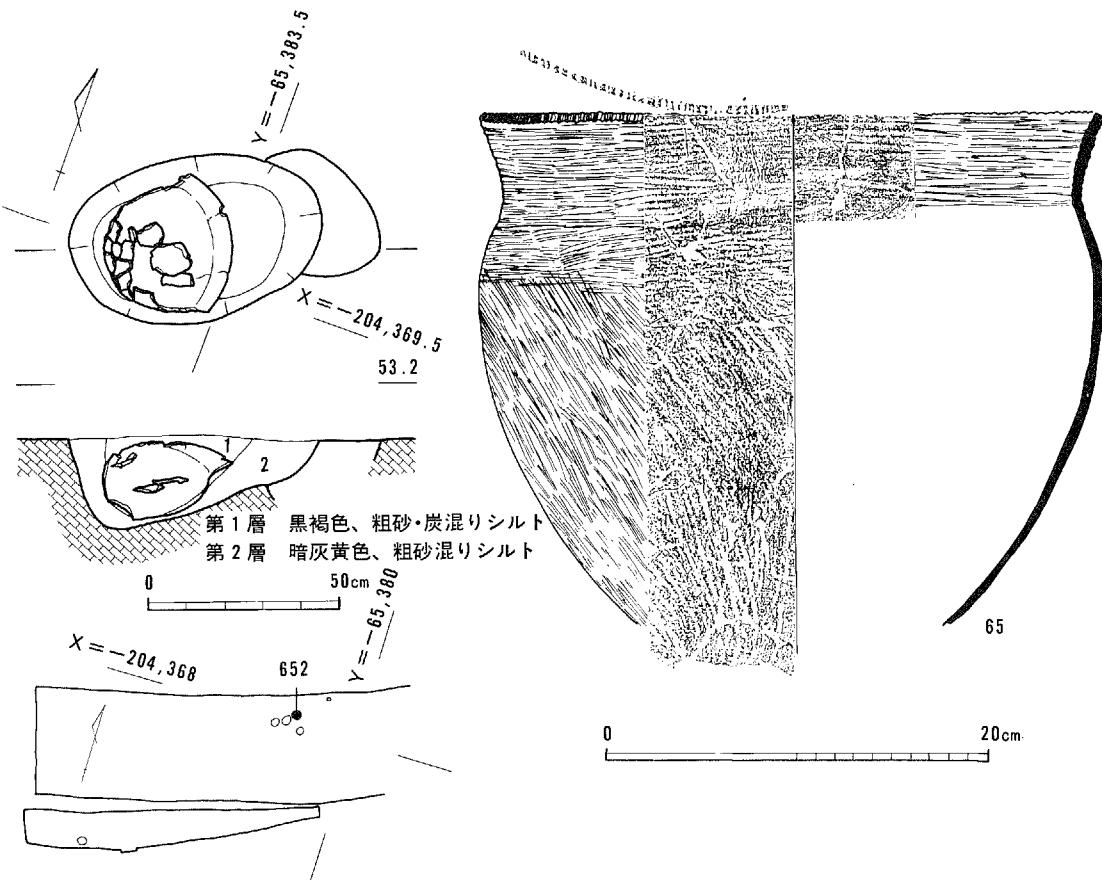
第9図 土器棺 597

埋納している。深鉢は東西方向に置かれ、口縁部は東にある。浅鉢（67）の大破片が深鉢の底部近くで出土した。これは蓋に使われたものが埋納の時に転落したものであろう。

この遺構は第4層上面で検出したが、深鉢の一部はそれよりも凡そ20cm上部に突出している。また、付近の暗褐色土として採集された土器片の一部が深鉢と接合した。したがって、この遺構が掘り込まれたのは暗褐色土上面すなわち第3c層上面とみられる。

666 第12図 P L-4

D14R21。長径約0.49m・短径約0.41m・深さ約0.12mの規模の土壙を掘り、底部を穿孔した深



第10図 土器館 552

鉢を斜めに埋納している。口縁部を欠くため詳細は不明であるが、深鉢は南北方向に置かれ、口縁部は北にあるようである。

598 第12図 PL-4

D14 R22。長径約0.45m・短径約0.36m・深さ約0.17mの規模の土壙を掘り、底部を穿孔した深鉢を斜めに埋納している。体部の上半と口縁部を欠くため、埋納の向きは不明である。

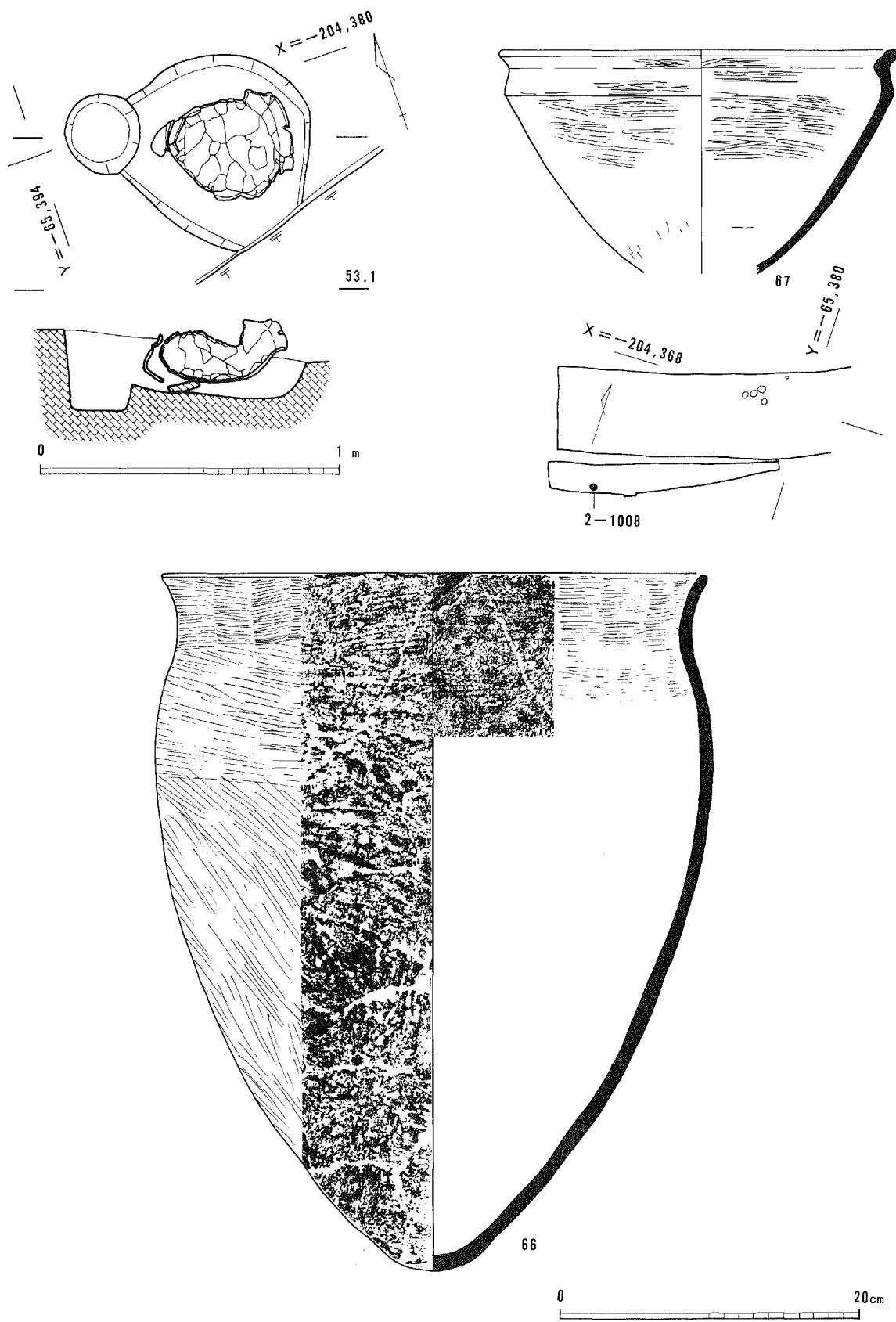
638 第12図 PL-4

D14 R21。底部を穿孔した深鉢を埋納したものだが、底部しか遺存していないため詳細は不明である。埋納された深鉢は遺存状況が悪く復元できなかった。

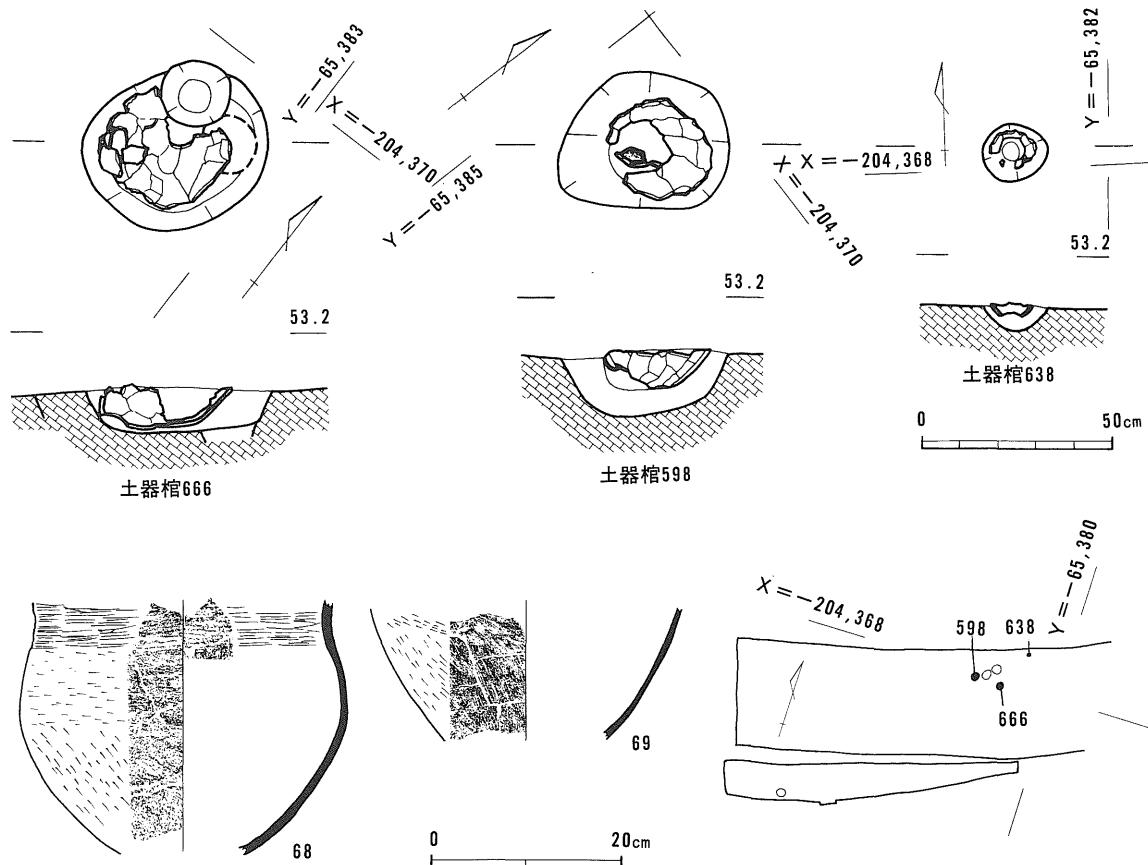
2. 大規模土壙 PL-5

長径が5mをこえる規模の土壙が2基みつかっている。これらには、以下の点が共通している。ア、土壙の底は疊層に達している。イ、壁の立ち上がりは急角度で、オーバーハングするところすらある。ウ、壁の近くは第4層（地山）に近似した地層が、周囲から流れ込んだように堆積し、中心部には黒褐色系の土層が堆積している。

このような特徴を有した土壙は、粘土採掘孔であるとの考察（京嶋1995）があり、本例もその公算が強いとみられる。



第11図 土器棺 2-1008



第12図 土器棺 598・638・666

558 第13~15図 P L - 5 · 19 · 20 · 24

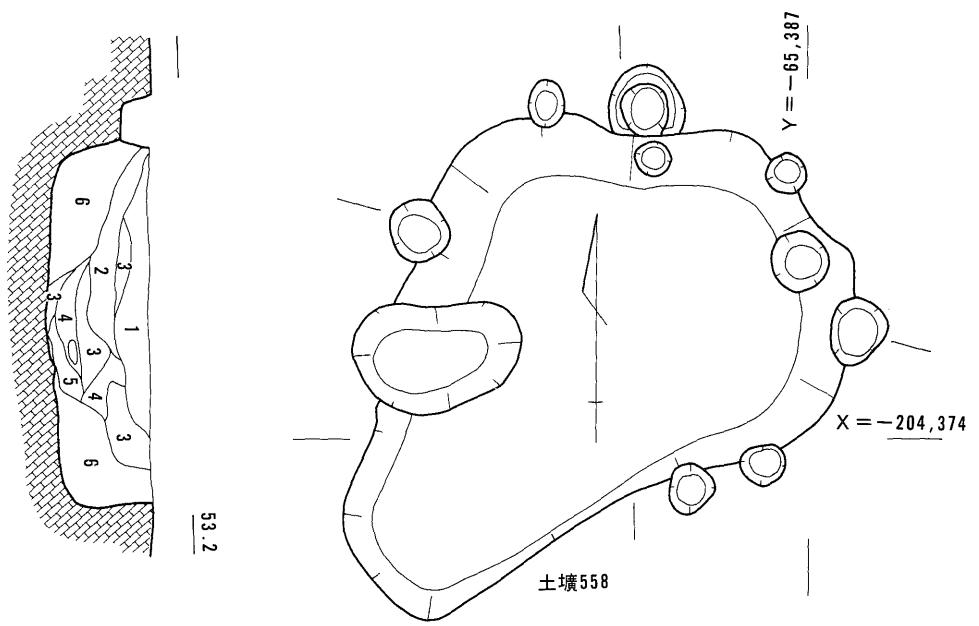
D14 S 23。長径約6.00m・短径約4.40m・深さ約5.40mの規模。埋土に炭や焼土粒を含む。埋土から計1,296片の土器・石器5・剝片105が出土しているが、埋土第6層から出土した遺物は少ない。

558 出土遺物

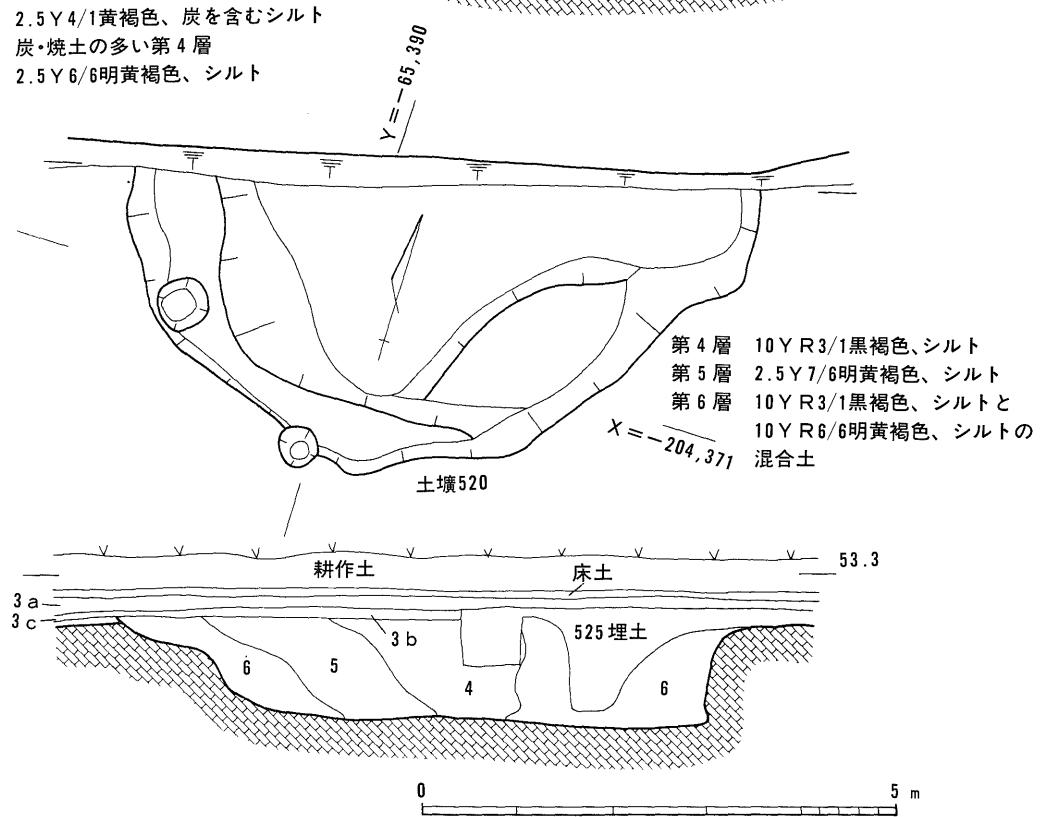
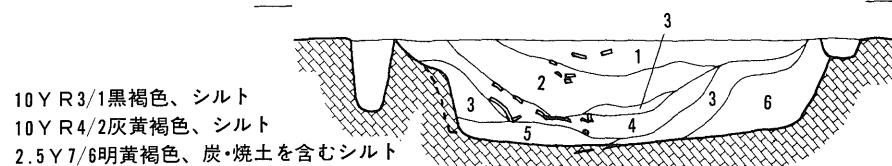
出土した土器片は小破片が多く、時期幅があるようである。口唇部に縄文のついた(72)の如き中期末の土器や、肥厚した口唇部に刻み目のつく四ツ池式の土器(73)が少数あるが、その他大部分の土器は北白川上層3式から元住吉山I式に属する。凹線文のついたものも1片あるが、これは出土した位置や層位からみて、別遺構の遺物が混入したものである公算が大きい。

後期の土器は、磨消し縄文(74・75・77・78・82~88)を文様の基調とするものや、沈線文が基調になるもの(89~92・94)が多いが、条線文(93)や縄文の地文の上に沈線で区画文を描いたもの(76)、突帯に刻み目(95)や縄文(96)をつけたものもある。磨消し縄文は充填縄文によるもので、消し方が不徹底である。これらのうち、(77・78)は加曾利B式の関東系の土器とみられる。(89・92)は北白川上層3期に、(93)は北白川上層式にそれぞれ比定できる。

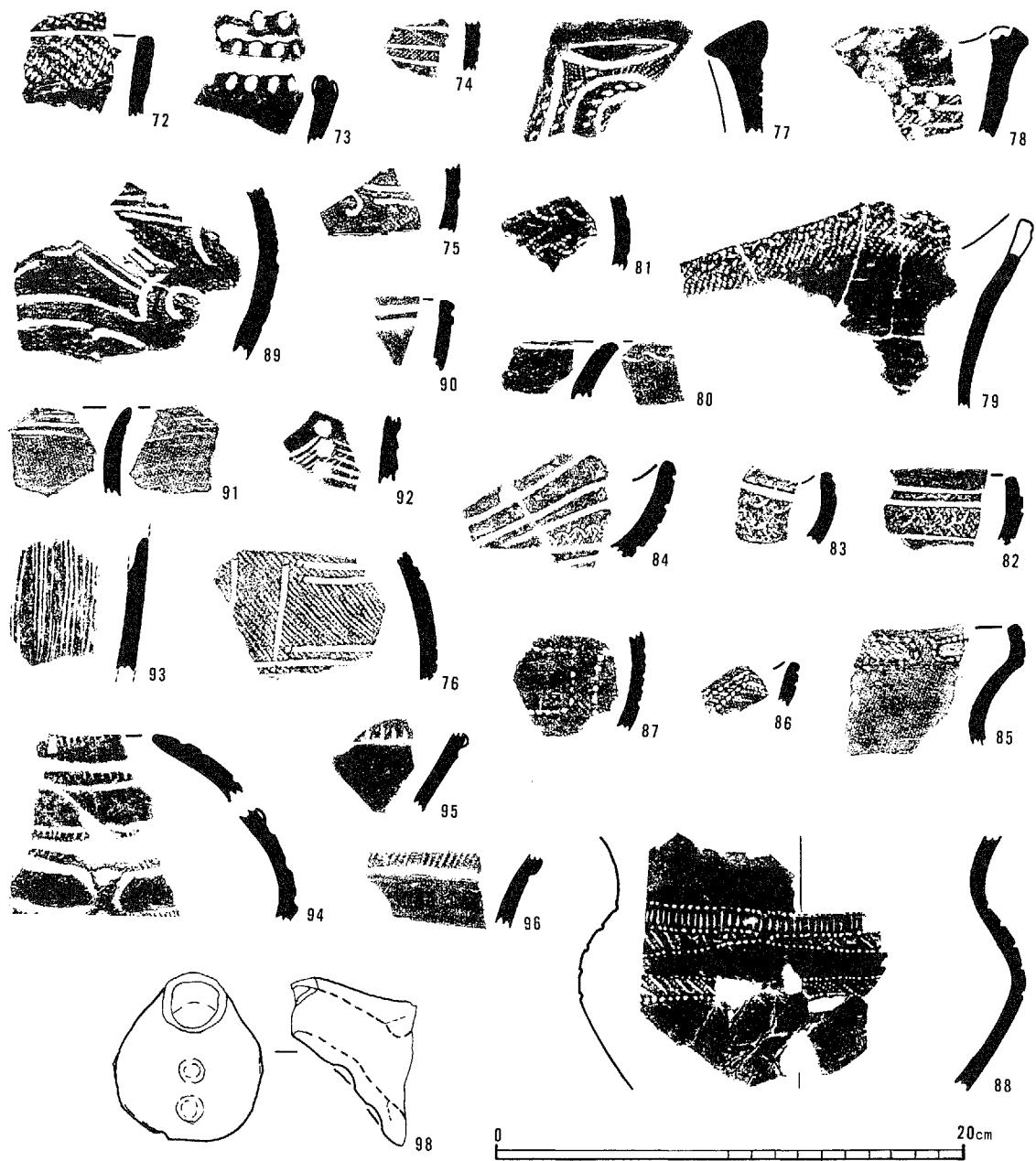
その他の有文深鉢とみられる資料には、屈曲もしくは肥厚した口縁部と、体部から独立した口



第1層 10 Y R3/1黒褐色、シルト
 第2層 10 Y R4/2灰黄褐色、シルト
 第3層 2.5 Y 7/6明黄褐色、炭・焼土を含むシルト
 第4層 2.5 Y 4/1黄褐色、炭を含むシルト
 第5層 炭・焼土の多い第4層
 第6層 2.5 Y 6/6明黄褐色、シルト



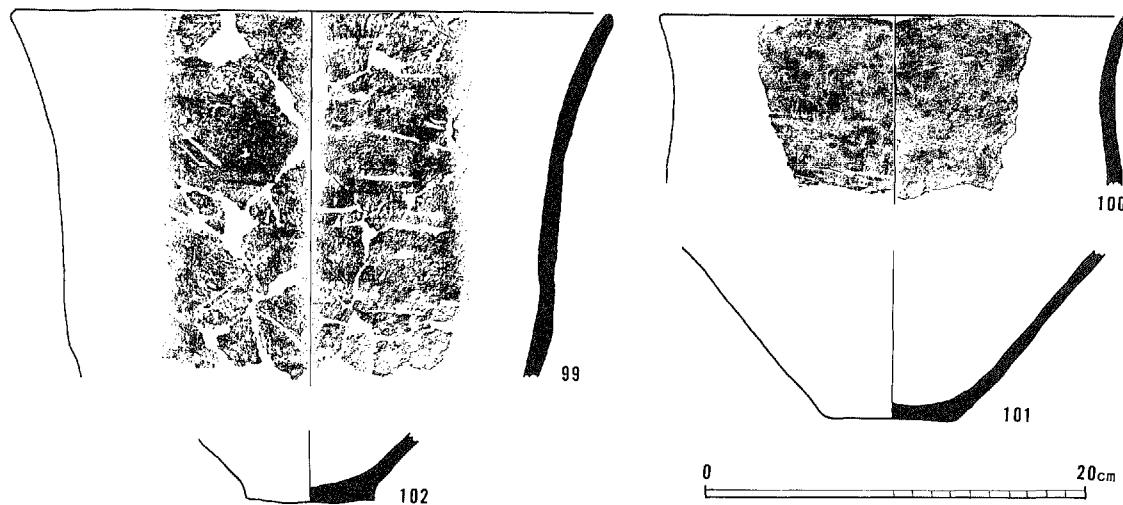
第13図 大規模土壤 520・558



第14図 土壌 558 出土土器

縁部文様帯を持つものが多く、これらは縁帶文土器と呼ばれるものであることがわかる。そして、有文土器の文様では沈線内連続刺突文と結節縄文が特徴的である。(76) も沈線の末端は刺突文がついており、沈線内連続刺突文と共通するものが認められる。

結節縄文は一乗寺K式に顕著とされているが、(84・82・83) 等の例では複数以上の沈線で区画した三角形文を残しており、これらは、北白川上層3期に平行するものとみられる。(85~87) は沈線内連続刺突文で四角もしくは隅丸長方形の区画文を描き、内部に縄文や刻み目をついている。横方向のシンプルな文様構成になっており、新しい様相がみてとれる。したがって、(85~87) は一乗寺K式に平行するものとおもわれる。なお、(85・88) は胎土や文様の状況からみて同一個体



第15図 土壌 558 出土土器

の可能性がある。

(94) の壺は沈線と刻み目で構成された横割りの文様をもつが、やや文様が複雑で北白川上層3期に比定できる。

このように、この遺構から出土した遺物は、少数の中期末のものを除けば凡そ北白川上層3期もしくは一乗寺K式に比定できるものとおもわれる。三本沈線で区画された磨消し縄文の(74)や小さな渦文のついた(75)も前者に属するものとみられる。

第15図には無文粗製深鉢(99・100)と深鉢の底部を図示した。(101・102)は胎土の状況から見て、有文精製土器の底部と思われる。

石器 第27図 PL-24

出土した石器のうち楔とおもわれる(261)を図化した。(261)は原礫面を多く残したサヌカイトの縦長剥片を素材にしている。側片を粗く剥離し台形状に成形したのち、台形の底辺にあたる部分に表裏から刃部調整を加え鈍角の刃部をつくっている。

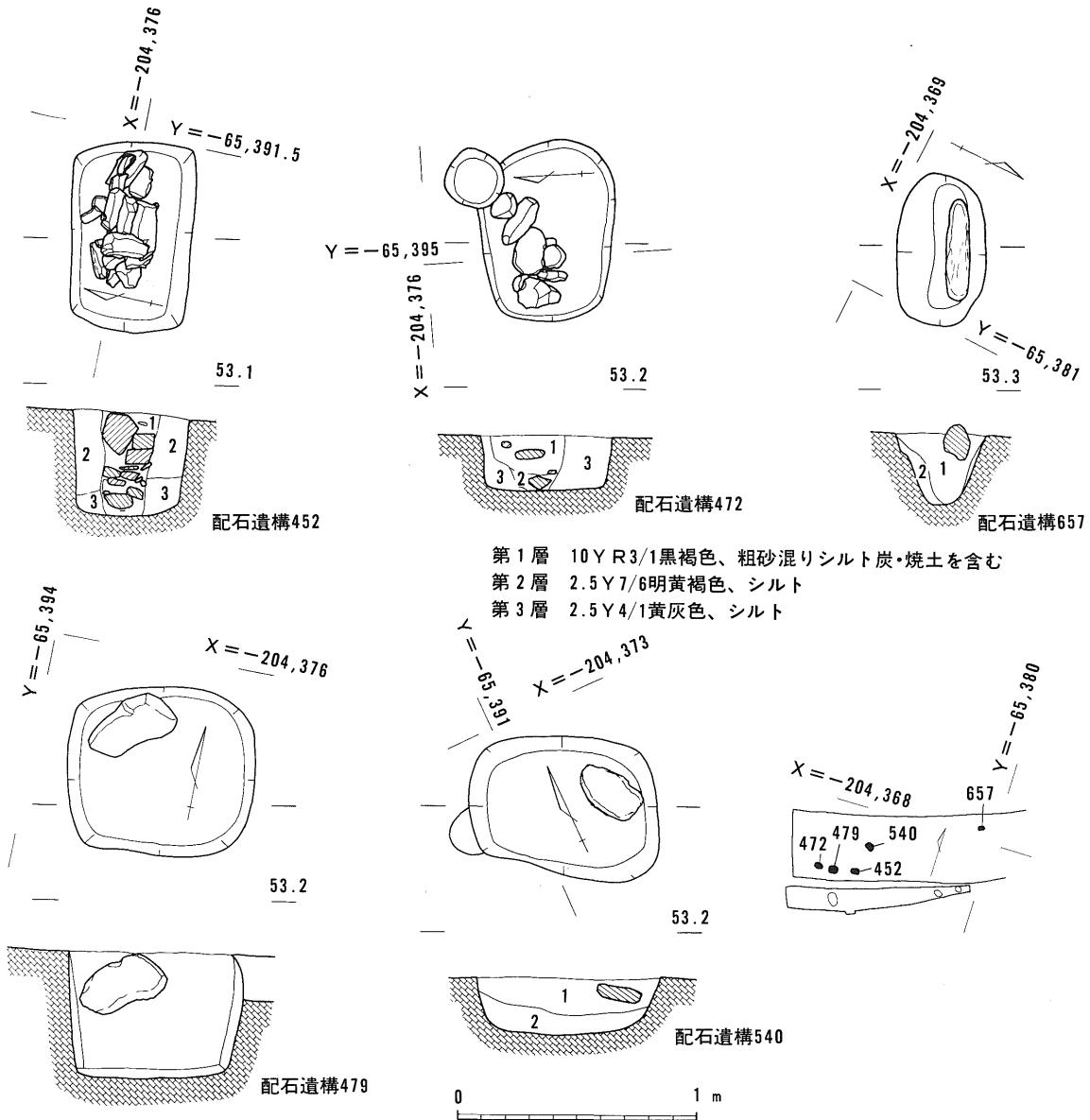
520 第13・26図 PL-5・23

D14 R23。東西約6.64m・南北約3.20m以上の規模で、深さは約1.05mある。第3c層上面から掘削された遺構である。埋土中から縄文土器71・剥片11が出土しており、そのうち晩期滋賀里IIIb式の深鉢(179)を図示した。

3. 配石遺構 PL-6・7

全部で7基が確認された。打ち割った石を多数積み重ねた452・472と、それ以外のものに分類できる。後者には複数以上の石材を使ったものと一石のものがあるが、図示しなかったものも含めて、いずれも使用した石材が緑色片岩や緑色の蛇紋岩の自然石という共通項をもつ。

後者の石材の使い方は、埋土の上部に石材があるだけで、さしたる特色はなく、意図的に配さ



第16図 配石遺構

れたものかどうか判別しがたいが、色彩を意識した石材が選択されている以上、後者もまた埋納された石材とみなすことができよう。

452と472は同時期の遺構で、隣接した位置に同じ向きにつくられている。

452 第16・27図 P L - 6・30

D14 T23。長方形の土壙で壁は垂直で底は平らである。規模は長さ約0.79m・幅約0.50m・深さ約0.44m。底面近くには炭や焼土を多く含む土が堆積しており、この層中から焼けた鹿の下顎骨が出土した。

一度埋めた土壙を再び溝状に掘削するか、もしくは石材を積み重ねながら周囲を埋めていったかの何れかの方法で、割り石を底面近くから上部に達するまで凡そ6～7段積み重ねている。使用された石材の主たるものは表面が赤色を呈する緑色片岩で、相互に接合することから同一石材を打ち割ったことがわかる（P L-30の1010）。その他、緑色の石英粗面岩・赤色チャート・打ち

割った淡茶色の石皿（262）が使われていた。

縄文土器114・剝片8が出土した。時期のわかるものはすべて晩期に属する。石皿は頁岩を素材にしたもので9cm×16cmほどの範囲が使用されて窪んでいる。

472 第16図 PL-6・30

D14T24。楕円形の土壙で壁は垂直で底は平らである。規模は長さ約0.75m・幅約0.54m・深さ約0.24m。土壙の埋め土や配石の状況は452と酷似しているが、使用された石材が違う。こちらのほうは、砂岩・緑色片岩・緑色の蛇文岩の自然礫が主となり、緑色片岩の割り石は少数であった。この割り石は452の石材（PL-30の1010）と接合したので、452と472は同時期の遺構であることがわかる。472の底面近くでも焼けた獸骨が出土しているが、小さすぎて種類の同定はできなかつた。縄文土器18・剝片1が出土しているが、時期のわかるものはない。

657 第16図 PL-7

D14R21。楕円形の土壙で壁は急角度で底は丸い。規模は長さ約0.64m・幅約0.37m・深さ約0.30m。長さ約43cmの緑色の雲母片岩を配する。縄文土器7・剝片2が出土しているが、図化できるものはない。

479 第16図 PL-6

D14T24。方形土壙で壁は垂直で底は平らである。規模は長さ約0.72m・幅約0.80m・深さ約0.52m。長さ約36cmの緑色の蛇文岩を配する。縄文土器57・石器1・剝片6が出土しているが、図化できるものはない。

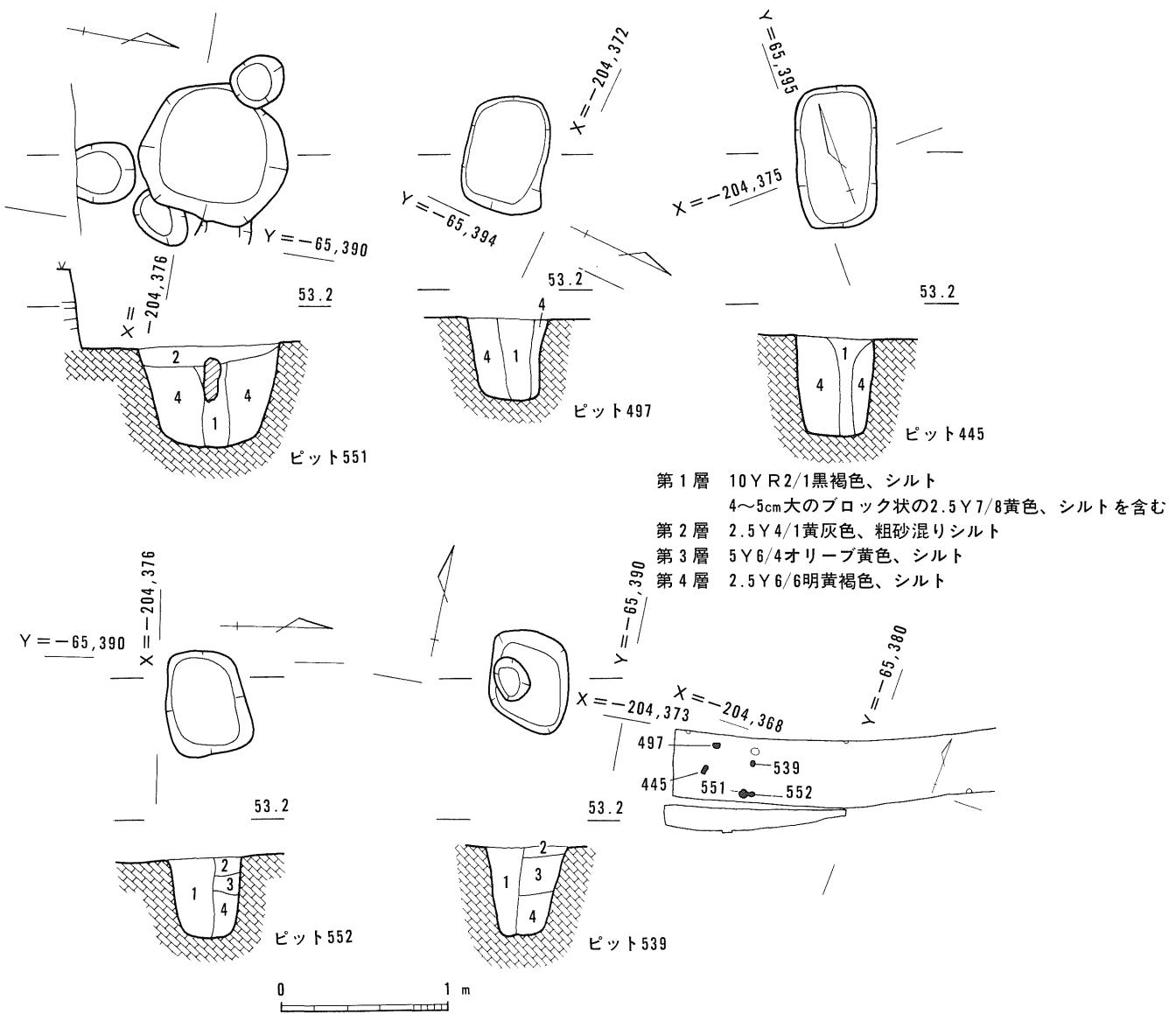
540 第16図 PL-7

D14S23。隅円方形の土壙で壁は急角度で底は丸い。規模は長さ約0.80m・幅約0.56m・深さ約0.24m。長さ約27cmの緑色片岩を配する。縄文土器2が出土しているが、図化できるものはない。

4. 柱穴状埋土のピット 第17図 第4表 PL-7

ピット状の遺構で、柱芯痕跡の如き縦長の有機質に富む土層が観察できる例がある。551の例では柱芯痕跡のような部分に自然石が落ち込んでおり、有機質のものが徐々に腐朽して土が入り込んでいったことがわかる。木質のものを埋設した遺構であろうが、この痕跡の平面形は551・539にみられる如き円形を呈するものもあれば、445のように長円形を呈するものもある。そのため、一概に柱穴と断定することはできないが、調査で確認した同種の遺構の平面分布をみると建物跡の可能性も排除はできない。この種の遺構は合計9基確認しているが、そのうち3基分を図示する。図示しなかった分についての情報は第4表を参照されたい。

このうち、445からは後期の元住吉山I式の土器が出土しているが、551・497・552・539からは滋賀里IIもしくは滋賀里IIIb式の晩期の土器が出土している。445出土の元住吉山I式の土器は445の掘削時期の上限を示すに過ぎない。つまり、445が晩期に属するものと解釈してもなんら不都合



第17図 柱穴状埋土のピット

はなく、この種の遺構の時期は晩期と考えて大過ないであろう。

5. 円形土壙 PL-7

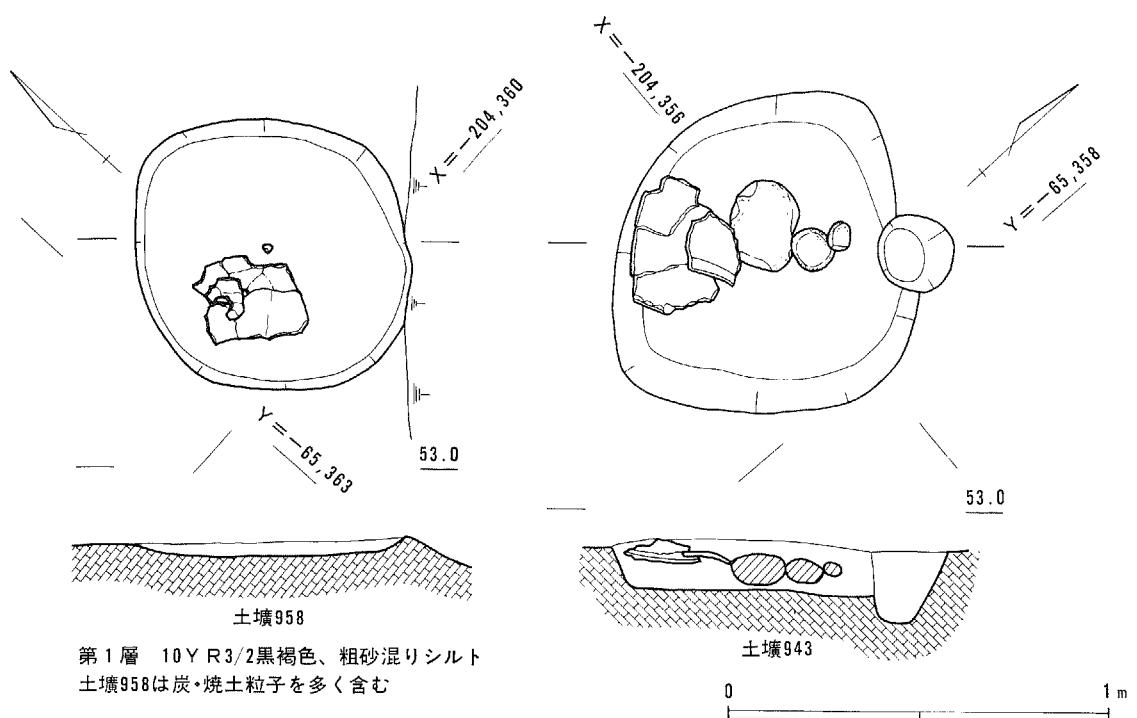
平面形が円形を呈する径0.8m以上の比較的大きい土壙。全部で15基あるが、そのうち遺物を多く出土した4基を紹介する。

943 第18・19図 PL-18

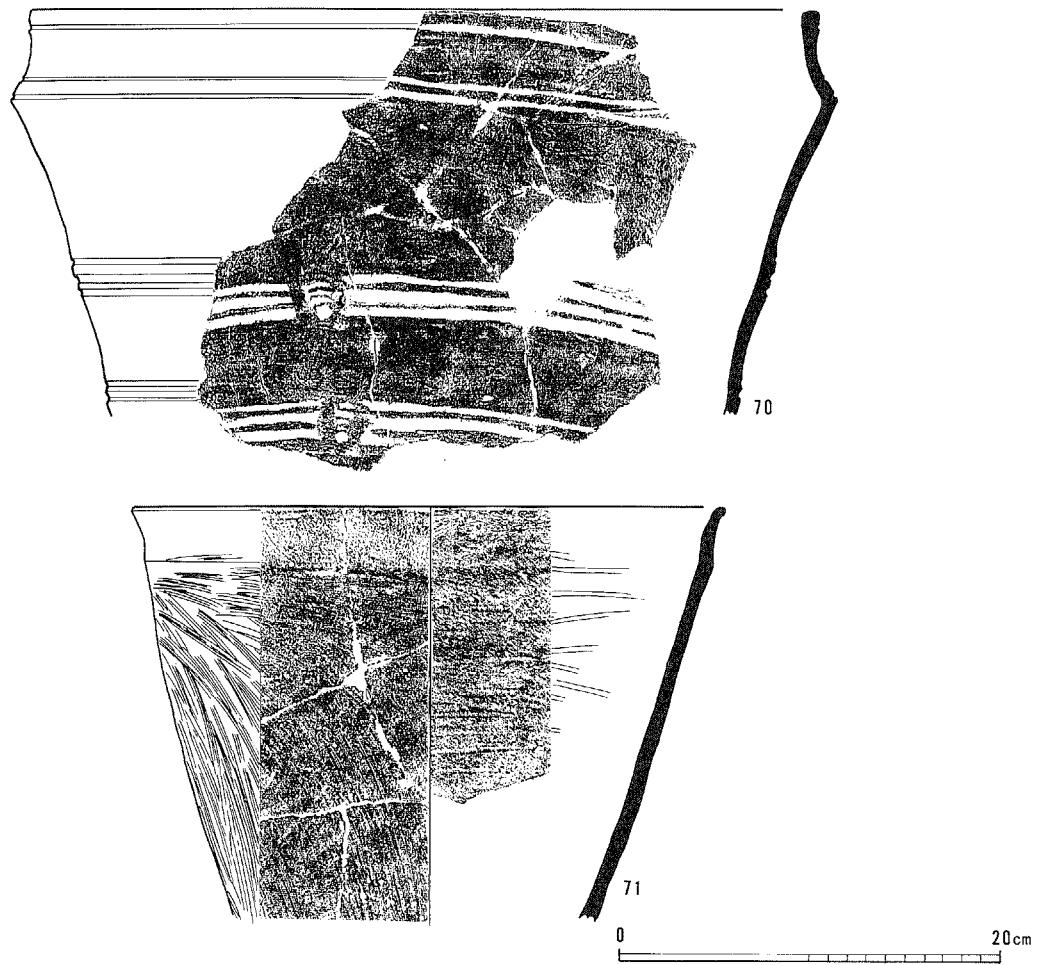
D14O15。直径約0.80m・深さ約0.13mの規模。埋土の上部に宮滝式の深鉢(70)の破片が水平に埋まっていた。縄文土器57・石器1・剝片6が出土した。

958 第18・19図 PL-7・17

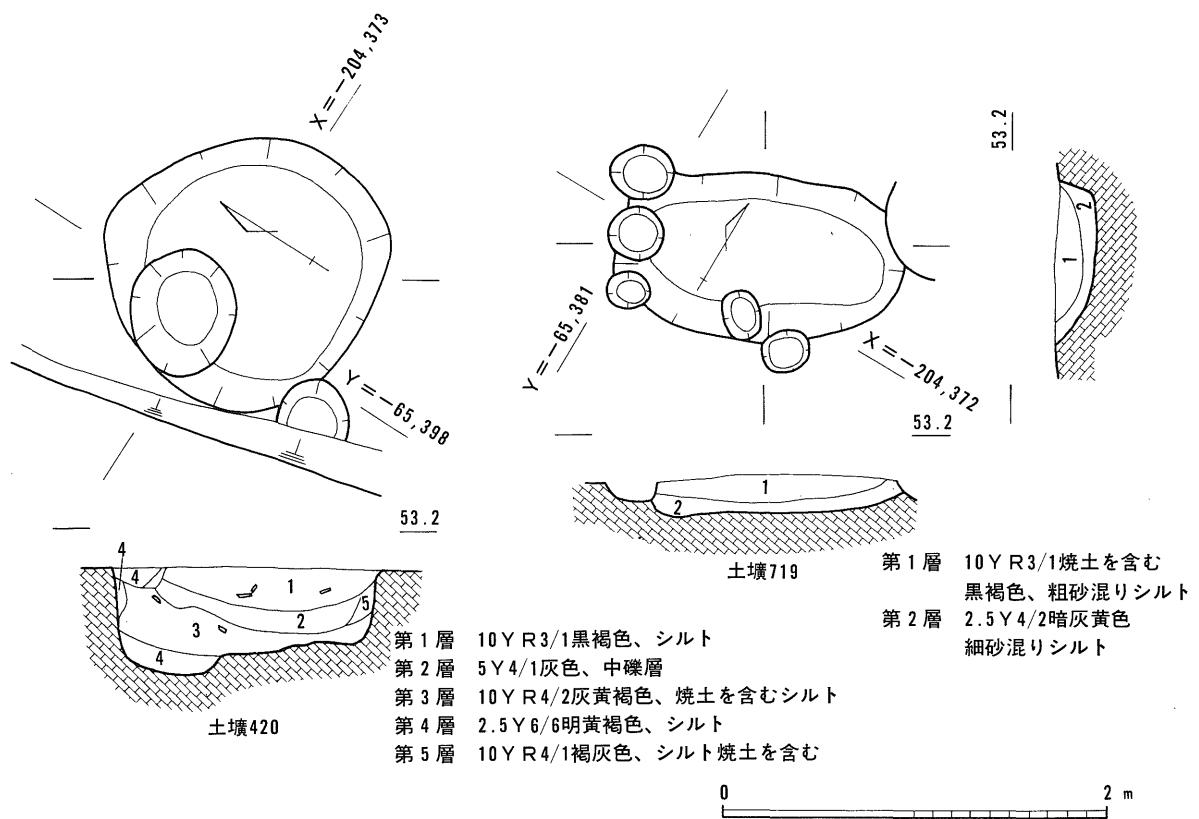
D14O16。直径約0.70m・深さ約0.04mの規模。砂岩の円礫とともに埋土の上部で滋賀里II式の深鉢(71)が出土した。縄文土器63が出土。



第18図 円形土壌 943・958



第19図 土壌 943・958 出土土器



第20図 円形・橢円形土壙

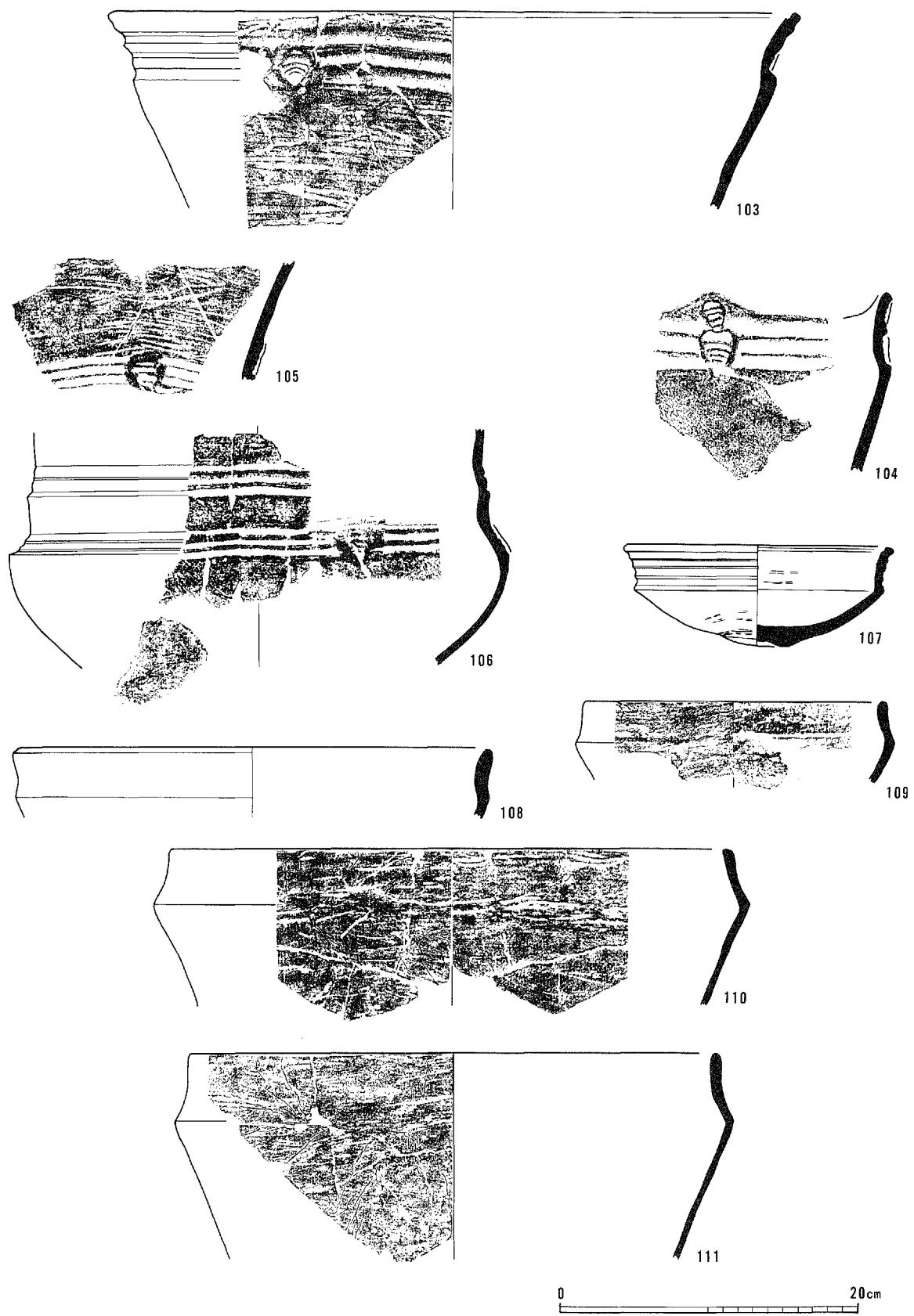
420 第20図 PL-7

D14 S 25. 直径約1.40m・深さ約0.48mの規模。埋土の中層に直径1cm前後の円碟層が堆積しており、埋土を大きく区分している。埋土の第1・2層を上層、埋土の第3・4層を下層として遺物の採集をおこなった。下層からは縄文土器が295・剝片7が、上層からは縄文土器59・剝片6が出土している。

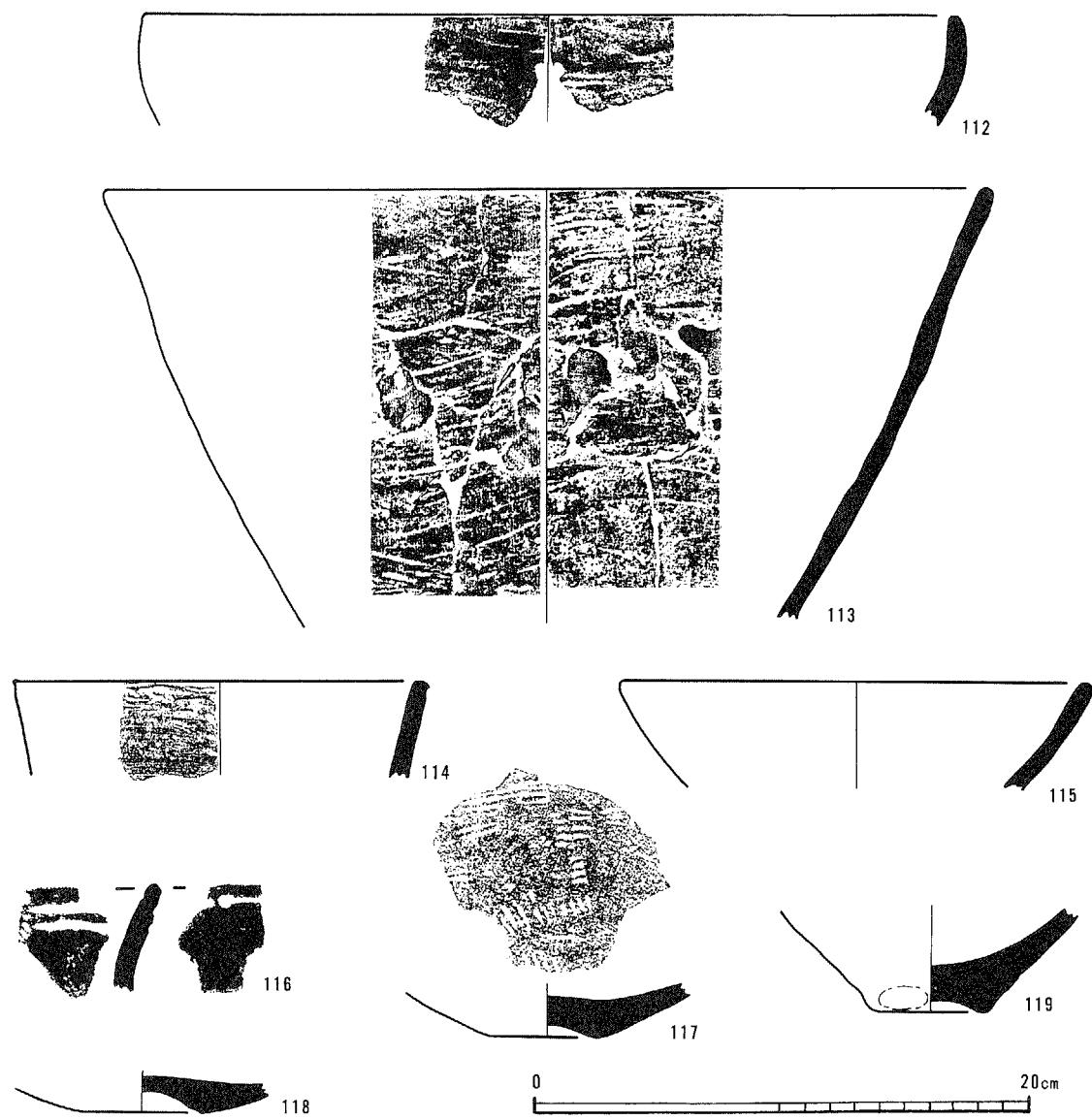
420 出土土器 第21・22図 PL-7・17・20・21

図示したうち、(108・115) が上層から出土したもので、残りは下層出土土器である。図示した上層の土器は少ないが、総体をみると下層出土土器との差は認められない。宮滝式の一群の土器で、浅鉢が多い (107・108・112・115・117・118)。

深鉢・浅鉢を問わず、有文の土器には全て二ないし三条の凹線文がつき、そのうちの深鉢には貼付した粘土上に巻貝扇状文(ヘナタリ)がつく (103~106・116)。凹線文も巻貝で引いた後に撫でたものらしく、凹線内に横方向の細かい線がみられる例がある (107)。(103・116) には口縁部の内面にも凹線がつき、(116) には巻貝押圧文もつく。有文の土器の口縁部の形態は、逆「く」字状に緩やかに外反する (103・104・107)。器面には一次調整として巻貝条痕がつくが、二次調整で磨く例が多い (103・105~107)。浅鉢 (107) の内面は吸炭黒色処理されており、赤色顔料が塗布されていた痕跡を留める。



第21図 土壙 420 出土土器



第22図 土壌 420 出土土器

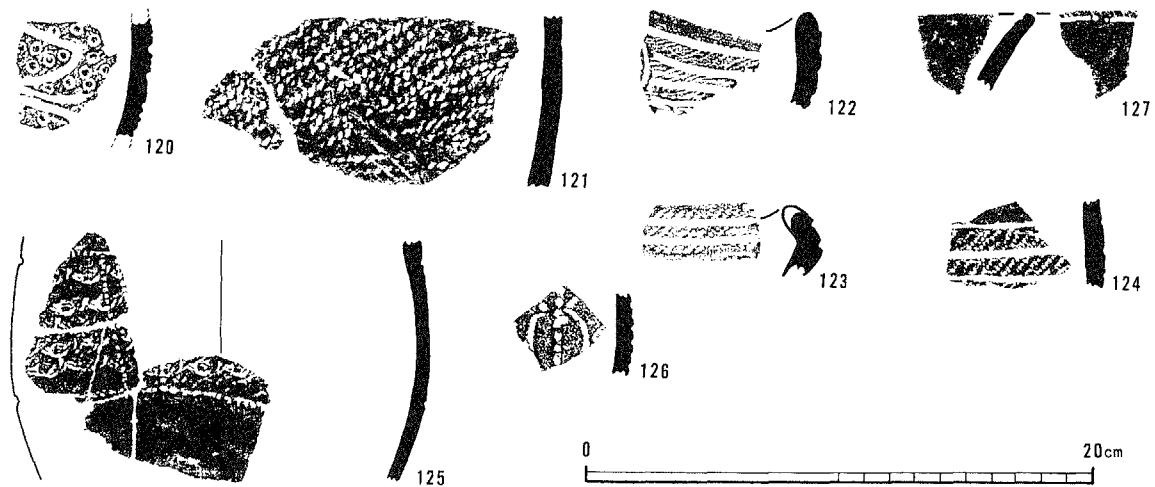
無文の浅鉢・深鉢の口縁部の形態は、逆「く」字状に内折するもの（109～111）、直線的なもの（113・114）、内湾するもの（112・115）がある。これらの土器の器面も二次調整で磨くものが多く（108～113・115）、（109～111）の器面は黒色化している。

底部は全て凹み底である。（117）の内面には一次調整の二枚貝条痕がみられる。

このように、土壌420出土土器の装飾は凹線および巻貝扇状文に限られている。黒色研磨土器に顯著なように器面を研磨するものが多く、焼成は硬質である。

495 第23図 P L-21

D14 S 24。直径約1.00m・深さ約0.25mの規模。埋土中より縄文土器78・石器1・剝片13が出士した。



第23図 土壌 495 出土土器

出土した縄文土器には時期幅が認められる。沈線文と竹管文がついた（120）は中期の公算が大きい。（122～125）は北白川上層3期に比定できるが、口縁部の内面に沈線文と刺突文のついた（127）は元住吉山II式の土器である。

6. 楕円形土壌 第20図

長さが約0.7m～1.7mの規模で、平面形が楕円形や隅丸長方形をする土壌が計9基みつかっている。遺構の規模等の情報は第5表にまとめた。この内、出土遺物から所属時期の判断できるものが6基ある。北白川上層2期の427、北白川上層3期の884、滋賀里IIIb式の566・674・719である。

7. その他の遺構 第24～26図 第6表

ここでは、その他の遺構および出土遺物を紹介するが、遺構の情報については、第6表に示したので、くわしくは触れない。出土遺物については時期別にまとめて簡単に記述する。

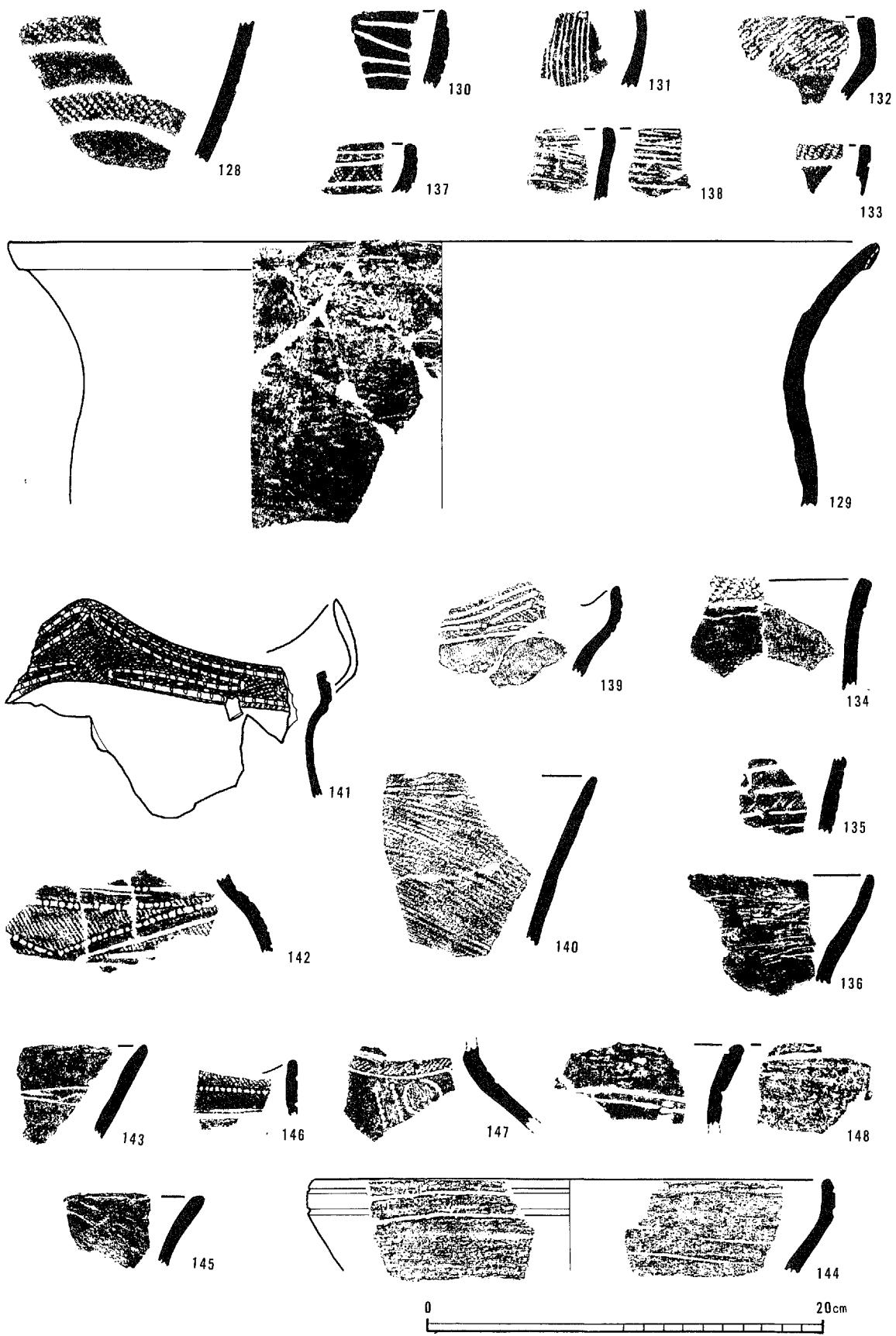
後期の土器 第24・25図 P L-22・23

（128）は中津式の土器であるが、共伴出土した（129）は口縁部の肥厚した縁帶文の粗製土器で北白川上層1期。（130～140・142～145・154）は北白川上層3期。（141・146～148）は一乗寺K式の土器である。

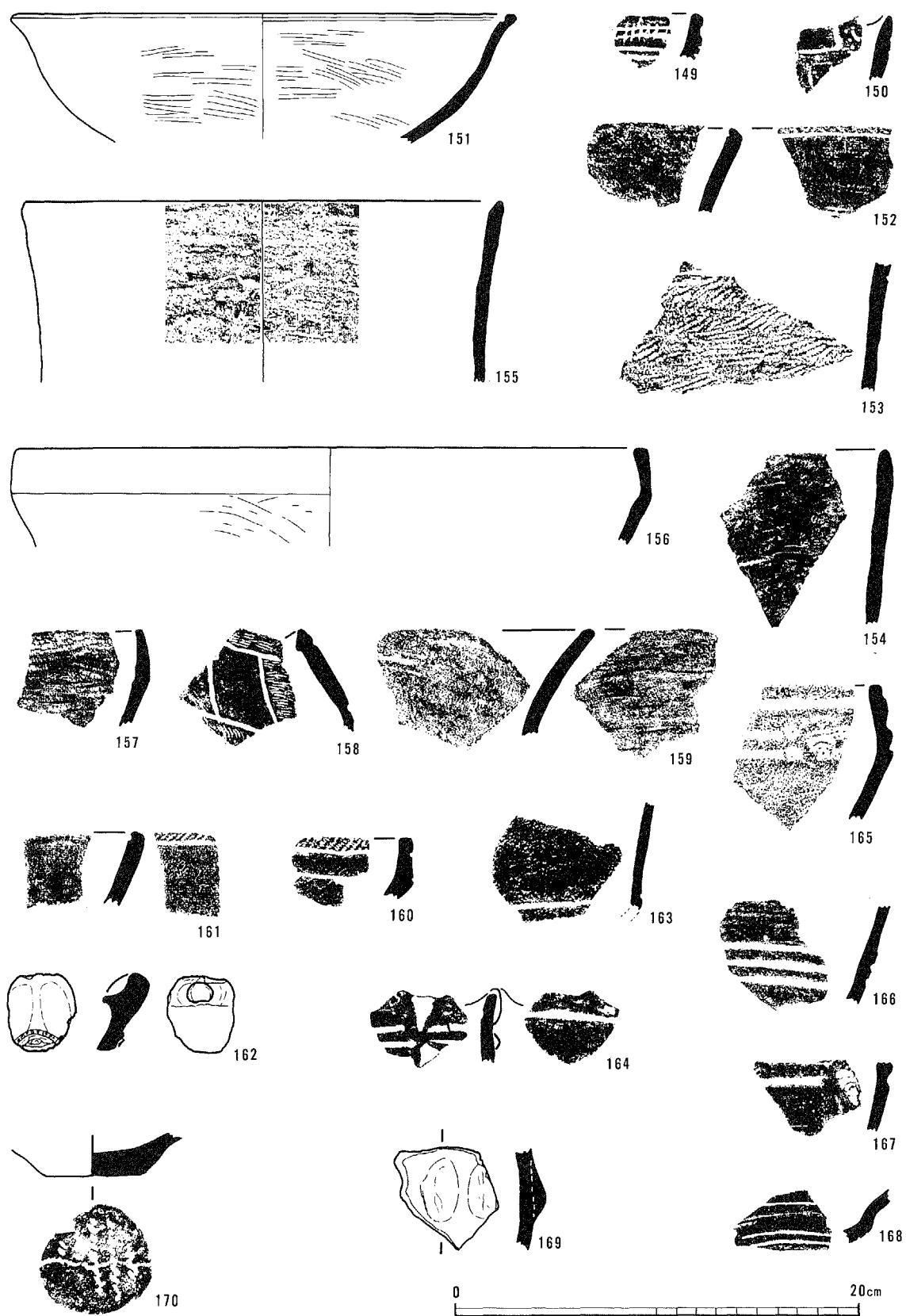
（150・152・153・155～161）は元住吉山I式、（162）は元住吉山II式。平行沈線文に刻み目の付加された（149）も元住吉山I式と考えたが、晩期の土器である公算もある。（163～167・1002）は宮滝式。平行沈線文のある浅鉢（168）、二つの瘤状のものがつく（169）、網代圧痕のつく（170）の三つは何れも後期に属するものと思われるが詳細は不明である。

晩期の土器 第26図 P L-17・23

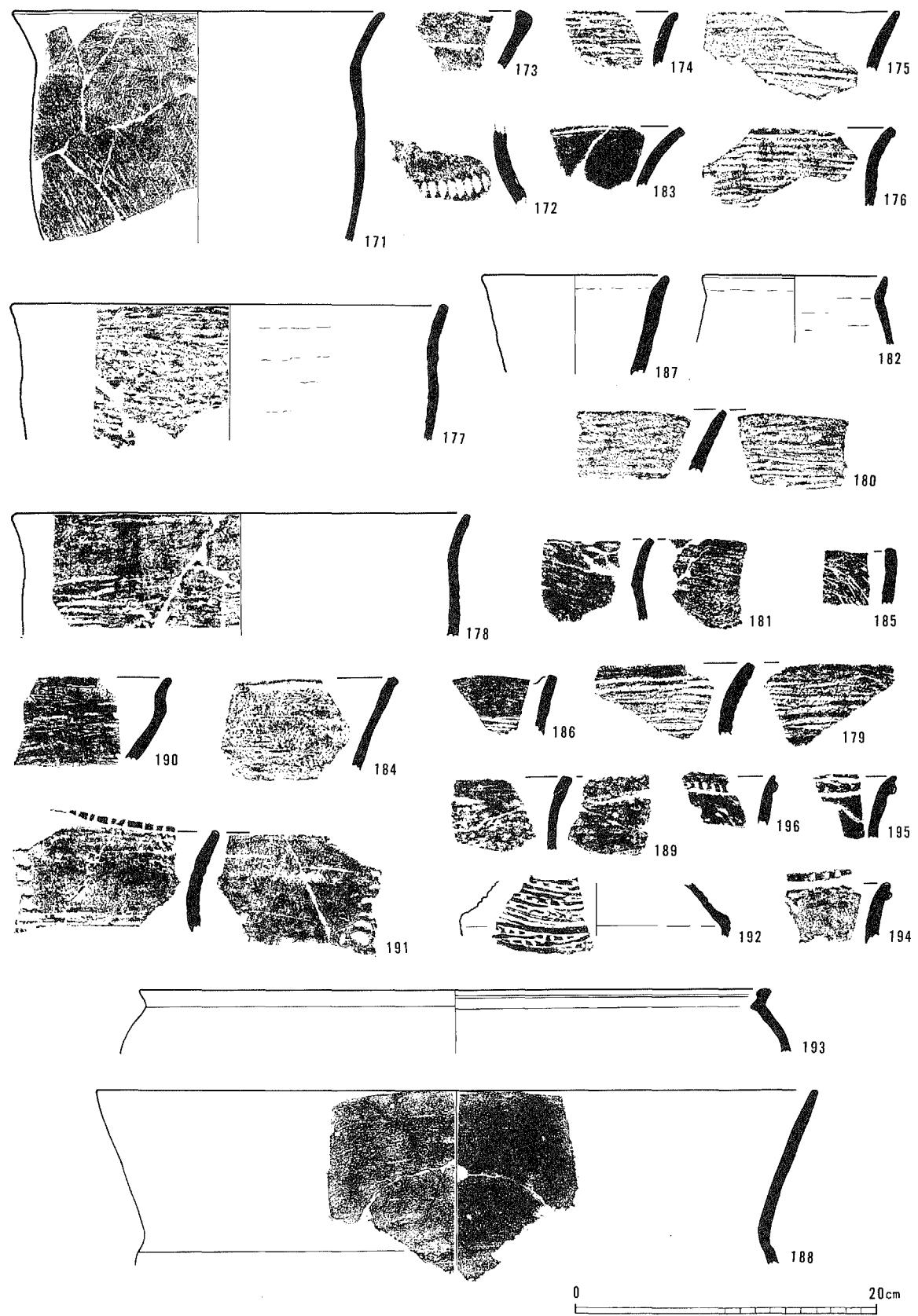
（171～191・193）は滋賀里IIIb式。（191）と共に出土した（192）は羊歯状文のつく注口土器で



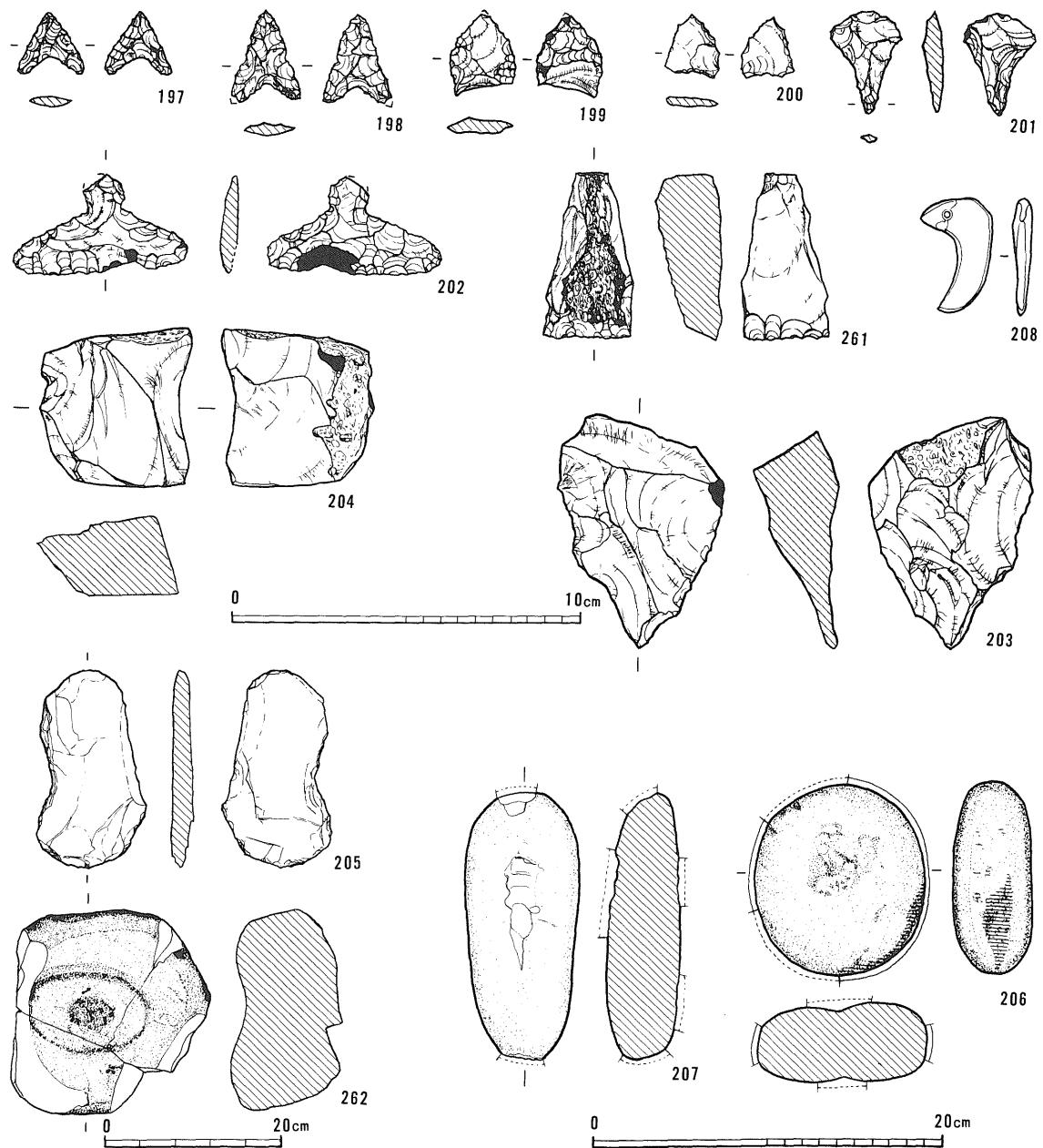
第24図 遺構出土の縄文土器



第25図 遺構出土の縄文土器



第26図 晩期遺構出土土器



第27図 縄文時代遺構出土石器・石製品

大洞B C式の土器である。

(194) は口縁部直下の突帯は剝がれ落ちているが、口縁端部に刻み目がついており、滋賀里IV式の土器である。(195・196) は口縁端部が尖っており、突帯の位置が口縁端部からやや離れてついた、舟橋式の土器である。

石器・石製品 第27図 卷頭カラー・PL-24~26

(197・198) は凹基式の石鏃。(199・200) は石鏃の未製品とみられる。(197・200) は滋賀里III b式に属する遺構から出土した。(198) も遺構の新旧関係から滋賀里III b式以降の時期と考えられる。何れもサヌカイトが素材。

石錐（201）や石匙（202）は今回の調査では出土事例が少ない。削器は不定形な剝片を素材にしたものが多く、このような定型化したものは少ない。（202）は遺構の新旧関係から宮滝式以前のものと判断される。

（203・204）は不定形な剝片を他方向から作出了した石核で、同一の遺構から出土している点は注目される。何れもサヌカイトが素材。

石斧（205）は緑色片岩を素材にしたもので片刃である。土掘り用の石斧であろう。滋賀里III b式の時期に属する。

凹み石（206・207）には、叩いた部分・叩かれた部分（点線で示す）と擦った部分（実線で示す）があり、多目的に使用されたことがわかる。（206）の擦った部分には赤色顔料（水銀朱）が明瞭に認められ（巻頭カラー）、縄文人の精神活動を我々に伝えている。（206）は砂岩が素材で、（207）は雲母片岩が素材である。

（208）は滋賀里III b式の遺構から出土した勾玉。蛇文岩を素材にした粗製のものである。

第2節 弥生時代 PL-8~12

円形の竪穴住居跡5棟と土壙状・ピット状の遺構が見つかった。竪穴住居は畿内第I様式～第III様式に、土壙状・ピット状の遺構は一部不明のものを除くと畿内第III様式に属する。

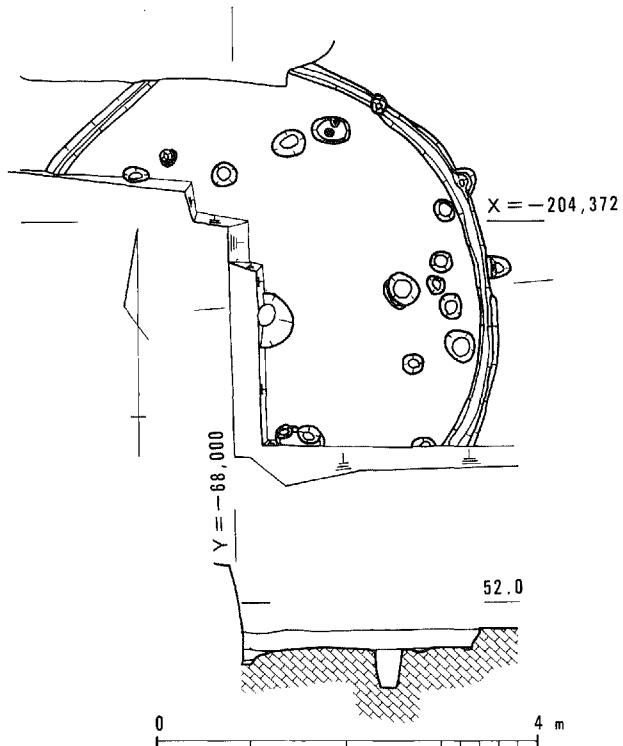
1. 竪穴住居跡

2-551 第28・32図 PL-8・27

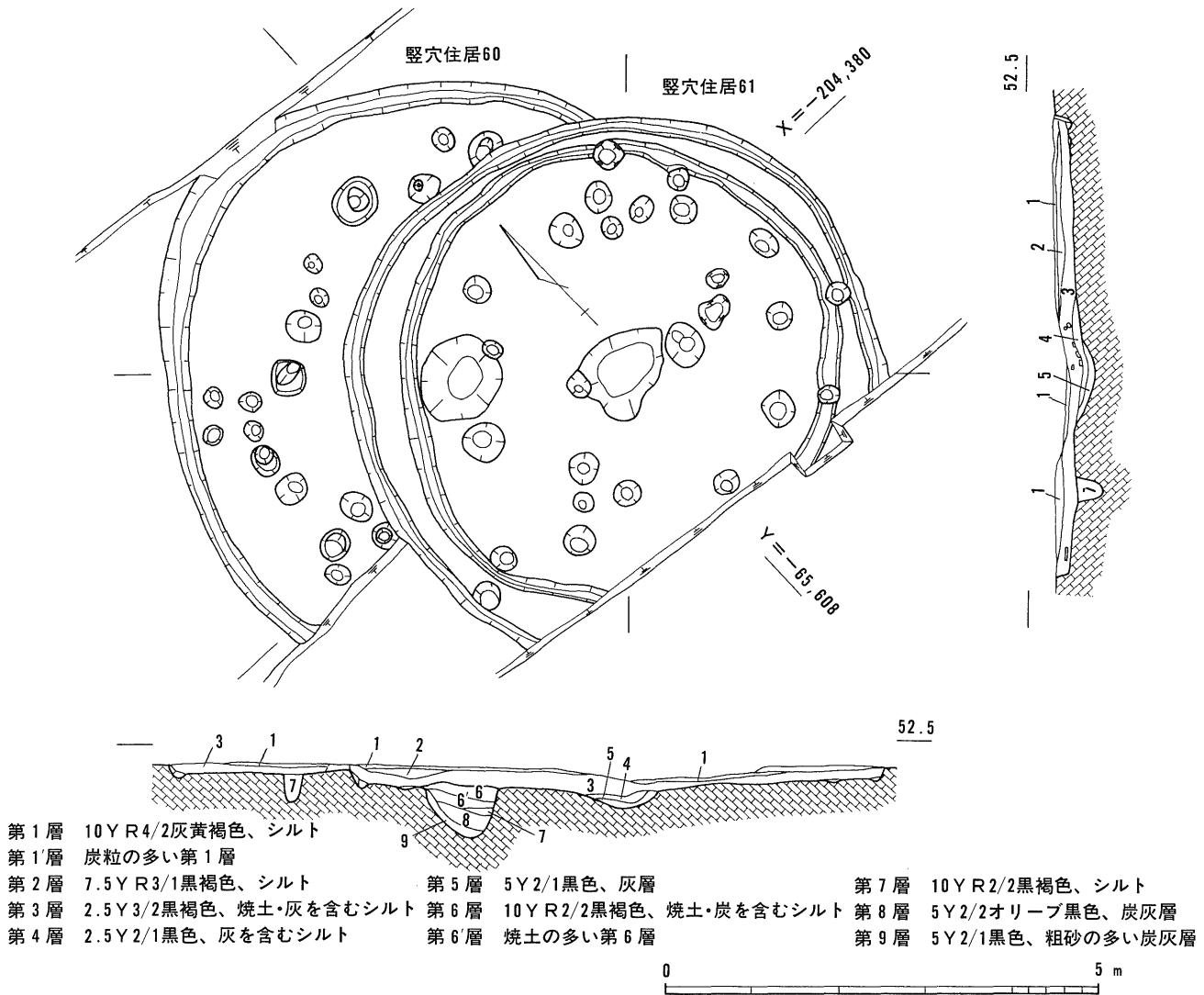
D17S 20。炉跡を中心に復元すると、直径約6mの規模で6本柱の構造と思われる。壁の高さは約0.3mある。

埋土中から弥生土器444・石器1・剝片12・不明土器16・縄文土器5が出土している。出土した土器には、（217・218）のような縄文時代晩期の船橋式の土器や（215・216）の如き紀伊型甕、ヘラ書きの多条沈線および山形文で飾られた壺（210・211・214）、クシ書き直線文で飾られた（212・213）がある。（209）は口縁部に円形の刺突文がつく。

（209・212・213）は畿内第II様式に属するが、他は第I様式の新段階の土器と思わ



第28図 竪穴住居跡 2-551



第29図 壇穴住居跡 60・61

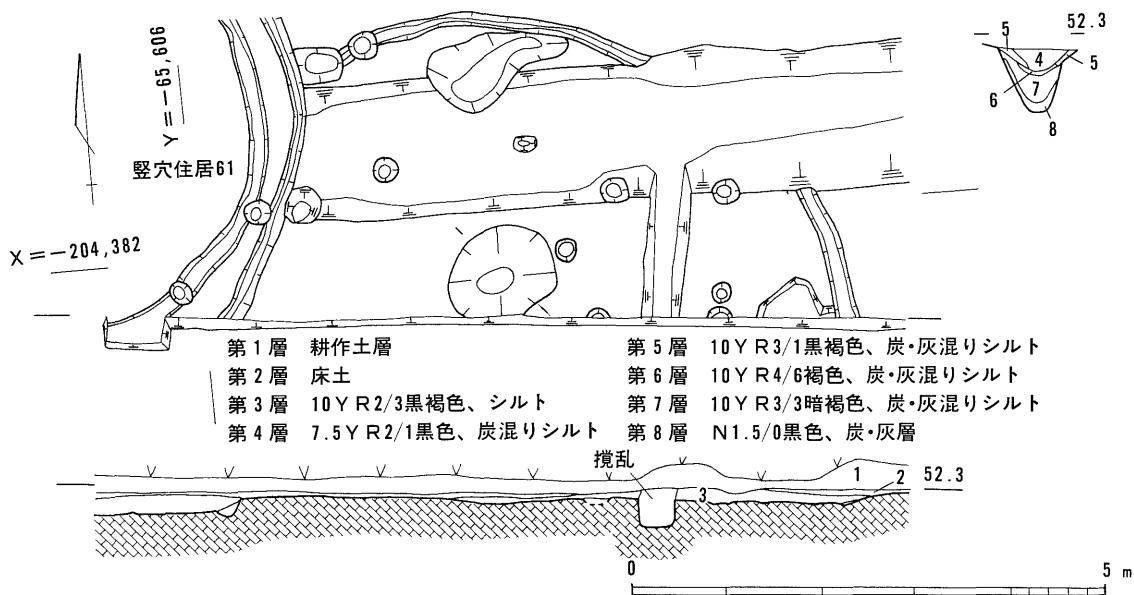
れる。埋土中での位置関係の情報を欠くため詳しい検討できないが、この住居跡は第I様式の新段階のもので、埋没の最終段階が第II様式の時期と考えられる。船橋式の土器は畿内第I様式新段階の時期に伴なうものであろう。他に畿内第I様式新段階の遺構としてはPL-29の壺(1003)を出土した土壙状遺構2-552がある。

60・61 第29・32・36図 PL-10・12・26~28・30

D17T03。60と61は重複しており、61のほうが新しい。

61は炉を中心にして同心円的に拡張されている。拡張前が径約5mの規模で、拡張後は径約6mの規模である。復元すると7本柱の構造で、炉及び柱は変更せずに拡張しているようである。壁の高さは約0.3mある。

弥生土器1,681・土製品1・石器8・剝片255・不明土器65が出土している。(219~222)の4点を図化した。遺物の遺存状況は悪いが畿内第III様式に属することがわかる。(223)は土器片を利



第30図 堅穴住居跡 87

用した紡垂車である。

石器はサヌカイトを素材にした石鎌 (238・239)・石錐 (240) のほか、緑泥片岩製の石包丁 (241) を図化した。凸基式の石鎌は茎を造りだした (238) や木葉形のもの (239) がある。凹基の石鎌は何れも素材剥片の主剥離面を残している。

60は復元すると、径約 6 mの規模で 8 本柱の構造と思われる。壁高は約0.2mある。

埋土中から弥生土器353・石器 5・剥片77・不明土器29が出土しているが、土器は遺存状況が悪くて図化できるものはない。ただし、弥生時代中期の土器があることは確認できている。ここでは床面に密着して出土した石皿 (242) を図示した。

87 第30・32図 PL-11

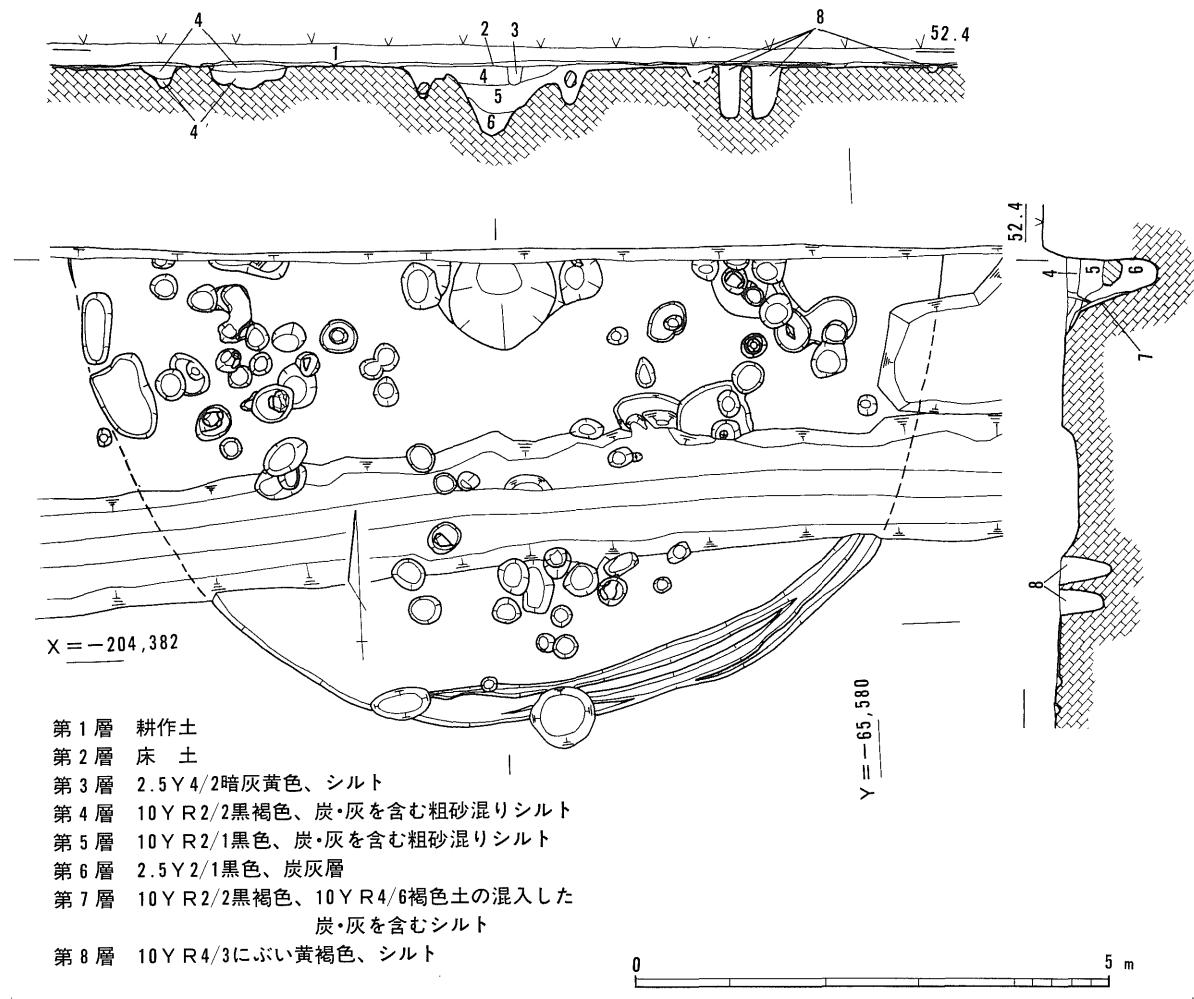
D17U01。堅穴住居61と重複しており、87のほうが古い。遺存状況が悪く、炉・柱穴・壁溝が残るのみである。復元すると径約 7 mの規模で 8 本柱の構造となろう。

弥生土器45が出土しており、(233・234) を図示した。畿内第III様式に属するであろう。

149 第31・32・36図 PL-11・12・26

D17U21。遺存状況が悪く、炉跡・柱穴・壁溝の一部が残っていただけである。炉跡を中心に復元すると径 9 ~ 10mの規模となろう。住居跡内で多数のピットが見つかっているため、柱の構造の復元は困難である。壁溝が二条見つかっているため、一度作り替えられたことがわかる。

この住居跡の炉跡は他の住居跡の炉に比べると規模が大きくて深い。東西に小ピットが造りつけられており、このピットには長さ十数cm程の自然石が入れられていた。「松菊里型」の堅穴住居跡である。昭和61年度調査で見つかった弥生時代前期の住居跡もこれと同じ構造である。



第31図 竪穴住居跡 149

この住居跡に伴なうとみられる遺物には、弥生土器113・石器4・剝片3・その他6がある。住居跡内から畿内第II様式とみられる壺(224)が出土したので時期が判明する。炉跡からは鋳型の中子と思われる(246)や砂岩の砥石(245)が出土した。

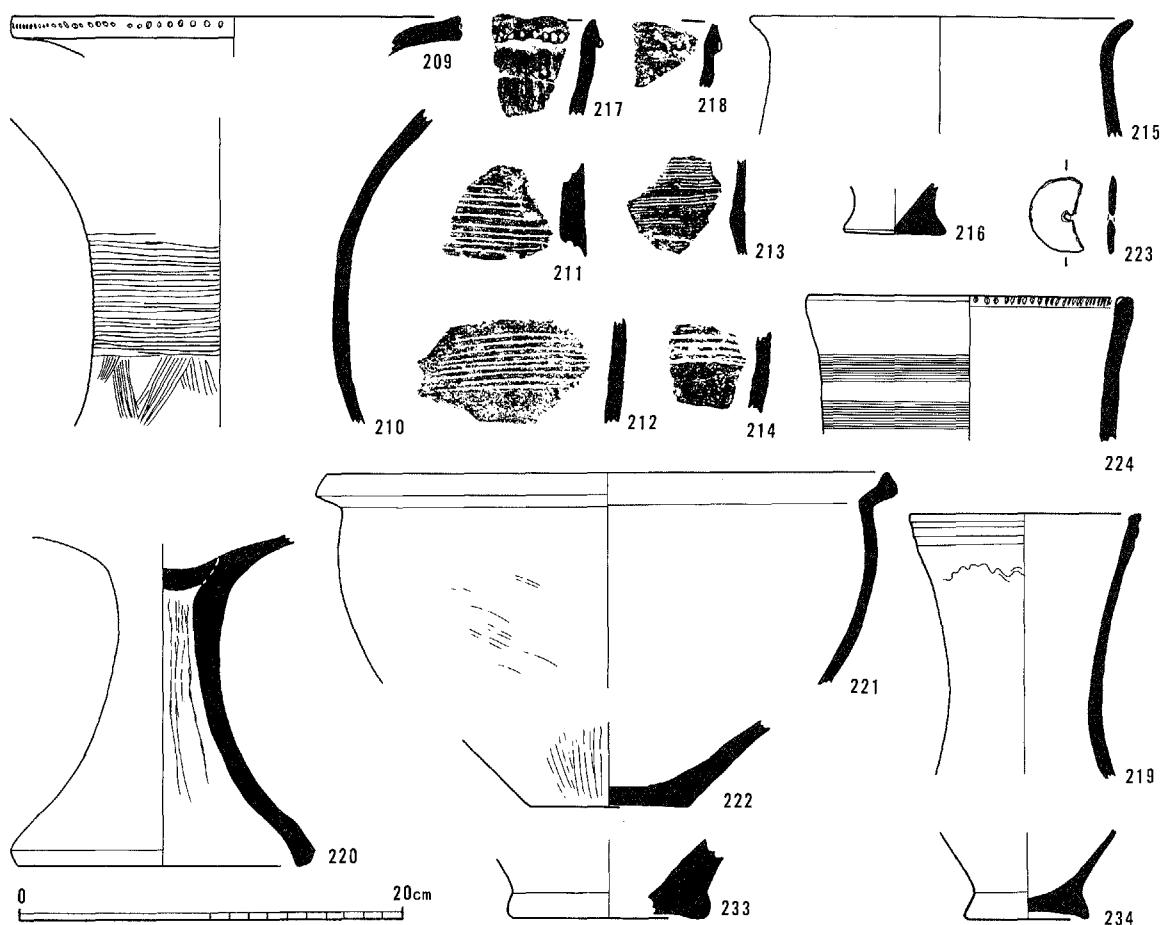
(246)は表面が青灰色で内部が赤茶色をした焼きしまったスサの入った粘土塊である。復元すると断面形が長さ8cm程度で幅が4~5cm程の橢円形をしている。このほかサヌカイトを素材にした凸基式の石鎌(243)や石錐(244)があり、住居跡内のピットからは砂岩製の扁平片刃石斧(247)が出土している。

2. 土壌状の遺構

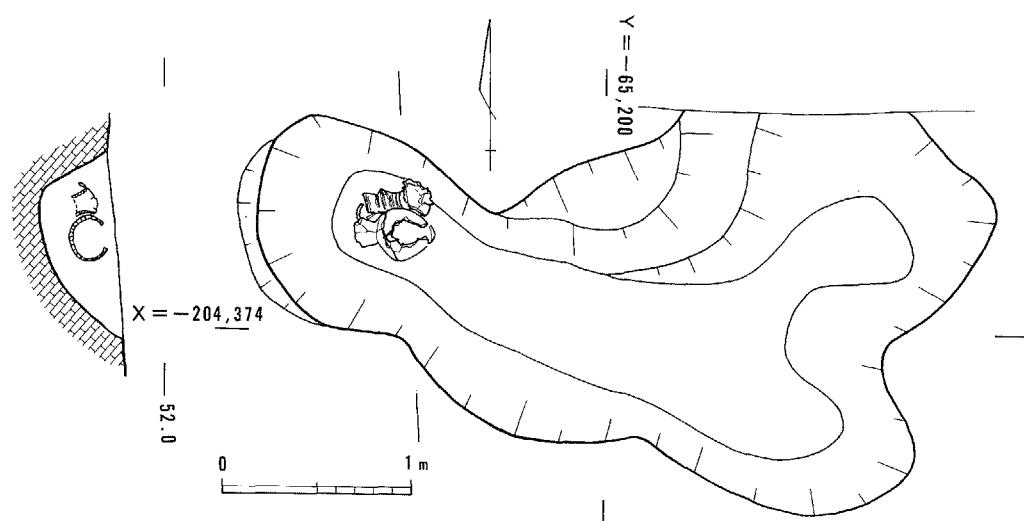
不定形なものと方形・長円形のものがある。

2-648 第33・34図 P L-9・28

D17S14。長さ約3.7m・幅約2.1m以上・深さ約0.4mの規模。不定形な形状で、底の深さも一定していない。西側の底から約0.1m上方のところで畿内第III様式の壺二点(225・226)が出土した。(225)の凸部はヒネり出されたものである。弥生土器216・石器1・剝片1・不明土器85が出



第32図 堅穴住居跡出土遺物



第33図 土壙 2-648

土した。

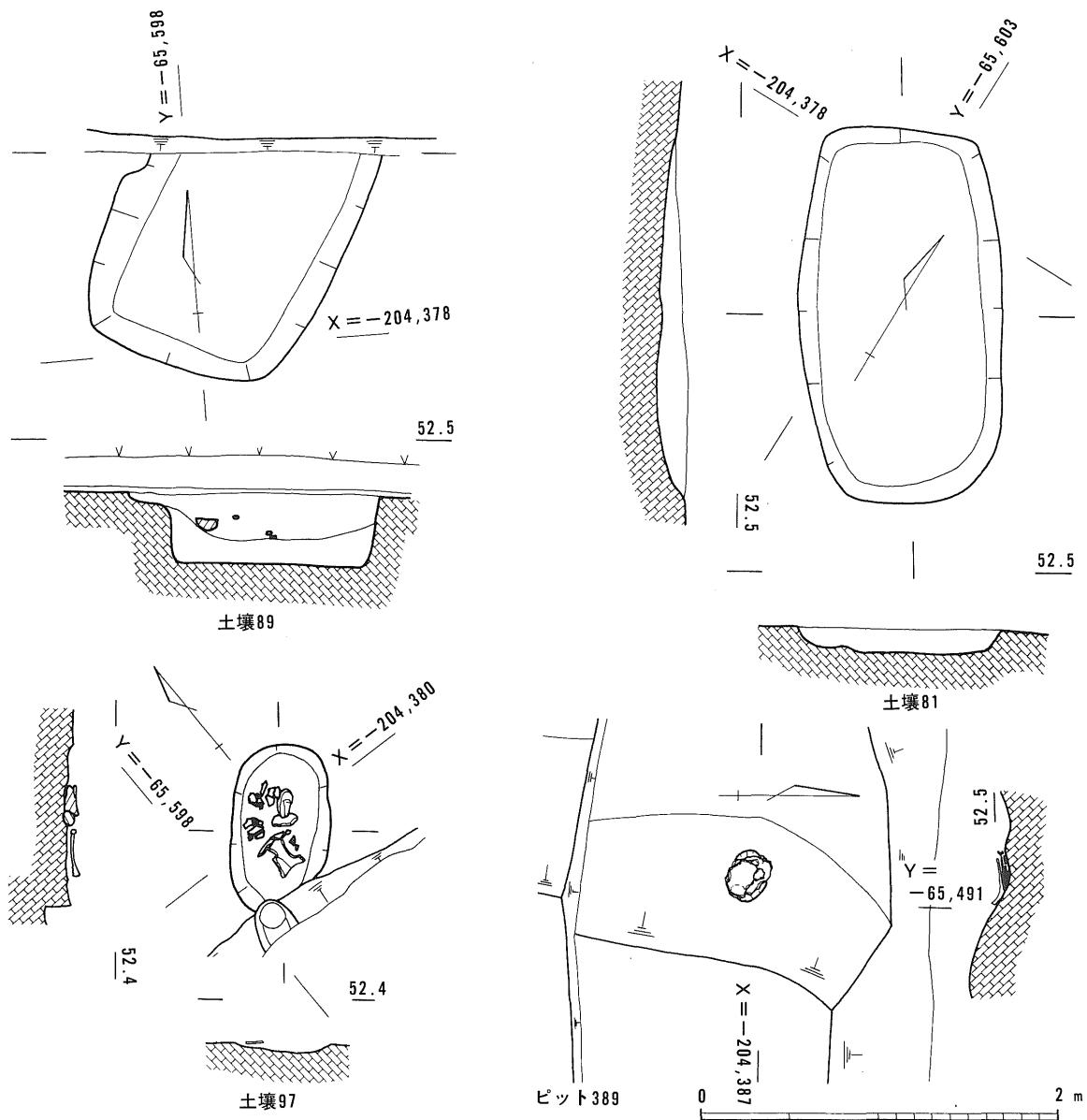
81 第34図

D17T01。長さ約2.00m・幅約1.15m・深さ約0.17mの規模で、平面形は長方形で底面は船底状である。埋土中から弥生土器23・剝片1が出土したが図示できるものはない。

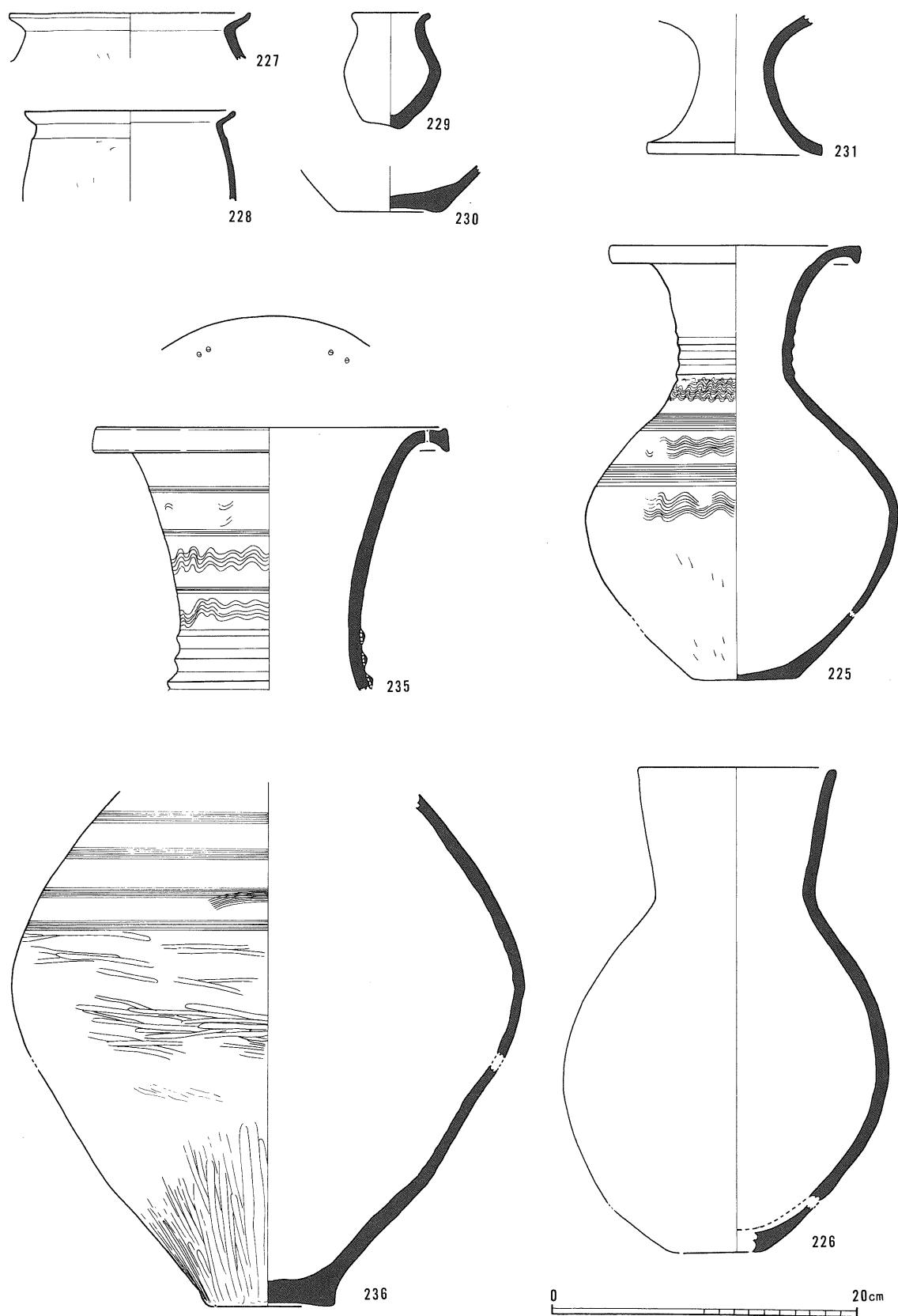
89 第35図 P L-12・28

D16T25。長さ約1.4m以上・幅約1.2m・深さ約0.4mの規模。平面形は長方形と思われる。壁は垂直に近く、底は平らである。埋土は二層に分層でき、上層の下部に遺物が多い。

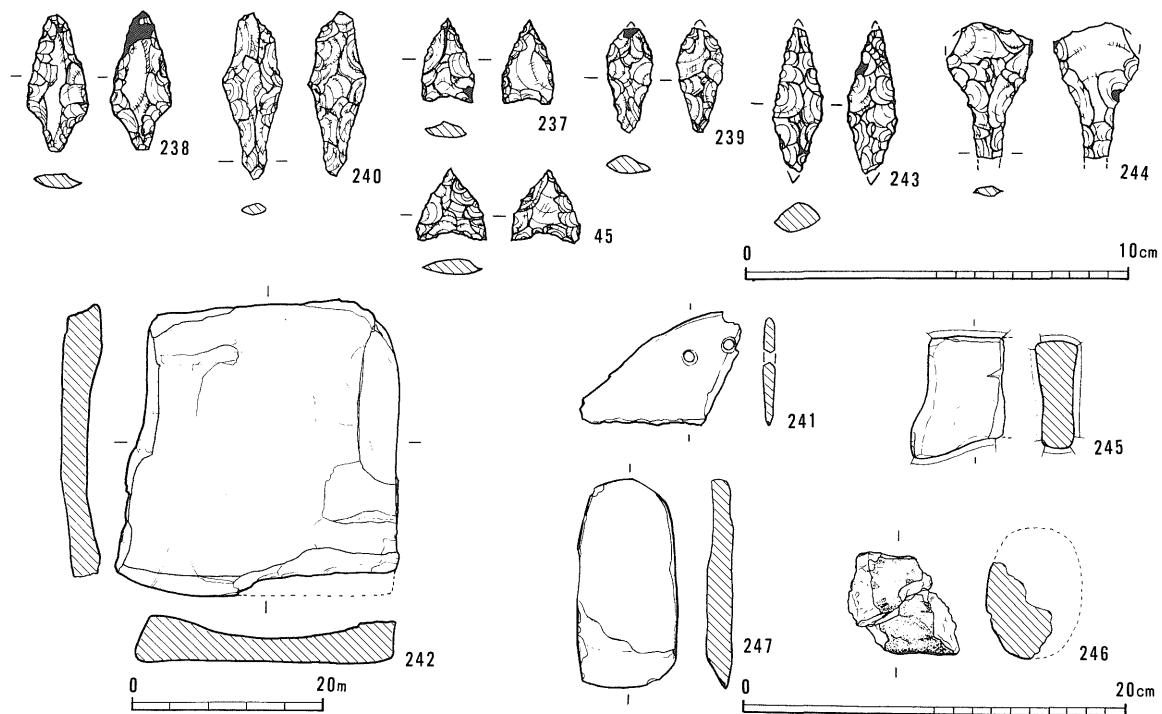
弥生土器145・石器3・剝片16が出土し、そのうち土器5点を図示した。甕(227・228)・壺(230)・高杯(231)・ミニチュア土器(229)で、甕の形態から畿内第III様式に属すると見られる。(228)は紀伊型甕である。



第34図 土壌状遺構



第35図 遺構出土の弥生土器



第36図 弥生時代遺構出土石器・石製品・他

97 第34・35図 PL-12・29

D16 T25。長さ約1m・幅約0.55m・深さ約0.05mの規模。平面形は長円形をしている。畿内第III様式の壺(235)が出土している。弥生土器102が出土。

389 第34・35図 PL-12

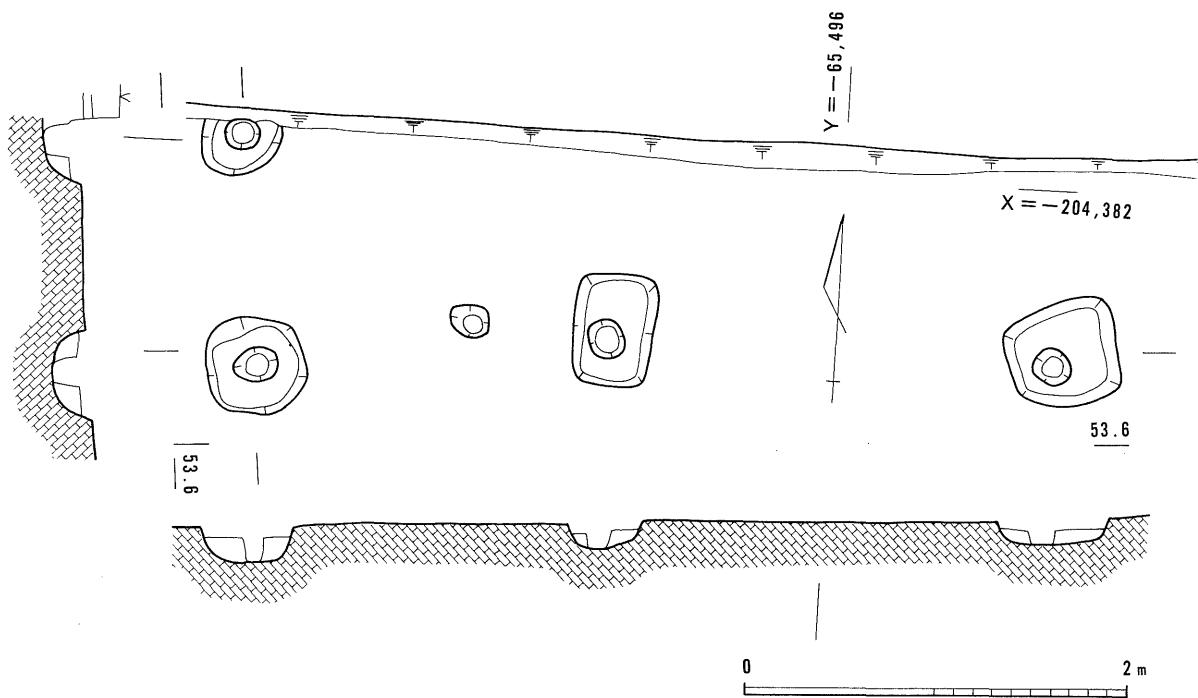
D16 V03。遺存状況が悪く、底だけが残ったピット状の遺構に、畿内第III様式の壺(236)が密着していた。

第3節 古墳時代以降 PL-12・13

古墳時代の遺構は少なくて土壙状の遺構が1基あるにすぎない。平安時代も遺構は少なく掘立柱建物・溝状遺構・土壙状遺構が1つずつあるだけである。中世になると、鎌倉時代の掘立柱建物1棟と屋敷地の区画および建物の一部とおぼしき柱列がみつかり、中世後期のものとしては鉄釜鑄造遺構がある。

土壙状遺構118 第39・42図

D16 U23。長さ約3.30m・幅約2.20m・深さ約0.70mの規模で、平面形が橢円形を呈する土壙状の遺構。埋土から土師器壺(248)が出土した。あまり類例のない器形であるが内面を丁重に削っていることから、古墳時代前期のものと判断した。弥生土器96・石器2・剝片2・土師器32が出土。



第37図 挖立柱建物跡 385

掘立柱建物385 第37図 P L-13

D16U25。東西二間・南北一間以上の規模の掘立柱建物。柱の芯芯間の距離は約1.2・1.9・2.4mで不揃いである。南西隅の柱穴の埋土から9もしくは10世紀のものと思われる土師器杯の細片が出土したため、平安時代の建物跡と判断した。

溝状遺構117 第42図

D16T23・U23。幅約0.4m・深さ約0.4mの溝状の遺構で、調査地を横断するように南北方向に延びる。埋土中に黒色土器A類が134片出土したので、10世紀代のものと判断した。

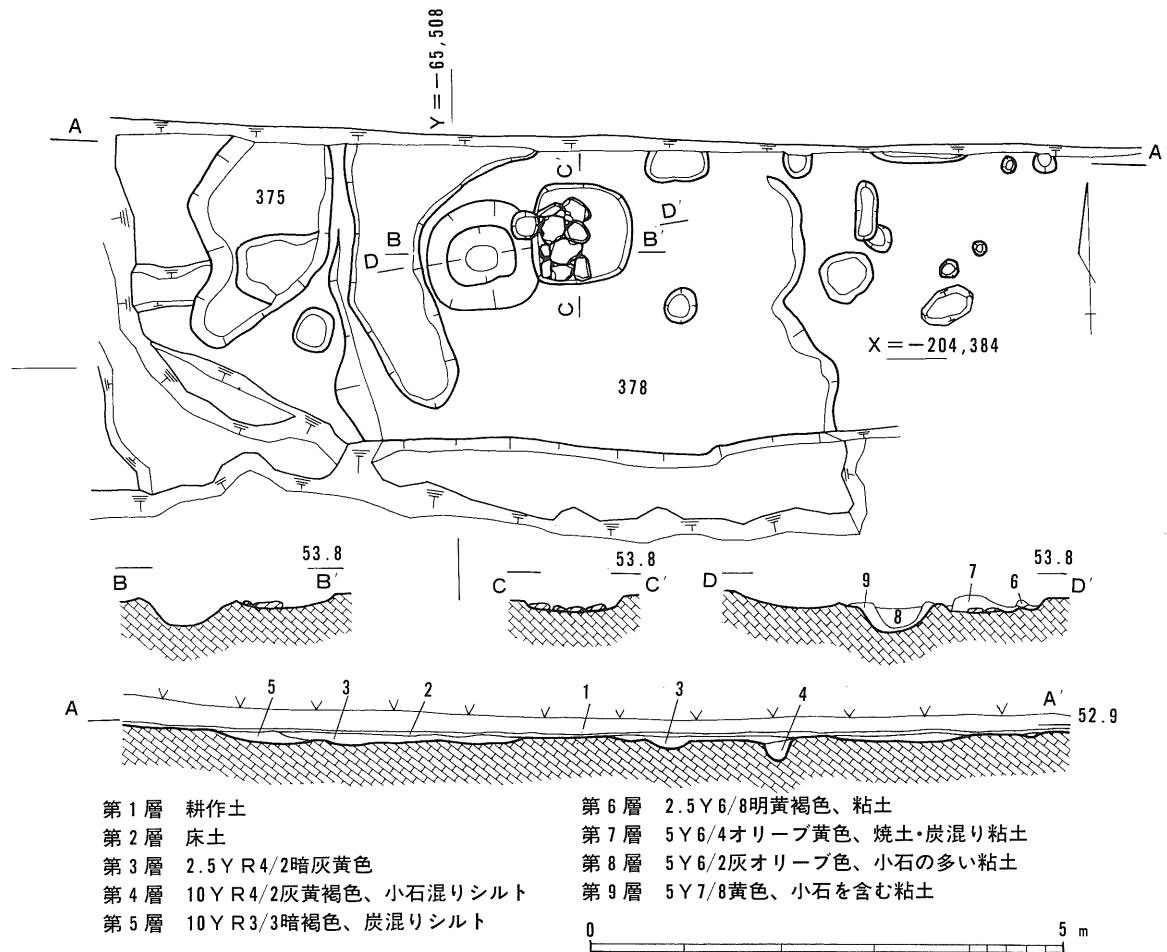
土壙状遺構782 第39・42図

D14Q20。長さ約0.50m以上・幅約0.62m・深さ約0.29mの規模の土壙状の遺構。縄文土器80・石器2・剝片6のほか、10世紀中頃の黒色土器A類椀(249)が出土した。

区画溝2-501・502・503・522 第39・41図 P L-8

D17S08~16。502・522は一連のもので、東西・南北方向の区画溝である。幅約0.30m・深さ約0.10mの規模で掘削されており長さは約30m以上ある。埋土から瓦器21・土師器77・不明土器47・弥生土器17・剝片1が出土しており、そのうち土師器小皿(252・253)を図示した。

501と505はこれより古い遺構である。この二つの溝は502・522と良く似た位置に掘削されていることから、同じような用途のものと考えられる。501からは瓦器6・土師器14・不明土器25・その他3が出土しているが、そのうちの土錐(254)を図化した。503からは弥生土器1が出土した



第38図 鋳造遺構 378

だけである。何れの遺物も細片で細かな年代はわからないが12~13世紀のものと思われる。505と平行する東西方向で、2.4m間隔で三間分の掘立柱建物とおぼしき柱列が見つかっている。2-640はこの柱列の東端のピットで、このなかから土釜(251)と土師器小皿(250)が出土した。溝状の遺構が区画する範囲は屋敷地であった公算が強いといえる。

この他、中世の掘立柱建物としてはD13区の東西二間(一間2.4m)・南北二間(一間2.1m)の東西棟の総柱建物と、D16区の2.4m間隔の柱列二間分が挙げられる。

鉄釜鋳造遺構378 第38・39図 PL-13・29

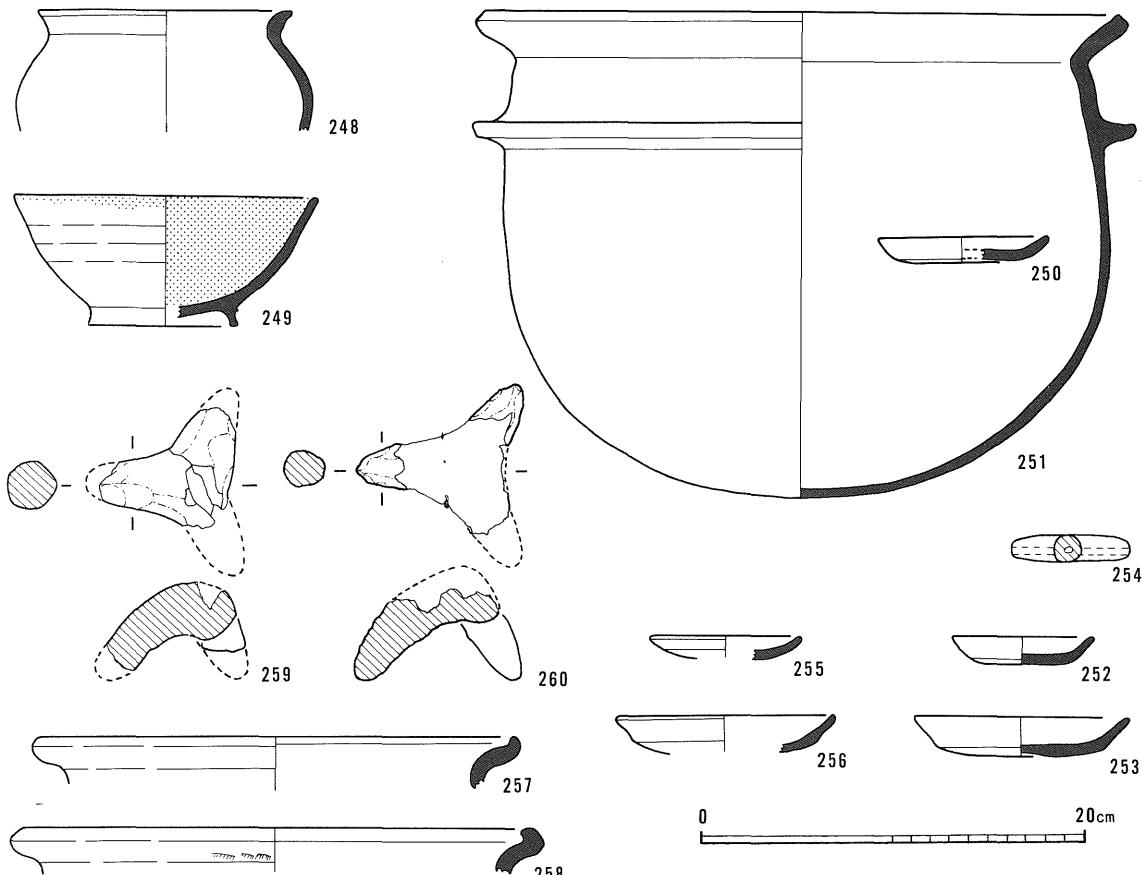
D16U02。地山の礫層を東西2.5m・南北約1.5m・深さ約0.1mの規模で掘り窪め、内部に方1m~1.2mの大きさの隅丸方形のピットを二基設けている。一方は深さ約0.4mで、もう一方は深さは約0.1mである。浅いほうのピットの底には、扁平な自然石が敷き詰められていた。両方のピットの内部には焼土粒の混入した粘土が充填されていた。

この遺構の埋土は焼土粒を多量に含んでいて、埋土中から弥生土器3・石器1・剝片6・瓦器2・須恵器1・陶器2・土師器224・不明土器114・その他44が出土した。

土師器には土鍋(257・258)や小皿(255・256)があり、瀬戸の盤(1005)や瀬戸天目(1004)

・備前鑄鉢（1006）もある。その他と数えたものには「さる」とよばれる青灰色に還元した内型支持具（259・260）や鑄型片（1007～1009）が多い。鑄型には鉄の付着する例（1007）もある。

これらの遺物から見て、この遺構は14世紀後半から15世紀位の時期の鋳造遺構と判断される。鋳型片のカーブから推定すると直径60cm以上の鉄釜を鋳造していたものと見られる。



第39図 古墳時代以降の遺物

第4表 柱穴状埋土のピット状遺構一覧

遺構名	地区名	規模 -平面規模・深さ-(m)	出土遺物
445	D14 S 24	0.48 * 0.84 * 0.60	縄文土器55・剥片7
459	D14 S 25	0.42 * 0.40 * 0.45	縄文土器11・剥片6・不明土器10
497	D14 S 24	0.70 * 0.48 * 0.48	縄文土器68・剥片13
518	D14 R 23	0.70 * 0.60 * 0.36	縄文土器16・剥片1
551	D14 S 23	0.74 * 1.24 * 0.60	縄文土器75・剥片26・不明土器16
552	D14 S 23	0.80 * 0.52 * 0.48	縄文土器43・剥片8
539	D14 S 23	0.50 * 0.60 * 0.55	縄文土器51・剥片4
637	D14 R 21	0.34 * 0.22 * 0.12	

第5表 楕円形土壙状遺構一覧

遺構名	地区名	規模－平面規模・深さ－(m)	出土遺物
427	D14T25	1.30 * 0.88 · 0.20	縄文土器117・剥片20
466	D14T25	1.10 * 0.74 · 0.37	縄文土器38・石器1・剥片13
496	D14S24	1.36 * 1.00 · 0.11	縄文土器53・石器4
540	D14S23	0.86 * 0.56 · 0.21	縄文土器26・石器1・剥片7
566	D14R22	1.42 * 0.88 · 0.25	縄文土器17・剥片2
674	D14R21	1.28 * 0.86 · 0.19	縄文土器59・石器3・剥片37
719	D14R21	1.30 * 0.82 · 0.22	縄文土器171・剥片21
884	D14Q18	1.20 * 0.70 · 0.30	縄文土器89・剥片1
892	D14Q18	1.20 * 0.66 · 0.20	縄文土器28・剥片3
2-1028	D14T22	0.74 * 0.40 · 0.10	縄文土器12

第6表 その他の遺構一覧

遺物番号	遺構名	地区名	規模－平面規模・深さ－(m)	埋土	出土遺物
128・129	748	D14R20	0.42 * 0.42 · 0.25	B	縄文土器73・剥片3
130	810	D14Q19	0.28 * 0.25以上 · 0.13	B	縄文土器4
131	900	D14Q18	0.34 * 0.38 · 0.07	B	縄文土器21・剥片1
132	664	D14R21	0.36 * 0.34 · 0.23	B	縄文土器31・剥片4
133・142	884	D14Q18	1.14 * 0.70 · 0.24	A	縄文土器89・剥片1
143・145					
134～136	809	D14Q19	0.28 * 0.28 · 0.23	B	縄文土器4・剥片1
137・138	422	D14Q25	0.38 * 0.28以上 · 0.32	A	縄文土器9・剥片1
139・140	919	D14Q17	0.44 * 0.32 · 0.14	A	縄文土器46
141	627	D14S22	0.28 * 0.32 · 0.27	B	縄文土器23・剥片3
144	833	D14R19	0.48 * 0.50 · 0.24	B	縄文土器19
146	743	D14R21	0.25 * 0.16 · 0.29	A	縄文土器8
147・148	615	D14S22	0.42 * 0.34 · 0.24	A	縄文土器31・剥片3
149～151	890	D14Q18	0.38 * 0.34 · 0.29	B	縄文土器30・石器1・剥片7
152～154	954	D14O16	0.80 * 0.80 · 0.70	A	縄文土器65・剥片5
155・156	845	D14R19	0.48 * 0.40 · 0.19	A	縄文土器17
157～159	894	D14Q18	0.74 * 0.40 · 0.18	A	縄文土器45・剥片7
160	807	D14Q19	0.28 * 0.28	B	縄文土器6
161	784	D14Q20	0.42 * 0.32 · 0.17	C	縄文土器3・剥片1
162	808	D14Q19	0.30 * 0.30 · 0.20	B	縄文土器8
163・164	745	D14Q19	0.24 * 0.22以上 · 0.20	B	縄文土器18・剥片4

第6表 その他の遺構一覧

遺物番号	遺構名	地区名	規模-平面規模・深さ-(m)	埋土	出土遺物
165	802	D14Q19	0.22*0.22・0.12	B	縄文土器6
166	971	D14P17	0.48*0.40・0.21	B	縄文土器50・剝片5
167	2-89	D14L12	0.28*0.26以上・0.19		縄文土器18
168	722	D14Q21	0.50*0.22・0.12	A	縄文土器12・剝片6
169	570	D14R22	0.52*0.40・0.17	C	縄文土器31・剝片3
170	889	D14Q18	0.44*0.28・0.19	B	縄文土器17・剝片4
171~173	702	D14R21	0.64*0.48・0.51	A	縄文土器42・剝片3
174	552	D14S23	0.64*0.48・0.48	A	縄文土器43・剝片8
175	857	D14P18	0.68*0.40・0.10	B	縄文土器23・剝片5
176	848	D14R19	0.58*0.38・0.18	B	縄文土器11
177	539	D14R21	0.50*0.60・0.10	A	縄文土器51・剝片4
178	719	D14R23	1.42*0.90・0.17	A	縄文土器171・剝片21
180・187	2-1013	D14T24	0.50*0.30・0.14		縄文土器19・剝片1
181・185	755	D14R20	0.38*0.30・0.28	B	縄文土器25・剝片3
182	2-1014	D14T24	1.22*0.80・0.27		縄文土器73・石器1・剝片22
183	538	D14S23	0.54*0.48以上・0.06	B	縄文土器23・石器1・剝片4
184	842	D14R19	0.42*0.44・0.20	B	縄文土器8
186・191	2-1016	D14T23	0.90*0.40・0.43		縄文土器45・石器1・剝片3
192					
188	814	D14Q19	0.68*0.54・0.25	B	縄文土器56・石器1・剝片2
189	714	D14S21	0.50*0.40以上・0.18	B	縄文土器47・石器1・剝片13
190	924	D14P17	0.42*0.46・0.19	B	縄文土器21・剝片2
193・197	1013	D14S25	0.66*0.52・0.35	B	縄文土器14・石器1・剝片4
194	2-1051	D14T22	0.50*0.44以上・0.42		縄文土器43・剝片8
195	167	D16V19	0.26*0.20・0.13	B	縄文土器2
196	274	D16V16	1.94*0.78・0.13	B	縄文土器2
198	713	D14S21	0.64*0.58以上・0.22	B	縄文土器55・石器1・剝片1
199	926	D14P17	0.30*0.30・0.12	B	縄文土器20・石器1・剝片4
200	674	D14R21	1.28*0.86・0.19	A	縄文土器59・石器3・剝片37
201・202	429	D14T25	0.92*0.78以上・0.25	A	縄文土器207・石器4・剝片11
203	667	D14R21	0.30*0.32・0.65	B	縄文土器8・石器1・剝片8
204	509	D14R24	0.16*0.18・0.07	C	縄文土器2
205	814	D14Q19	0.54*0.38・0.25	B	縄文土器56・石器1・剝片2
206	519	D14R23	0.28*0.28・0.42	B	縄文土器2・石器1
207	646	D14R21	0.30*0.34・0.19	B	縄文土器11・石器1
208	714	D14S21	0.52*0.40以上・0.18	B	縄文土器47・石器1・剝片13
1002	802	D14P19	0.22*0.21・0.14	B	縄文土器6

第III章 付章

前章までに調査で発見された遺構・遺物についての事実関係および所見、それらの取りまとめと評価を記述してきた。ここでは、前章に記載しなかった情報について報告する。

第1節 縄文遺構の時期区分 第40図

今回の調査で見つかった縄文時代の遺構は総数477基に達する。第II章で主たるものについて報告したが、そこから漏れたものの方が多数である。そこで、縄文時代の遺構が最も集中して見つかったD14区について、遺構の時期区分を表示した図を作成したので、それについて説明する。

第45図の時期区分は次のような指標でおこなった。K-II 1 (北白川上層1～3期)・K-II 2 (一乗寺K・元住吉山I式)・K-III (宮滝式)・B-I (滋賀里II～滋賀里III b)・B-II (滋賀里IV～船橋式)。つまり、K-II 1・2は縁帶文土器様式、K-IIIは凹線文土器様式、B-Iは西日本磨研土器様式、B-IIは突帶文土器様式という区分である。この区分は(小林達雄他1989)の成果に全面的に依拠したものである。

この区分に従えばB-I期に該当するものが最も多いが、そのなかでは滋賀里III b式が殆どを占める。こうした時期の違いによる遺構の絶対数の差はあるが、時期別にみた遺構の分布状況や遺構の規模の相違には、さしたる傾向は見ることは出来ない。

第2節 縄文土器の胎土と縄文原体

1. 縄文土器の胎土

出土した縄文土器の胎土中に含まれる特定鉱物を肉眼観察で識別し、その結果を第7表にまとめた。

第7表 縄文土器の胎土 (数字は破片数)

結晶片岩	角閃石・金雲母	金雲母	不明	合計
16,808	38	77	641	1,7564

結晶片岩が含まれているのは在地産、角閃石・金雲母が含まれるのは中河内産、金雲母があるのは南河内産と考えられる。

不明の分を除いて計算してみると、他地域からの搬入品と見られる土器の比率はわずか0.68%に過ぎない。東北や関東系の大洞BC・加曾利B式の土器が出土していることからみると、広範囲な地域での交流があったことは事実であるが、実際に土器が移動する地域間交流は意外に停滞した状態といえよう。

2. 縄文の原体

縄文原体の分類結果を第8表にまとめた。



第40図 繩文土器出土時期別分布図

第8表 縄文原体の種類（数字は破片数で付加条は分類していない）

単 節			無 節			撚 糸			擬 縄 文		
R	L	不明	r	1	不明	r	1	不明	二枚貝	巻貝	不明
92	202	79	0	3	0	0	9	0	1	4	0

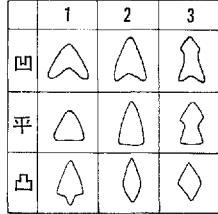
単節Lが多数を占める。

第3節 石鎌の形態と調整—縄文時代の石鎌は弥生時代の石鎌より丁寧に作られたか？—

今回出土した石器の数量は、未製品も入れると、石鎌183・削器16・石錐6・石斧2・楔状石器1・石核6・凹み石5・石皿1・石包丁2となる。これには縄文時代・弥生時代のものが含まれているが、石鎌が圧倒的多数を占める。削器や石斧が少ないので、調査地が縄文時代の居住域ではないことを反映したものとみられる。

石器の多数を占める石鎌であるが、凹基・平基式の小型の石鎌は縄文時代にもあるし弥生時代にもある。単純な形態分類だけでは何れの時代のものは分からることになるが、同じ形態の石鎌でも弥生時代のものは調整剥離が省略傾向にあり、素材剥片の剥離面を残す例が多いと言われている。これが本当にそうなのか、あるいはどの程度信頼できることなのか、今回の出土事例を素材に検討することにする。

1. 石鎌の形態分類 第41図



第41図の如き分類基準を設けた。凹基と平基の区分は底辺から基部が2mm以上窪むものを凹基とした。完形品についての数値データは石鎌一覧表に示しているが、ここでは欠損していても形態が判明するもの全部を取り上げたので、一覧表とは資料数が異なっている。

第41図 石鎌の形態

2. 形態分類・調整と出土状況 第8～11表

丁寧に調整して素材剥片面が残っていないものを調整A、素材剥片面を残したものを調整Bとした。

次に所属時期の判断根拠について述べる。縄文時代の遺構およびD14区第3c層から出土したものは、第I章基本層序の検討結果からみて縄文後期から晩期のものと考えられる。弥生時代の遺構から出土したものについては、理論的には縄文時代のものが含まれる可能性がある。ところが、出土した石鎌の平面分布をみると、ほとんどが縄文時代の遺構が見つかる地区から出土したものといえる。

縄文時代の遺構・遺物の分布領域と弥生時代のそれらの分布領域は、第I章で検討した如く大きく距離を置いている。弥生時代の遺構・遺物の分布領域が縄文時代の狩猟の場であった可能性はあるが、それにしては石鎌の出土数が少ない。後世の遺構や地層から出土したものも含めて、

弥生時代の領域から出土した石鏃は弥生時代、縄文時代の領域から出土した石鏃は縄文時代に属すると考えるのが自然であろう。

そうであれば、弥生時代の遺構から出土したものは弥生時代のものとできるし、その他のものは各領域で所属時期を判断できよう。

第9表 縄文時代の石鏃

形態\調整	A	B	計
凹 1	8	2	10
凹 2	15	8	23
平 1	4	15	19
平 2	3	1	4
平 3	2		2
凸 1			
凸 2		1	1
凸 3			
計	32	27	59

第10表 弥生時代の石鏃

形態\調整	A	B	計
凹 1		1	1
凹 2		1	1
平 1	1		1
平 2			
平 3			
凸 1	2	1	3
凸 2		1	1
凸 3			
計	3	4	7

第11表 その他地区別の石鏃

地区	D14		D16		D17		計
	A	B	A	B	A	B	
凹 1	4	4					2 10
凹 2	10	6					16
凹 3		1					1
平 1	7	9					16
平 2		3					3
平 3	1	1			1		3
凸 1							
凸 2		2		1			3
凸 3							1
計	22	26	1	1	1	2	53

3. 命題の検証

では、各表を素材に命題の検証に入る。縄文時代の凹基はA調整が多数を占めるが、平基はB調整が多数を占める。弥生時代の石鏃は絶対数が少ないためはっきりしないが、凹基のA調整はない。凸基は双方の絶対数が少ないので比較できない。

これに地区別の石鏃を加えてみる。縄文領域はD14区で弥生領域はD17区である。したがってD14区出土の石鏃は縄文時代、D17区出土の石鏃は弥生時代に属するとする。D16区は縄文領域と弥生領域の境界に相当するため、どちらのものか判断はできないので、検討の数量から除外する。こうして合算すると、縄文の凹基は37:21でA調整が多数を占める。縄文の平基は17:29でB調整が多数を占める。弥生の石鏃には凹基のA調整と平基のB調整はない。資料数が少ないので、統計学的に縄文と弥生を比較するのは困難で命題を否定する根拠もない。凹基式の石鏃に関しては、縄文の方の調整が丁寧である可能性はあるだろう。

確実なのは、縄文時代の平基式石鏃は同じ時代の凹基式に比べて調整が雑ということである。基部の形態で調整の度合いが逆になるのである。この現象を自由度1・危険率5%として χ^2 検定をおこなったところ、7.401 (資料から得られた χ^2 の値) > 3.847 (χ^2 の上限値) という結果であった。この現象は偶然ではなく、統計学的に有意水準にあるのである。第11表の資料数を除外しても同様の検定結果を得る。

次に、縄文石鏃の凹基と平基の厚さを比較したところ、前者の平均値は0.35cmで後者の平均値は0.43cmであった。平基の石鏃のほうが相対的に厚いといえる。両者とも一定の数量があるので、平均値の比較でも充分意味があろう。そうすると、調整の丁寧な凹基式の石鏃は、調整の雑な平基式の石鏃に比べて薄いといえる。そして、平基式の石鏃のなかでは調整Bのほうが相対的に厚い。厚さの差は調整の及んだ分にはかならないのである。

つまり、厚さの違いは基部の形態と相関した調整の度合いの結果で、素材剥片の厚さによって基部の形態が決定されたのではないのである。縄文人は石鏃を製作するにあたって、作出された剥片が薄いときにやむをえず平基式の鏃を製作したのではなく、他の確たる目的意識があったに違いない。それが、機能に根差したものか時期差を反映したものかどうかは今のところわからぬが、いずれにせよ平基式の石鏃は凹基式のものに比べて略式のものといえる。

したがって、縄文時代の石鏃は弥生時代のものより調整が丁寧であるという命題は、平基式の石鏃に関しては間違っているといえる。平基式の石鏃の調整の度合いは時期判断の手掛かりにはならないのである。おそらく、凹基式の石鏃に限って有効な区分なのであろう。

第4節 縄文遺構から出土した獸骨 第12表

第II章で紹介した以外に縄文時代の遺構から骨片が出土する例がある。合計32例あるが、何れも骨片は小さくて断片的で埋葬を伺わせるようなものはない。そして、殆どの骨片が焼けていた。焼けたからこそ分解せずに遺存したともいえるが、なぜ焼けたのかは今のところ分からぬ。とりあえず、骨片の同定ができたものについて表を提示しておく。

第12表 骨片を出土した縄文遺構

遺構名	時期	種類と部位	遺構名	時期	種類と部位
420	晩期	鹿かカモシカの右前頭骨 鹿の中手もしくは中足骨	745	後期	鹿か猪の長骨
436	不明	成人骨?	810	後期	鹿か猪の膝蓋骨
459	不明	鹿の下顎骨	918	後期	鹿か猪の長骨
529	晩期	鹿か猪の肩甲骨			

文献

海南省教育委員会・海南省文化財調査研究会『溝ノ口遺跡I』1984

海南省教育委員会・海南省文化財調査研究会『溝ノ口遺跡II』1987

京嶋 覚「群集土壙の再評価—集団墓説への批判—」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3』

財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1995

小林達雄 編「縄文土器大観4」『後期 晩期 続縄文』小学館 1989

遺 物 一 覧 表

遺物番号	挿図番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色 調	技 法 の 特 徴	登録番号
1	7 P L-14	D14 R19	3c	深鉢			1~4mmの結晶片岩を多量に含む	中	外-灰褐色 (7.5Y R4/2) 内-浅黄色 (2.5Y7/3) 断-黒褐色 (2.5Y3/1)	沈線文・単節し	352-1
2	7 P L-14	D14 Q18	3c	深鉢			1.5mm以下の白色砂粒を多量に含む	中	外-灰褐色 (7.5Y R5/2) 内-にぶい橙色 (7.5Y R7/6)	沈線文・単節し	523-4
3	7 P L-14	D14 Q18	3c	深鉢			4.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-黒褐色 (2.5Y3/1)	凹線文	523-2
4	7 P L-14	D14 R19	3c	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-黄灰色 (2.5Y6/1) 内-浅黄橙色 (10Y R8/3)	突帯・擬繩文	352-1
5	7 P L-14	D14 R20	3c	注口土器			2.5mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 内-にぶい黄橙色 (2.5Y6/3)	突帯・凹線文・橋状取っ手	366-1
6	7 P L-14	D14 Q18	3c	深鉢			0.5~2mmの結晶片岩を多量に含む	中	外-明赤褐色 (2.5Y R5/2) 内-灰黄褐色 (10Y R5/2)	口縁端に刻み目 口縁・体部の境目に沈線文・刻み目 貝殻条痕	523-3
7	7 P L-14	D14 R20	3c	深鉢			4.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (5Y R7/6) 内-灰白色 (10Y R8/2) 断-灰色 (7.5Y4/1)	貝殻条痕 (二枚貝)	353-1
8	7 P L-14	D14 S21	3c	ミニチュア 鉢			2mm以下の白色砂粒を多量に含む	中	外・内・断-黒褐色 (2.5Y3/1)	貝殻条痕	981-1
9	7 P L-14	D14 S21	3c	有孔土器片			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中			981-3
10	7 P L-14	D14 S21	3c	取っ手			1~1.5mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外・内-にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 断-黄灰色 (2.5Y4/1)	刻み目	981-4
15	7 P L-14	D14 M13	暗褐色土	深鉢			1.5mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外・内・断-灰黄褐色 (10Y R6/2)	沈線文	273-2
16	7 P L-14	D14 M14	暗褐色土	深鉢			1~3mmの結晶片岩を多量に含む	中	外・内-にぶい橙色 (5Y R6/4) 断-黒褐色 (10Y R3/1)	条線文	274-2
28	7 P L-14	D14 M11	谷理土	深鉢			2mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	口唇部に刻み目 貼付け突帯・刻み目	419-1
29	7	D14 M10	谷理土 黒色土器A類 椀	口径14.8 残高3.3	7	1mm以下の砂粒を多量に含む クサリ繩を微量含む		外-にぶい黄橙色 (10Y R7/3) 内-黄灰色 (2.5Y4/1)			159-1
30	7	D14 Q13	谷理土 瓦器椀	口径16.2 残高3.0	20	砂粒を少量含む		外-灰色 (5Y4/1) 灰白色 (2.5Y8/2) 内-灰白色 (2.5Y7/1)			420-1
31	7	D14 M10	谷理土 土師器 皿	口径9.0 器高1.3	25	5mm大的結晶片岩を少量含む	硬	外・内・断-橙色 (7.5Y R7/6)	回転糸きり		156-1
32	7 P L-14	D17 S20	暗褐色土	深鉢			2~4mmの砂粒を微量含む	中	外・内・断-にぶい橙色 (7.5Y R6/4)	貼付け突帯・刻み目	399-1
33	7 P L-14	D17 S20	暗褐色土	深鉢			1~3.5mmの砂粒を微量含む	中	外・内・断-橙色 (5Y R6/6)	貼付け突帯・刻み目	400-1
34	7	D17 R21	暗褐色土	壺	口径20.8 残高4.8	8	4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-浅黄橙色 (10Y R8/4) 内-浅黄色 (2.5Y8/3) 断-黄灰色 (2.5Y6/1)		148-1
35	7	D17 R13	暗褐色土	灰釉陶器 椀	口径15.2 残高2.8	11		中	外-灰白色 (2.5Y7/1)		1-4
36	7	D17 R16	暗褐色土	土師器 椀	口径14.2 残高2.7	8	砂粒を少量含む	中	外・断-橙色 (5Y R7/6) 内-黄灰色 (2.5Y4/1)		143-1
37	7	D17 R13	暗褐色土	瓦器 椀	口径14.0 残高4.6	6	砂粒を少量含む	中	外・内-灰色 (N4/0)		1-2
38	7	D17 R13	暗褐色土	瓦器 椀		50	3mm以下の結晶片岩を少量含む	中	外・内-オリーブ黒 (10Y3/1)		1-3

遺物一覧表

遺物番号	挿図番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
39	7	D17 R13	暗褐色土	土師器皿	口径10.0 残高1.5	25	砂粒・クサリ礫を少量含む	中	外・内・断・橙色 (5Y R6/6)	回転糸きり	1-1
40	7	D17 R20	暗褐色土	白磁碗				中	外・内・オーリーブ灰色 (2.5G Y6/1) 断・灰白色 (N8/0)		147-1
41	7	D17 S14	暗褐色土	青磁碗				硬	外・内・浅黄色 (5Y 7/3) 断・灰白色 (5Y 8/1)	櫛書き劃花文	395-1
42	7	D17 R13	暗褐色土	土鍤	長さ5.0 直系1.4		砂粒を多量に含む	中	黄灰色 (2.5Y 6/1)		1-5
63	9 PL-17	D14 R22	597	深鉢	口径32.0 器高29.5	98	砂粒を多量含む 結晶片岩を少量含む	中	外・橙色 (7.5Y R7/6) 内・黄橙色 (7.5Y R8/8)	外・ササラ状工具によるケズリ 底部ナデ 内・一次調整 貝殻条痕 二次調整 ナデ	384-1
64	9 PL-18	D14 R22	597	深鉢	口径32.6 残高24.5	33	砂粒を多量に含む 結晶片岩を少量含む	中	外・内・にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	外・口縁部二枚貝条痕 口唇部棒状工具による刻み目 体部ササラ状工具によるケズリ 内・一次調整 二枚貝条痕 二次調整 ナデ	384-2
65	10 PL-17	D14 R22	652	深鉢	口径32.3 器高26.6	80	結晶片岩・砂粒を多量に含む	中	外・黒褐色 (10Y R3/1) 内・褐灰色 (10Y R4/1)	外・口縁部二枚貝条痕 口唇部棒状工具によるケズリ 内・口縁部二枚貝条痕 体部ナデ	385-1
66	11 PL-17	D14 U24	2-1008	深鉢	口径32.0 ~36.0 器高46.5	45	5mm大の結晶片岩を多量に含む	中	外・橙色 (7.5Y R6/8) 内・灰色 (5Y 5/1)	外・口縁部二枚貝条痕 体部ササラ状工具によるケズリ 底部ナデ 内・口縁部二枚貝条痕 体部ナデ	8-2
67	11 PL-18	D14 U24	2-1008	浅鉢	口径26.4 残高15.8	30	0.5~3mmの結晶片岩を多量に含む 1mm以下のクサリ礫を少量含む	中	外・にぶい褐色 (7.5Y R6/3) 内・黒褐色 (2.5Y 3/1)	外・横方向のヘラミガキ 底部ケズリ 内・横方向のヘラミガキ	8-1
68	12	D14 R22	666	深鉢			1~4mmの結晶片岩を多量に含む	中	外・にぶい橙色 (7.5Y R7/3) 内・褐灰色 (10Y R5/1)	外・口縁部二枚貝条痕 体部ササラ状工具によるケズリ 内・口縁部二枚貝条痕	391-1
69	12	D14 R22	598	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・黒褐色 (2.5Y 3/1) 内・黒褐色 (2.5Y R3/1)	外・ササラ状工具によるケズリ 内・ナデ	482-1
70	19 PL-70	D14 O16	958	深鉢	口径41.0 残高21.0	8	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・にぶい黄橙色 (10Y R6/3) 内・黄灰色 (2.5Y 5/1)	外・内・一次調整卷貝条痕 二次調整ナデ 凹線文・卷貝扇状文	389-1
71	19 PL-17	D14 O15	943	深鉢	口径30.3 残高22.4	50	3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・にぶい黄橙色 (10Y R6/3)	内・一次調整卷貝条痕・二次調整ナデ 外・卷貝条痕 (ヘナタリ)	484-1
72	14 PL-19	D14 S23	558	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・灰黄褐色 (10Y R5/2) 内・にぶい褐色 (7.5Y R6/3)	単節R	526-14
73	14 PL-19	D14 S23	558	深鉢			結晶片岩を微量含む	硬	外・内・断・明赤褐色 (5Y R5/6)	外・ミガキ 口唇部に刻み目	526-10
74	14	D14 S24	558	深鉢			金雲母を多量に含む	中	外・内・断・にぶい橙色 (7.5Y 6/4)	沈線文・単節L	413-1
75	14 PL-19	D14 S23	558	深鉢			1.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・にぶい黄橙色 (10Y R7/3) 内・灰黄褐色 (10Y R5/2)	沈線文・単節L	526-13
76	14 PL-19	D14 S23	558	深鉢			3mm大の結晶片岩を多量に含む	硬	外・内・断・にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	沈線文・単節R	409-1
77	14 PL-19	D14 S22	558	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断・にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	沈線文・刺突文・単節L	677-10
78	14 PL-19	D14 S22	558	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・灰黄褐色 (10Y R5/2) 内・にぶい黄橙色 (10Y R6/3)	沈線文・刺突文・単節L	677-6
79	14 PL-19	D14 S23	558	深鉢			2mm以下の結晶片岩を中量含む	中	外・内・断・灰黄褐色 (10Y R6/2)	結節繩文 (単節L)	419-6
80	14	D14 S22	558	壺			金雲母を微量含む	中	外・内・断・にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	結節繩文	677-5
81	14	D14 S23	558	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・橙色 (5Y R6/6) 内・にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	沈線内連続刺突文・結節繩文 (単節L)	419-2

遺物一覧表

遺物番号	押印番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
82	14 P L-19	D14 S23	558	浅鉢			砂粒を多量に含む	中	外-橙色 (5Y R6/8) 内-にぶい橙色 (7.5Y6/4)	沈線文・結節繩文 (単節R)	409-2
83	14	D14 S24	558	深鉢			5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-橙色 (7.5Y R7/6)	沈線文・結節繩文 (単節R)	413-2
84	14 P L-19	D14 S23	558	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰黄褐色 (10Y R5/2) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	沈線文・結節繩文 (単節R)	526-2
85	14 P L-19	D14 S23	558	深鉢			0.5mm以下の砂粒を中量含む	硬	外・内-褐灰色 (10Y R4/1) 断-にぶい黄橙色 (10Y R7/2)	沈線内連続刺突文・単節R・ミガキ	419-7
86	14	D14 S23	558	深鉢			0.5mm以下の砂粒を中量含む	中	外・内・断-褐灰色 (10Y R4/1)	沈線内連続刺突文・単節R	419-9
87	14 P L-19	D14 S23	558	深鉢			2mm以下の結晶片岩を中量含む	中	外・内・断-明黄褐色 (10Y R7/6)	押し引き沈線文・単節R	419-8
88	14 P L-19	D14 S23	558	深鉢			1mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/3) 内-灰黄褐色 (10Y R5/2)	沈線内連続刺突文・刻み目・単節R	676-1
89	14 P L-19	D14 S23	558	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/3) 内-橙色 (5Y R7/6) 断-褐灰色 (10Y R4/1)	沈線文	419-3
90	14	D14 S22	558	鉢			1mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	沈線文	677-7
91	14	D14 S22	558	深鉢			1mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R6/4)	沈線文	679-1
92	14	D14 S24	558	深鉢			2mm以下の結晶片岩を少量含む	中	外・内・断-橙色 (7.5Y R7/6)	刺突文・沈線文	427-3
93	14 P L-19	D14 S24	558	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R6/4) 内-橙色 (5Y R6/8) 断-褐灰色 (10Y R4/1)	条線文	413-6
94	14 P L-19	D14 S23	558	壺			4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内-にぶい黄橙色 (10Y R6/3) 断-灰黄褐色 (10Y R5/2)	刻み目・沈線文・刺突文	526-8
95	14 P L-19	D14 S23	558	深鉢			3mm以下の結晶片岩を少量含む	中	外・内・断-橙色 (5Y R7/6)	刻み目・沈線文	526-9
96	14 P L-19	D14 S23	558	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰黄褐色 (10Y R5/2) 内-橙色 (5Y R6/6)	突帯文・沈線文・単節L	676-2
98	14	D14 S24	558	注口土器			0.5-2mmの砂粒を多量に含む	中	外・内・断-浅黄褐色 (10Y R8/3)	指頭圧痕	427-8
99	15 P L-20	D14 S23	558	深鉢	口径31.0 残高19.1	16	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄褐色 (10Y R5/3) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	一次調整貝殻条痕・二次調整ナデ	419-1
100	15 P L-20	D14 S23	558	深鉢	口径24.4 残高9.0	8	2mm以下の結晶片岩を多量に含む クサリ繖少量含む	中	外・内・断-橙色 (7.5Y7/6)	一次調整貝殻条痕・二次調整ナデ	419-5
101	15 P L-20	D14 S23	558	深鉢	残高8.7	60	金雲母を少量含む	硬	外-灰黄褐色 (10Y R6/2) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/2)	ナデ	526-1
102	15 P L-20	D14 S22	558	深鉢	残高3.2		3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/3) 内-灰黄色 (2.5Y7/2)	ナデ	679-2
103	21 P L-20	D14 S25	420	深鉢	口径45.5 残高13.0	12	3mm以下の結晶片岩を少量含む	中	外-褐灰色 (10Y R1/4) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	一次調整巻貝条痕・二次調整ミガキ 凹線文・巻貝扇状文	386-8
104	21 P L-20	D14 T21	420	深鉢			3mm以下の結晶片岩を含む	硬	外・内-にぶい黄褐色 (10Y R5/3)	凹線文・巻貝扇状文・ナデ	329-1
105	21	D14 S25	420	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-にぶい橙色 (7.5Y7/4)	一次調整巻貝条痕・二次調整ミガキ 凹線文・巻貝扇状文	386-10
106	21 P L-20	D14 S25	420	深鉢	残高16.0	20	6mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外-褐灰色 (10Y R4/1) 内-黒褐色 (2.5Y3/1)	一次調整巻貝条痕・二次調整ミガキ 凹線文・巻貝扇状文	386-3

遺物一覧表

遺物番号	挿図番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
107	21 PL-17	D14 S25	420	浅鉢	口径17.8 器高6.7	40	1mm以下の結晶片岩を微量含む	硬	外-橙色 (7.5Y6/8) 内-黒褐色 (2.5Y3/1)	一次調整巻貝条痕・二次調整ミガキ 凹線文 内面に赤色顔料	386-1
108	21	D14 S25	420	浅鉢	口径31.0 器高4.7	8	4mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外・内・断-黒褐色 (2.5Y3/1)	外-ミガキ 内-ナデ	388-1
109	21	D14 S25	420	浅鉢	口径20.0 器高5.3		3mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外-にぶい橙色 (7.5YR6/4) 内-灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外-一次調整巻貝条痕 外-二次調整ミガキ	386-7
110	21 PL-21	D14 S25	420	深鉢	口径36.5 器高10.5	20	3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰黄褐色 (10YR5/2) 内-灰黄褐色 (10YR6/2)	内・外-一次調整巻貝条痕 外-二次調整ミガキ	386-2
111	21 PL-21	D14 S25	420	深鉢	口径35.4 器高13.7	16	6mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外・内・断-黒褐色 (2.5Y3/1)	内・外-一次調整巻貝条痕 外-二次調整ミガキ	386-4
112	22	D14 S25	420	浅鉢	口径32.0 器高4.5	5	4mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外-灰黄褐色 (10YR6/2) 内-にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内・外-一次調整巻貝条痕 外-二次調整ミガキ	386-6
113	22 PL-21	D14 S25	420	深鉢	口径36.0 残高17.4	12	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-橙色 (5YR6/6)	内・外-一次調整巻貝条痕 外-二次調整ミガキ	386-9
114	22	D14 S25	420	漆鉢	口径16.2 残高3.8	8	1mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-橙色 (5YR6/6)	内・外-一次調整巻貝条痕 外-二次調整ナデ	386-13
115	22	D14 S25	420	浅鉢	口径19.0 残高4.2	12	2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-褐色 (10YR4/1) 内-褐色 (10YR6/1)	内・外-一次調整巻貝条痕 外-二次調整ミガキ	387-1
116	22	D14 S25	420	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰黄褐色 (10YR5/2) 内-にぶい橙色 (7.5YR7/4)	凹線文・貝殻押圧文	386-15
117	22 PL-20	D14 S25	420	浅鉢	残高2.2	70	3mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外-にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内-にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内-貝殻条痕 (二枚貝) 外-ナデ	386-5
118	22 PL-20	D14 S25	420	浅鉢			4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10YR7/3) 内-にぶい黄橙色 (10YR7/2)	外-一次調整巻貝条痕 二次調整ナデ	386-12
119	22 PL-20	D14 S25	420	深鉢	残高4.0	60	4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内-灰黄褐色 (10YR6/2)	外-一次調整巻貝条痕 二次調整ナデ	386-11
120	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢			2mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外-橙色 (7.5YR7/6) 内-褐色 (10YR4/1)	円形刺突文・沈線文	678-5
121	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-橙色 (2.5YR6/6)	単節L	678-9
122	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外・内・断-にぶい黄橙色 (10YR6/4)	沈線文・単節L	678-1
123	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10YR7/4)	沈線文・単節L	678-2
124	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10YR7/3) 内-灰黄褐色 (10YR5/2)	沈線文・単節L	678-6
125	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢		18	1mm以下の砂粒を微量含む	中	外・内・断-灰黄褐色 (10YR4/2)	沈線内連続刺突文・結節繩文 (単節L)	678-8
126	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-灰黄褐色 (10YR4/2)	沈線文・刺突文	678-3
127	23 PL-21	D14 S24	495	深鉢			2mm以下の砂粒を微量含む	中	外-褐色 (5YR5/1) 内-浅黄橙色 (10YR8/3)	沈線文・刻み目	678-7
128	24 PL-22	D14 R20	748	深鉢			角閃石を微量含む	軟	外-黄橙色 (7.5YR7/8) 内-黒褐色 (2.5Y7/8)	沈線文・単節R	426-1
129	24 PL-22	D14 R20	748	深鉢			4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-浅黄橙色 (10YR8/4) 内-にぶい橙色 (5YR7/4) 断-灰色 (5Y4/1)	外-貝殻条痕	426-2
130	24	D14 Q19	810	深鉢			3mm以下の砂粒を微量含む	中	外・内-浅黄橙色 (10YR8/3)	沈線文	782-1

遺物一覧表

遺物番号	挿図番号 図版番号	地区名	造構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
131	24	D14 Q18	900	深鉢			1mm以下の砂粒を微量含む	中	外・内-黒色 (10Y R2/1)	条線文	762-1
132	24	D14 R21	664	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (2.5Y R6/8) 内-にぶい赤褐色 (5Y R5/3)	単節L	718-1
133	24	D14 Q18	884	深鉢			4mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-褐灰色 (7.5Y R4/1) 内-にぶい赤褐色 (5Y R4/3)	沈線文・単節L	449-4
134	24 PL-22	D14 Q19	809	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内-にぶい黄橙色 (10Y R7/2) 断-灰色 (5Y 5/1)	沈線文・単節L	766-1
135	24	D14 Q19	809	深鉢			1mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-にぶい橙色 (7.5Y R7/3) 内-褐灰色 (7.5Y R4/1) 断-黒褐色 (2.5Y 3/1)	沈線文・単節R	766-3
136	24	D14 Q19	809	深鉢			4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (2.5Y R6/6) 内-橙色 (2.5Y R6/8)	内・外-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ	766-2
137	24	D14 S25	422	深鉢			1mm以下の砂粒を微量含む	中	外-橙色 (5Y R6/6) 内-にぶい黄橙色 (10Y R6/3)	沈線文・結節繩文 (単節R)	701-2
138	24	D14 S25	422	深鉢			1.5mm以下の砂粒を微量含む	中	外-黒褐色 (2.5Y 3/1) 内-橙色 (7.5Y R6/6)	内・外-貝殻条痕	701-1
139	24 PL-24	D14 Q17	919	深鉢			2mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R6/3)	内-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ 外-沈線文・単節R	453-1
140	24 PL-22	D14 Q17	919	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-褐灰色 (10Y R4/1) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	内-ナデ 外-貝殻条痕	453-2
141	24 PL-22	D14 S22	627	深鉢			3mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	沈線内連続刺突文・単節L	838-1
142	24 PL-22	D14 Q18	884	深鉢			2mm以下の砂粒を微量含む	中	外-灰褐褐色 (10Y R5/2) 内-黄灰色 (2.5Y 4/1)	沈線内連続刺突文・単節R	449-2
143	24	D14 Q18	884	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (2.5Y R6/6) 内-橙色 (7.5Y 7/6)	内・外-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ	449-3
144	24	D14 R19	833	浅鉢	口径26.0 残高4.8	8	4mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外-にぶい赤褐色 (5Y R4/3) 内-橙色 (5Y R6/8)	内・外-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ・沈線文	348-1
145	24	D14 Q18	884	深鉢			2mm以下の砂粒を多量に含む	中	外・内・断-にぶい褐色 (7.5Y R5/3)	内・外-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ	449-1
146	24 PL-22	D14 R21	743	深鉢			1.5mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-黒色 (2.5Y 2/1) 内-断-灰褐色 (10Y R6/2)	沈線内連続刺突文・単節R	423-1
147	24 PL-22	D14 S22	615	深鉢			3mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-明赤褐色 (5Y R5/6) 内-橙色 (7.5Y R6/6) 断-灰色 (5Y 4/1)	押し引き沈線文・擬繩文 (二枚貝)	880-1
148	24 PL-22	D14 S22	615	深鉢			5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	簞書き沈線文・貝殻押圧文	880-2
149	25 PL-23	D14 Q18	890	深鉢			1mm以下の砂粒を微量含む	中	外・内・断-黒褐色 (10Y R3/1)	沈線文・刻み目	579-2
150	25 PL-23	D14 Q18	890	深鉢			2mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-灰白色 (2.5Y 8/2) 内-灰色 (5Y 4/1)	沈線文・刺突文・単節R	579-1
151	25 PL-23	D14 Q18	890	浅鉢			4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内-灰褐褐色 (10Y R5/2)	沈線文 内・外-ミガキ	579-3
152	25 PL-23	D14 O16	954	深鉢			1mm以下の砂粒を多量に含む	中	外・内-にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 断-褐灰色 (10Y R4/1)	沈線文・単節R	940-3
153	25	D14 O16	954	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 内-にぶい橙色 (5Y R6/4)	沈線文・単節L	940-2
154	25	D14 O16	954	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰白色 (10Y R8/2) 内-浅黄橙色 (10Y R8/4) 断-黒褐色 (2.5Y 3/1)	内・外-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ	940-1

遺物一覧表

遺物番号	挿図番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
155	25 P L-23	D14 R19	845	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	内・外-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ	657-2
156	25 P L-23	D14 R19	845	浅鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰黄褐色 (10Y R5/2) 内-浅黄橙色 (10Y R8/3)	外-ケズリ 内-ナデ	657-1
157	25	D14 Q18	894	深鉢			4mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・内・断-浅黄橙色 (10Y R8/3)	擬縄文 (卷貝)・一次調整貝殻条痕	817-1
158	25 P L-23	D14 Q18	894	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-黒褐色 (2.5Y3/1)	卷貝回転擬縄文 (ヘナタリ)・沈線文	432-2
159	25	D14 Q18	894	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (5Y R6/6) 内-橙色 (5Y R6/8)	内・外-ナデ	432-1
160	25	D14 Q19	807	深鉢			2mm以下の砂粒を多量に含む	中	外・内-浅黄橙色 (10Y R8/3) 断-灰色 (5Y5/1)	沈線文・単節L	516-1
161	25	D14 Q20	784	深鉢			金雲母を微量含む	中	外-褐色 (7.5Y R4/1) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	沈線文・刻み目	515-1
162	25	D14 Q19	808	深鉢			2mm以下の白色砂粒を多量に含む	中	外・内-にぶい褐色 (7.5Y R5/3) 断-灰色 (5Y4/1)	内-指頭圧痕 外-沈線内連続刺突文	514-1
163	25	D14 R21	745	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-灰黄褐色 (10Y R5/2)	内・外-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ・凹線文	641-1
164	25 P L-23	D14 R21	745				3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内-灰白色 (10Y R8/2) 断-灰色 (5Y5/1)	粘土貼付け卷貝押圧文・凹線文	641-2
165	25 P L-23	D14 Q19	802	浅鉢			2mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/2)	凹線文・卷貝扇状文・卷貝刺突文	640-1
166	25	D14 P17	971	深鉢			4mm以下の石英を少量含む	中	外-褐色 (10Y R5/2) 内-にぶい黄橙色 (10Y R6/3)	凹線文	944-1
167	25	D14 L12	2-89	深鉢			1.5mm以下の砂粒を微量含む	中	外・内-浅黄橙色 (10Y R8/4) 断-黄褐色 (2.5Y6/1)	凹線文・卷貝扇状文	106-1
168	25 P L-23	D14 S21	722	浅鉢			1mm以下の砂粒を微量含む	中	外・内・断-明黄褐色 (10Y R7/6)	沈線文	611-2
169	25	D14 R22	570	深鉢			金雲母・角閃石を微量含む	中	外-橙色 (7.5Y R7/6) 内-浅黄橙色 (10Y R8/4)	楕円形貼付け文	884-1
170	25	D14 Q18	889	深鉢			3mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外-灰黄褐色 (10Y R5/2) 内-褐色 (10Y R4/1)	綱代痕	659-1
171	26 P L-18	D14 R21	702	深鉢	口径24.6 残高15.2		3mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	外-一次調整卷貝条痕 二次調整ナデ	370-1
172	26	D14 R21	702	深鉢			5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-褐色 (7.5Y R4/1) 内-黒褐色 (7.5Y R3/1)	押圧文	370-3
173	26	D14 R21	702	浅鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (5Y R6/6) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/3) 断-黒褐色 (2.5Y3/1)	沈線文	370-2
174	26	D14 S23	552	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内-浅黄橙色 (10Y R8/3) 断-灰色 (5Y4/1)	外-貝殻条痕 (二枚貝)	488-1
175	26	D14 P18	857	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内-浅黄橙色 (10Y R8/4) 断-灰色 (5Y4/1)	内・外-貝殻条痕 (二枚貝)	959-1
176	26	D14 R19	848	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-浅黄橙色 (7.5Y R8/4) 内-浅黄橙色 (10Y R8/3)	外-貝殻条痕 (二枚貝)	460-1
177	26	D14 S23	539	深鉢	口径29.0 残高9.0	9	4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰褐色 (7.5Y R6/2) 内-橙色 (5Y R7/6)	外-貝殻条痕 (二枚貝)	485-2
178	26	D14 R21	719	深鉢	口径30.2 残高8.1	25	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-灰黄褐色 (10Y R5/2)	外-貝殻条痕	483-3
179	31 P L-23	D14 R23	520	深鉢			3.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰黄褐色 (10Y R6/2) 内-黒色 (5Y2/1)	内・外-貝殻条痕	410-1

遺物一覧表

遺物番号	挿図番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
180	31	D14 T24	2-1013	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-浅黄橙色 (7.5Y R8/4) 内-灰白色 (10Y R8/2)	内・外-貝殻条痕	367-1
181	31	D14 R20	755	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (7.5Y R7/6) 内-浅黄橙色 (10Y R8/3) 断-黒色 (N2/1)	内-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ 外-貝殻条痕	601-1
182	31 P L-23	D14 T24	2-1014	深鉢	口径11.9 残高4.4		3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/6) 内-褐灰色 (10Y R4/1)	内・外-ナデ	82-1
183	31	D14 S23	538	深鉢			2.5mm以下の砂粒を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 内-黒褐色 (2.5Y3/1)	沈線文・ミガキ	783-2
184	31	D14 R19	842	深鉢			6mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内-橙色 (5Y R6/6)	外-貝殻条痕	428-1
185	31	D14 R20	755	深鉢			2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい赤褐色 (5Y R4/3) 内-にぶい黄橙色 (10Y R6/4) 断-黒色 (7.5Y R2/1)	外-貝殻条痕	601-2
186	31	D14 T23	2-1016	深鉢			2mm以下の砂粒を微量含む	中	外-橙色 (7.5Y R6/6) 内-にぶい黄橙色 (7.5Y R7/4)	外-貝殻条痕	426-1
187	31	D14 T24	2-1013	鉢	口径12.2 残高6.2	10	2mm以下の砂粒を多量に含む	中	外・内-にぶい黄橙色 (10Y R6/4) 断-褐灰色 (10Y R5/1)	内・外-ナデ	367-2
188	31 P L-23	D14 Q19	814	深鉢	口径28.0 残高11.6	8	2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R6/4) 内-黒褐色 (2.5Y3/1)	内・外-ナデ	504-2
189	26	D14 S21	714	深鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (2.5Y R6/8) 内-浅黄橙色 (7.5Y R8/6)	内・外-貝殻条痕	883-1
190	26	D14 P17	924	浅鉢			2.5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-浅黄橙色 (10Y R8/4) 内-黒褐色 (10Y R3/1)	外-貝殻条痕	613-1
191	26 P L-23	D14 T23	2-1016	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-オーリーブ黒色 (5Y3/1) 内-黒色 (5Y2/1)	内-一次調整貝殻条痕 二次調整ナデ 外-貝殻条痕 口唇部刻み目・押圧文	427-2
192	26 P L-23	D14 T23	2-1016	注口土器			1.5mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外-にぶい赤褐色 (5Y R5/4) 内-黒褐色 (2.5Y3/1)	ミガキ・羊齒状文	427-1
193	26 P L-23	D14 S25	1013	浅鉢	口径44.0 残高4.2	8	1.5mmの砂粒を微量含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R6/4)	内-ナデ 外-ミガキ	800-1
194	26 P L-23	D14 T22	2-1051	深鉢			2mm以下の砂粒を微量含む	中	外・内-にぶい橙色 (7.5Y R7/4) 断-褐灰色 (10Y R4/1)	口唇部刻み目 貼付け突帶	424-1
195	26 P L-23	D16 V19	167	深鉢			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-灰黄褐色 (10Y R6/2) 内-黒褐色 (2.5Y3/1)	貼付け突帶・刻み目	321-1
196	26 P L-23	D16 U16	274	深鉢			4.5mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・内・断-にぶい橙色 (7.5Y R6/4)	貼付け突帶・刻み目	196-1
209	32	D17 R21	2-551	壺	口径23.4 残高2.1	16	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-橙色 (7.5Y R7/6)	円形刺突文	31-1
210	32 P L-27	D17 S20	2-551	壺			7mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外-橙色 (7.5Y R7/6) 内-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)	多条沈線文・山形文	40-1
211	32	D17 S20	2-551	壺			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-橙色 (5Y R6/6)	多条沈線文	41-1
212	32 P L-27	D14 R21	2-551	壺			9mm以下の結晶片岩とクサリ縫を多量に含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	横書き直線文	22-1
213	32 P L-27	D17 R20	2-551	壺			6mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-橙色 (5Y R6/6)	横書き直線文	26-2
214	32	D17 S20	2-551	壺			5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	多条沈線文	32-2
215	32	D17 R20	2-551	壺	口径19.6 残高5.5	17	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断-にぶい橙色 (7.5Y R6/4)	内・外-ナデ	26-1

遺物一覧表

遺物番号	捕囲番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
216	32	D17 S20	2-551	甕	残高2.4 底径5.0		2mm以下の結晶片岩を少量含む	軟	外・内・断・浅黄橙色(7.5Y R8/4)	不明	32-1
217	32 PL-27	D17 S20	2-551	甕			5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・黄灰色(2.5Y 4/1) 内・にぶい黄橙色(10Y R7/4)	貼付け突帯・刻み目・ハケメ	42-2
218	32 PL-27	D17 S20	2-551	甕			4mm以下の結晶片岩を多量に含む	軟	外・内・断・橙色(7.5Y R6/6)	貼付け突帯・刻み目	41-2
219	32 PL-27	D17 T02	61	壺	口径19.0 残高13.7	33	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断・灰白色(2.5Y 8/2)	凹線文・櫛書き波状文	21-1
220	32 PL-28	D17 U02	61	高杯	残高17.0	80	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断・橙色(5Y R7/6)	不明	109-1
221	32 PL-27	D17 U03	61	鉢	口径29.5 残高11.0	17	4mm以下の結晶片岩を多量に含む	軟	外・橙色(5Y R7/6) 内・断・橙色(7.5Y R7/6)	外・平行タタキメ・ナデ	133-1
222	32	D17 U02	61	壺			5mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外・にぶい黄橙色(10Y R7/4) 内・断・褐灰色(10Y R4/1)		118-1
223	32 PL-27	D17 T02	61	紡錘車			3mm以下の結晶片岩を多量に含む	軟	外・橙色(2.5Y R6/6) 内・黒褐色(10Y R3/1)		22-1
224	32 PL-27	D16 T21	149 炉跡	壺	口径16.8 残高7.3	17	3mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外・内・橙色(5Y R6/6) 断・褐灰色(10Y R4/1)	口縁部刻み目・櫛書き直線文	268-1
225	35 PL-287	D17 S13・14	2-648	壺	口径16.5 器高28.4	25	4mm以下の結晶片岩を微量含む	中	外・橙色(5Y R7/6) 内・褐灰色(10Y R5/1)	凹線文・櫛書き波状文・櫛書き直線文 口縁内面に波状文の痕跡	10-1
226	35 PL-28	D17 S13・14	2-648	壺	口径13.0 器高29.0	33	6mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断・浅黄橙色(10Y R8/4)		9-1
227	35	D16 T25	89	甕	口径16.0 残高3.0	8	2mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・灰黄褐色(10Y R4/2) 内・灰黄褐色(10Y R6/3)	外・ケズリ	296-4
228	35	D16 T25	89	甕	口径14.0 残高6.0	11	3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断・にぶい黄橙色(10Y R7/3)	外・ケズリ	296-3
229	35 PL-28	D17 T25	89	ミニチュア 甕	口径5.0 器高7.8	100	結晶片岩を微量含む	中	外・内・断・浅黄橙色(10Y R8/4)	ナデ・黒斑	711-1
230	35	D16 T25	89	壺	残高3.1		5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・にぶい黄橙色(10Y R7/3) 内・浅黄橙色(10Y R8/4)	ナデ	296-2
231	35 PL-28	D16 T25	89	高杯	残高9.3	80	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・内・断・浅黄橙色(10Y R8/4)	不明	298-1
232	32	D17 U01	87	壺	残高3.0 座径10.0	33	2mm以下の結晶片岩を多量に含む	軟	外・橙色(2.5Y R7/6) 内・褐灰色(10Y R4/1)	ナデ	102-1
234	32	D17 U01	87	甕	残高4.6		5mm以下の結晶片岩を多量に含む	軟	外・淡赤橙色(2.5Y R7/4) 内・断・にぶい黄橙色(10Y R7/3)	不明	102-2
235	35 PL-29	D16 T25	97	壺	口径23.0 残高17.2	40	3mm以下の結晶片岩・クサリ縁を多量に含む	中	外・内・にぶい黄橙色(10Y R7/3) 断・灰色(5Y 4/1)	沈線文・波状文・貼付け突帯文 口縁部に紐通し穴	709-1
236	35	D16 V03	389	壺	残高34.4		4mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・灰黄褐色(10Y R5/2) 内・にぶい黄橙色(10Y R7/3) 断・灰色(2.5Y 5/1)	櫛書き直線文・ヘラミガキ	316-1
246	36 PL-26	D16 T21	149 炉跡	鋳型中子	径5.0～ 6.8 残長6.0	25		硬	外・内・褐灰色(10Y R4/1) 断・橙色(2.5Y R6/8)		270-1
248	39	D16 U23	118	壺	口径13.3 残高6.3	25	3mm以下の結晶片岩を多量に含む	中	外・にぶい黄橙色(10Y R6/4) 内・にぶい黄橙色(10Y R7/4)	ナデ	176-1
249	39	D14 Q20	782	黒色土器A類 椀	口径16.0 器高6.7	13	4mm以下の結晶片岩を微量・クサリ縁を多量に含む	中	外・浅黄橙色(10Y R8/4)	多段ヨコナデ	501-1
250	44	D17 T11	2-640	小皿	口径9.0 器高1.3	25	クサリ縁を少量含む	中	外・内・断・黄橙色(7.5Y R7/8)	底部不調整	381-1

遺物一覧表

遺物番号	種別番号 図版番号	地区名	造構名 層位	器種	法量 cm	遺存率 %	胎土の特徴	焼成	色調	技法の特徴	登録番号
251	44	D17 T11	2-640	土釜	口径33.6 器高25.2	41	5mm以下の結晶片岩を多量に含む	硬	外・内・断-橙色 (5Y R7/6)	体部内・外-一次調整ハケメ 二次調整ナデ	381-2
252	44	D17 S08-T08	2-522	小皿	口径7.4 器高1.4	8	クサリ縞を微量含む	中	外・内・断-浅黄橙色 (7.5Y R8/6)	底部不調整	76-1
253	39	D17 S08	2-502	小皿	口径11.2 器高6.0	25	クサリ縞を多量に含む	硬	外・内・断-浅黄橙色 (7.5Y R8/4)	底部不調整	70-1
254	39	D17 S08	2-501	土鐘	長さ6.2 直径1.5	100	砂粒を微量含む	中	外・内・断-にぶい黄橙色 (10Y R7/3)		3-1
255	39	D16 V02	378	小皿	口径7.8 器高1.1	15	1.5mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外・内・断-橙色 (5Y R7/6)	底部不調整	310-3
256	39	D16 U03	378	小皿	口径11.1 残高1.9	15	3.5mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外・内・断-にぶい橙色 (5Y R6/4)	底部不調整	211-1
257	39 PL-29	D16 U02	378	土釜	口径24.8 残高2.8	4	1mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外・内-橙色 (7.5Y R6/6) 断-黄灰色 (2.5Y4/1)		289-1
258	39 PL-29	D16 U03	378	土釜	口径26.5 残高2.3	16	1.5mm以下の白色砂粒を微量含む	中	外・内-にぶい黄橙色 (10Y R7/4)	外-一次調整ハケメ 二次調整ヨコナデ	211-2
259	39	D16 V02	378	鋳型の内型 支持具			1.5mm以下の白色砂粒を微量含む	硬	外-橙色 (5Y R7/6) 内-赤褐色 (10Y R5/4) 断-灰色 (5Y5/1)		310-1
260	39 PL-29	D16 V02	378	鋳型の内型 支持具			8mm以下の縞を少量含む	硬	外-橙色 (5Y R7/8) 内-断-灰色 (5Y6/1)		310-2
1001	PL-14	D14 U24	暗褐色土	深鉢			1mm以下の砂粒を微量含む	中	外-褐灰色 (10Y R4/1) 内-灰黄褐色 (10Y R6/2)		20-2
1002	PL-23	D14 P19	802	浅鉢			1mm大の砂粒を多量に含む	中	外-にぶい黄橙色 (10Y R7/4) 内-灰白色 (10Y R8/2)	凹線文	640-2
1003	PL-29	D17 R20	2-552	壺			1mm大の白色砂粒を多量に含む	中	外-橙色 (7.5Y R7/6) 内-灰黄色 (2.5Y R6/2)	籠書き多条直線文	27-1
1004	PL-29	D16 V02	378	瀬戸天目 茶碗				中	釉-黒色 (5Y2/1) 断-灰白色 (5Y7/1)	施釉	309-1
1005	PL-29	D16 U03	378	瀬戸灰釉 盤				中	釉-オリーブ灰色 (10Y6/2) 露胎-にぶい黄橙色 (10Y R7/3) 断-灰黄色 (2.5Y7/2)	施釉	211-3
1006	PL-29	D16 V02	378	備前 播鉢			1~4mmの砂粒を多量に含む	中	外・内-暗灰黄色 (2.5Y5/2) 断-橙色 (5Y R6/6)	播目4本/cm	309-2
1007	PL-29	D16 V03	378	鋳型			石粒を多量に含む		外-にぶい橙色 (7.5Y6/2) 内-灰黄色 (2.5Y6/2)	鉄付着	315-2
1008	PL-29	D16 V03	378	鋳型					外・内・断-橙色 (7.5Y R6/6)		314-1
1009	PL-29	D16 V03	378	鋳型					外-橙色 (7.5Y R7/6) 内-断-黄灰色 (2.5Y5/1)		315-1

石器一覽表

遺物番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器種	法 量				備 考	
				器長cm	器幅cm	器厚cm	重量g		
43	8 PL-15	D14T23	暗褐色土	石鏸	3.00	2.65	0.69	0.73	登録No.17-1
44	8 PL-15	D14O15	3c	石鏸	2.28	1.74	0.34	0.66	登録No.943-1
45	36 PL-24	D16T25	2-89	石鏸	1.85	1.78	0.35	0.86	登録No.298-2
46	8 PL-15	D14R22	3b	石鏸	3.39	2.35	0.95	5.39	登録No.377-1
47	8 PL-15	D14T24	暗褐色土	石鏸	2.45	1.55	0.45	1.23	登録No.19-1
48	8 PL-15	D14R19	3c	石鏸	2.68	1.27	0.38	1.04	登録No.394-2
49	8 PL-15	D16U23	118	石鏸	5.00	1.55	0.55	3.18	登録No.715-1
50	8 PL-15	D14M10	2-01	石鏸	3.80	1.22	0.73	2.99	登録No.6-1
51	8 PL-15	D14O14	2-02	石鏸	2.41	1.06	0.52	1.38	登録No.174-1
52	8 PL-15	D16T23	117	石鏸	2.40	1.53	0.45	1.37	登録No.253-1
53	8 PL-15	D14O17	3b	石鏸	2.52	1.74	0.30	1.36	登録No.756-1
54	8 PL-15	D14R20	3b	石劍 (局部磨製)	2.55	2.25	0.65	6.05	登録No.356-1
55	8 PL-16	D14T24	3b	削器	6.60	7.10	1.20	39.74	登録No.971-1
56	8 PL-16	D14S21	3c	削器	7.05	3.24	0.98	25.91	登録No.390-1
57	8 PL-16	D14S21	3c	削器	6.10	3.55	1.00	24.36	登録No.390-2
58	8 PL-16	D14S22	3c	削器	6.05	3.45	1.35	28.44	登録No.986-1
59	8 PL-16	D14S21	3b	石斧	4.15	4.25	1.95	45.43	登録No.998-1
60	8 PL-16	D14M13	黒褐色土	石核	4.90	3.40	2.60	57.98	登録No.297-1
61	8	D14R18	3c	叩石	7.70	8.10	3.50	345.00	登録No.346-1
62	8 PL-16	D14Q19	3b	石錘	5.45	4.50	1.50	49.95	登録No.519-1
197	27 PL-24	D14R25	1013	石鏸	1.80	1.93	0.31	0.58	登録No.850-1
198	27 PL-24	D14R21	713	石鏸	2.56	1.97	0.29	1.05	登録No.719-1

石 器 一 覧 表

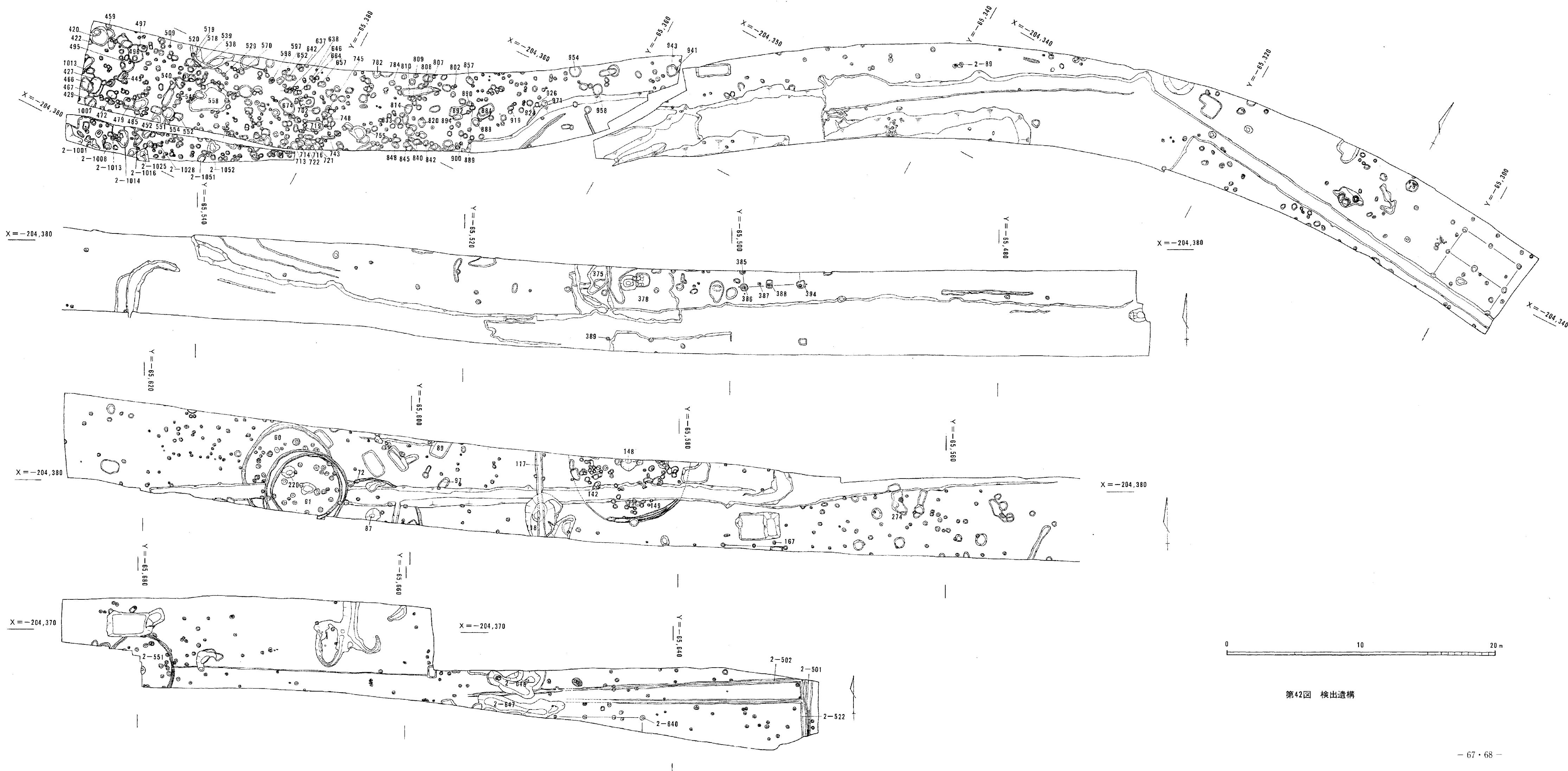
遺物番号	挿図番号 図版番号	地区名	遺構名 層位	器 種	法 量				備 考
					器長cm	器幅cm	器厚cm	重量g	
199	27 P L-24	D14O17	926	未製品 石鎌	2.35	1.90	0.40	2.13	登録No.937-1
200	27 P L-24	D14R21	674	未製品 石鎌	1.80	1.55	0.25	0.84	登録No.374-1
201	27 P L-24	D14S25	429	石錐	2.95	2.05	0.55	2.59	登録No.528-4
202	27 P L-24	D14S25	429	石匙	2.79	5.03	0.54	5.28	登録No.672-1
203	27 P L-25	D14R21	667	石核	6.70	4.80	2.50	56.66	登録No.919-1
204	27 P L-25	D14R24	509	石核	4.55	4.40	2.35	57.98	登録No.692-1
205	27 P L-25	D14Q19	814	石斧	22.30	12.40	2.40	1010.00	登録No.504-1
206	27 巻頭	D14R23	519	叩石	11.00	9.80	4.40	775.00	赤色顔料付着
207	27 P L-26	D14R21	646	叩石	15.10	6.60	4.20	685.00	登録No.438-1
208	27 P L-26	D14S21	714	匁玉	3.30	2.10	0.55	2.32	登録No.392-1
237	36 P L-24	D17T03	61	石鎌	2.20	1.40	0.40	1.00	登録No.57-1
238	36 P L-24	D17T03	61	石鎌	3.65	1.60	0.35	2.55	登録No.121-1
239	36 P L-24	D17T03	61	石鎌	2.70	1.15	0.45	1.45	登録No.57-2
240	36 P L-24	D17T03	61	石錐	4.35	1.55	0.75	4.82	登録No.57-3
241	36 P L-26	D17T03	61	石包丁	8.30	5.80	0.50	32.40	登録No.713-1
242	36 P L-30	D17T03	60	石皿	30.80	29.30	4.85		登録No.710-1
243	36 P L-24	D16U21	149	石鎌	3.70	1.25	0.75	3.23	登録No.714-1
244	36 P L-24	D16U21	149	石錐	3.60	2.25	0.30	3.44	登録No.153-1
245	36 P L-26	D16T21	149	砥石	5.00	6.35	2.20	98.40	登録No.152-1
247	36 P L-26	D16U22	142	石斧	11.00	5.20	1.30	145.00	登録No.712-1
261	27 P L-24	D14S23	558	楔状石器	4.80	2.55	1.80	24.33	登録No.526-15
262	27 P L-30	D14T23	452	石皿	22.00	22.70	12.50		登録No.1011-1

石 鏃 計 測 表

形 式	(登録番号) 遺物番号	出土地区	遺構名	層 位	器長cm	器幅cm	器厚cm	重量 g	備 考
平基	(394-2) 48	D14Q19		3c	2.68	1.27	0.38	1.04	A
"	(428)	D14T23	2-1025		2.73	1.30	0.41	1.18	A
"	(435)	D14U24	2-1001		1.93	1.27	0.24	0.47	A
"	(356)	D14Q20		3b	2.15	1.28	0.40	0.94	B
"	(23)	D17S14	2-648	暗褐色土	1.97	1.81	0.32	0.89	A
"	(297)	D14M13		黒褐色土	1.64	1.31	0.37	0.65	A
"	(612)	D14Q21	642		2.95	1.73	0.52	2.24	B
"	(962)	D14S24		3b	1.75	1.52	0.45	1.13	A
"	(967)	D14S24		3b	1.76	1.63	0.40	1.00	A
"	(995)	D14R24		3b	1.72	1.41	0.28	0.56	A
"	(122)	D14O13	2-02		2.75	1.71	0.58	2.77	B
"	(281)	D14J04		黒褐色土	2.03	1.91	0.57	1.98	B
"	(380)	D14Q22		3b	2.10	1.70	0.53	1.37	B
"	(756-1) 53	D14N17		3b	2.52	1.74	0.30	1.36	B
"	(998)	D14R21		3b	2.59	2.51	0.85	1.66	B
"	(1006)	D14O18		3b	3.10	2.14	0.63	3.85	B
"	(377-1) 46	D14Q22		3b	3.39	2.35	0.95	5.39	B
"	(1003)	D14O17		3b	2.09	1.05	0.30	0.63	B
"	(525)	D14P18		3b	2.46	1.49	0.33	0.99	B
"	(19-1) 47	D14T24		暗褐色土	2.45	1.55	0.45	1.23	A
"	(52)	D17S10	2-502		2.43	1.08	0.48	0.99	A
凸基	(83)	D14T22	2-1052		3.21	1.81	0.64	3.39	B
"	(121-1) 238	D17T03	61		3.65	1.60	0.35	2.55	B
"	(57-2) 239	D17T03	61		2.70	1.15	0.45	1.45	A
"	(714-1) 243	D16U21	149		3.70	1.25	0.75	3.23	A
"	(715-1) 49	D16U23	118		5.00	1.55	0.55	3.18	B
"	(6-1) 50	D14M10	2-01		3.80	1.22	0.73	2.99	B
"	(174-1) 51	D14O14	2-02		2.41	1.06	0.52	1.38	B
"	(253-1) 52	D16T23	117		2.40	1.53	0.45	1.37	A
	(937-1) 199	D14O17	926		2.35	1.90	0.40	2.13	(未製品)
	(374-1) 200	D14Q21	674		1.80	1.55	0.25	0.84	(未製品)

石 鏃 計 測 表

形 式	(登録番号) 遺物番号	出 土 地 区	遺 構 名	層 位	器 長 cm	器 幅 cm	器 厚 cm	重 量 g	備 考
凹基	(614)	D14M15	941		1.54	1.46	0.31	0.51	A
"	(850-1) 197	D14R25	1013		1.80	1.93	0.31	0.58	A
"	(985)	D14R23		3c	1.68	1.72	0.28	0.44	A
"	(961)	D14N16		3c	1.62	1.76	0.35	0.72	B
"	(719-1) 198	D14R21	713		2.56	1.97	0.29	1.05	A
"	(943-1) 44	D14N15		3c	2.28	1.74	0.34	0.66	A
"	(435)	D14U24	2-1001		2.00	1.60	0.47	1.08	A
"	(435)	D14U24	2-1001		2.39	1.76	0.55	0.60	A
"	(435)	D14U24	2-1001		1.45	1.25	0.33	1.39	B
"	(298-2) 45	D16T25	2-89		1.85	1.78	0.35	0.86	B
"	(57-1) 237	D17T03	61		2.20	1.40	0.40	1.00	B
"	(680)	D14S23	554		2.09	1.99	0.30	0.85	A
"	(382)	D14Q23		3b	1.86	1.55	0.38	0.72	A
"	(297)	D14M13		黑褐色土	1.90	1.89	0.39	1.01	B
"	(33)	D17T02	72		1.54	1.43	0.26	0.39	B
"	(320)	D14L12		暗褐色土	1.91	1.47	0.24	0.44	A
"	(672)	D14S25	429		2.47	1.64	0.34	1.01	A
"	(979)	D14R23		3b	1.58	1.21	0.34	0.50	A
"	(159)	D14M10	2-01		1.82	1.39	0.29	0.54	A
"	(17-1) 43	D14T23		暗褐色土	3.00	2.65	0.69	0.73	B
"	(390)	D14R21		3c	1.78	1.35	0.30	0.67	B
"	(314)	D14K09		黑褐色土	1.72	1.32	0.34	0.57	B
平基	(356)	D14Q20		3b	2.57	1.75	0.45	1.26	A
"	(881)	D14Q23	529		1.85	1.63	0.28	0.61	A
"	(83)	D14T22	2-1052		2.28	2.71	0.86	4.72	A
"	(83)	D14T22	2-1052		2.48	1.54	0.41	1.52	B
"	(409)	D14R23	558		2.18	1.87	0.30	1.33	B
"	(428)	D14T23	2-1025		2.44	1.92	0.28	0.88	B
"	(434)	D14U24·T24	2-1008		3.06	2.09	0.58	2.97	B
"	(434)	D14U24·T24	2-1008		2.31	1.72	0.62	1.54	B
"	(435)	D14U24	2-1001		1.99	1.33	0.31	1.64	B
"	(459)	D14Q20		3c	1.74	1.50	0.32	0.77	B
"	(612)	D14Q21	642		2.95	1.73	0.52	2.24	B
"	(981)	D14R21		3c	2.05	1.72	0.32	1.10	B



第42図 検出遺構

図 版



遺跡遠景（西から）



D14・15区付近遠景（北から）



左上 D14区全景（西から）

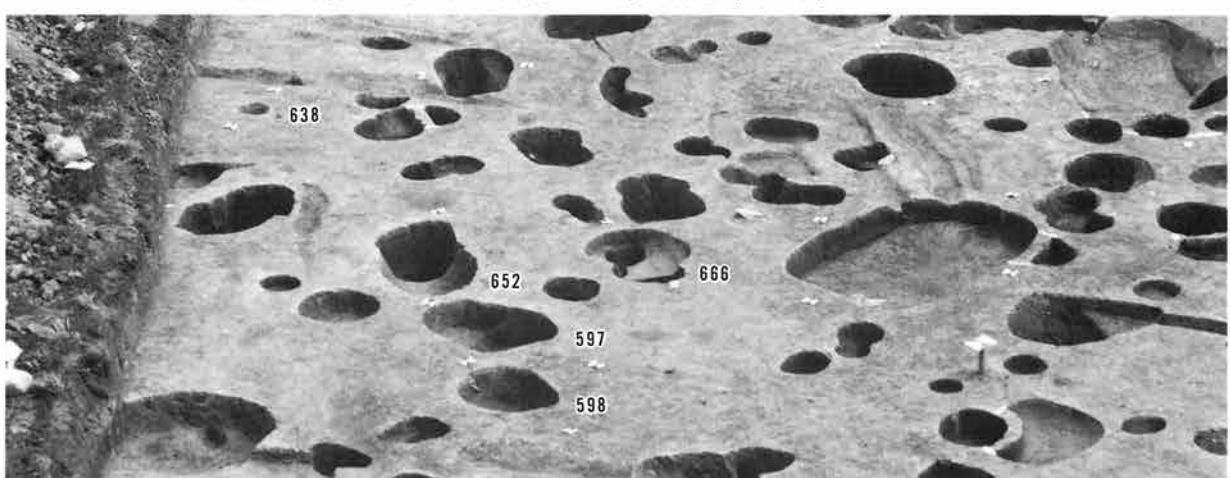
右上 二次D14区

下 二次D13・14区全景（西から）

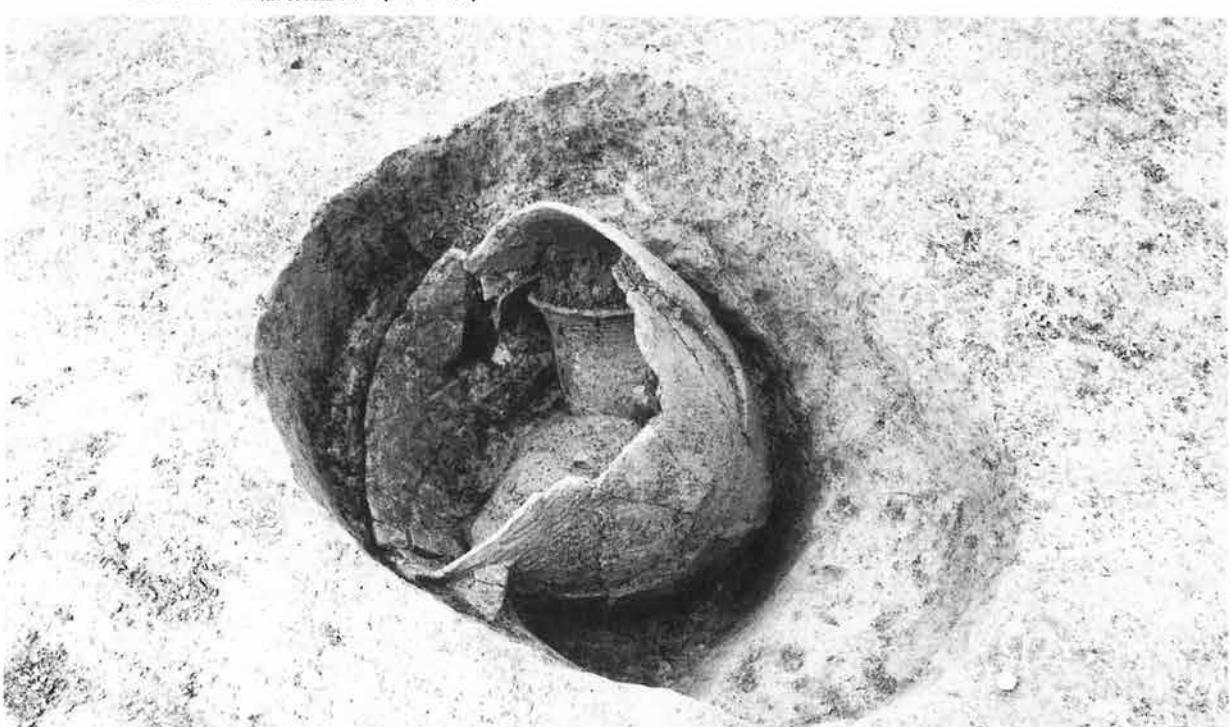




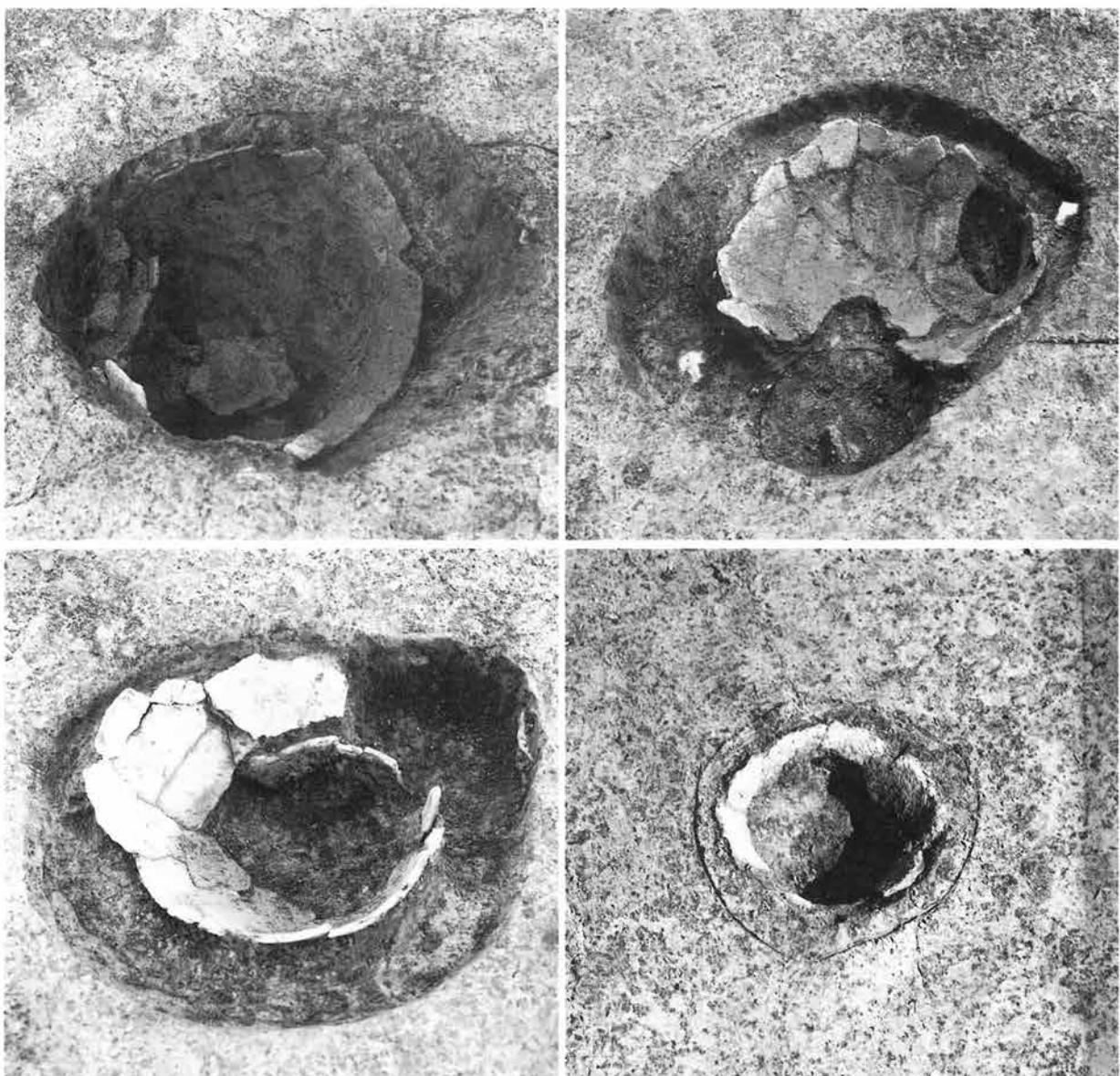
D14区 遺物包含層と遺構の検出状況 R19東・南壁（西から）



D14区 土器棺墓群（西から）

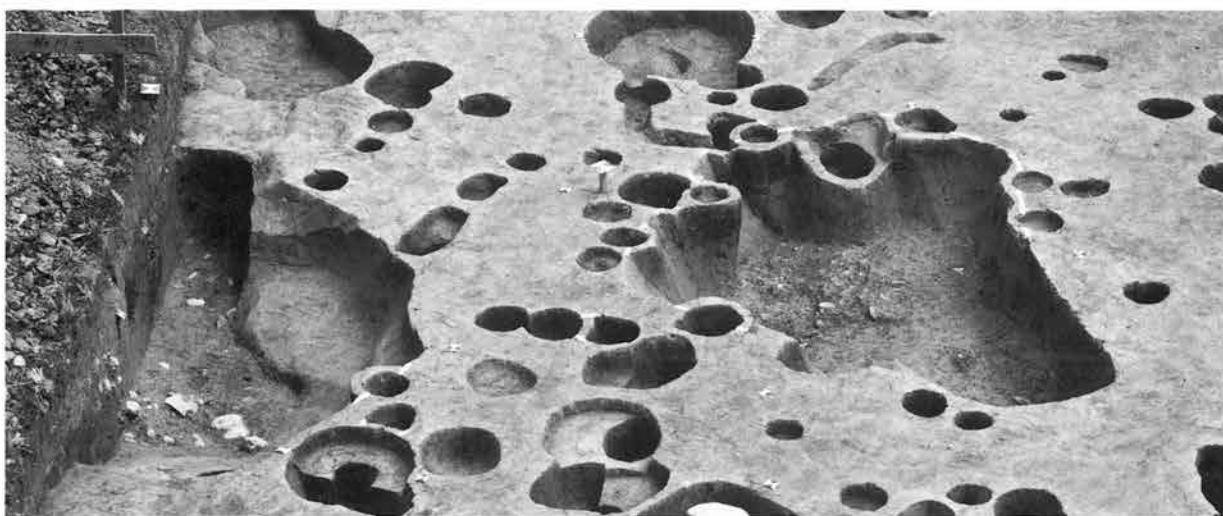


土器棺 597（東から）



上左 土器棺652(南から)
上右 土器棺666(東から)
中左 土器棺598(西から)
中右 土器棺638(南から)
下 土器棺2-1008(南から)





土壤 520・558 (西から)



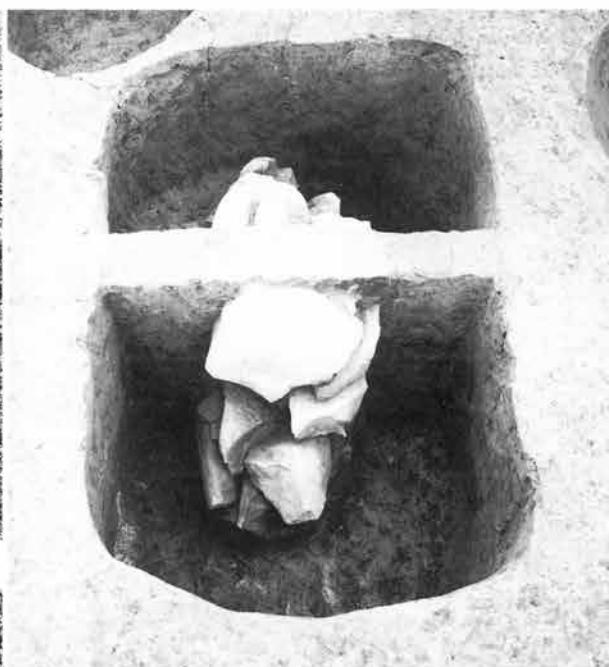
土壤 520 (南から)



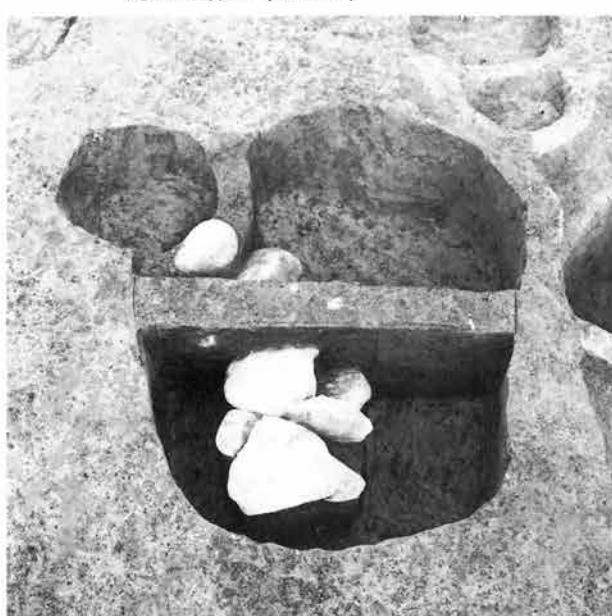
土壤 558 (西から)



配石土壙群（西から）



配石土壙 452（西から）



配石土壙472（西から）



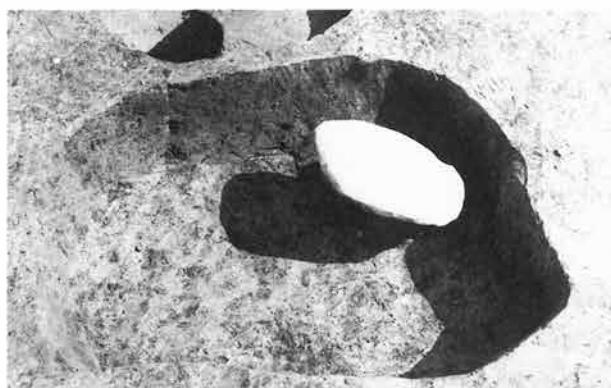
配石土壙 479（南から）



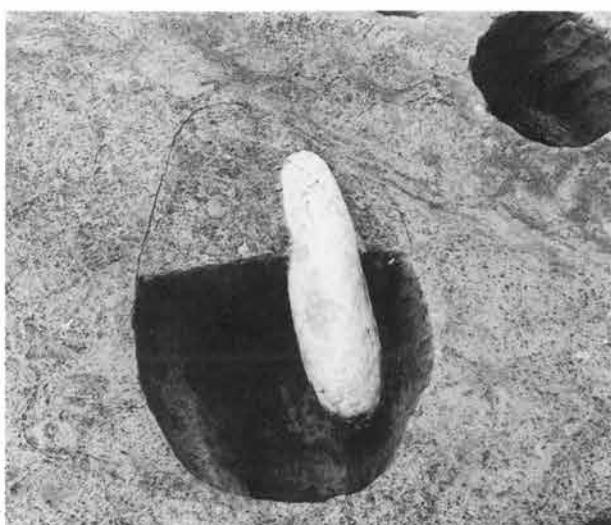
472 骨片出土状況（東南から）



452 骨片出土状況（西から）



配石土壙 540 (南から)



配石土壙 657 (東から)



土壙 518 (南から)



土壙 445 (南から)



土壙 551 (東から)



土壙 420 (西から)



土壙 958 (西から)



D17区全景（西から）



D17区全景（東から）



豎穴住居跡2-551（東から）



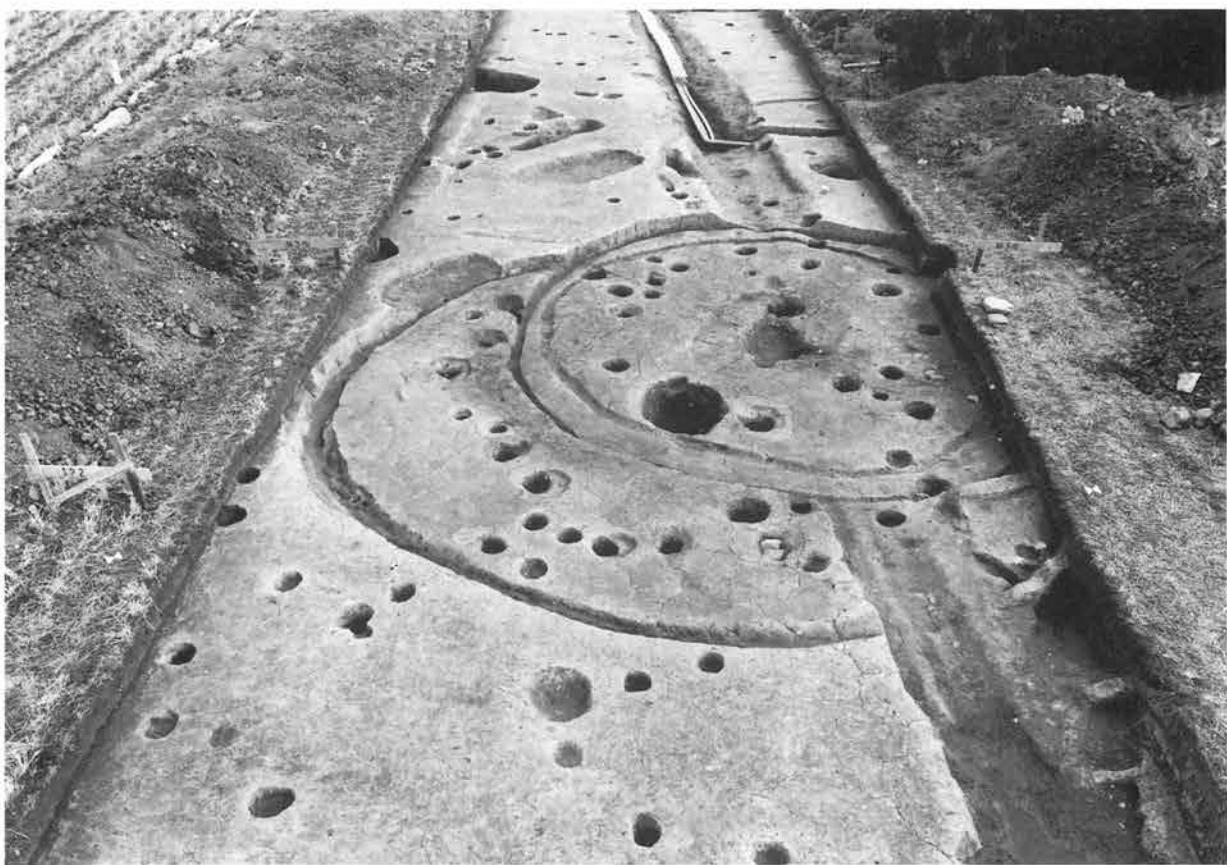
溝状遺構2-647・土壙2-648（東から）



2-648 遺物出土状況
(西から)



D16区全景（西から）



豊穴住居跡 60・61・87（西から）



豊穴住居跡 87 (北から)



豊穴住居跡 149 (西から)



豊穴住居跡 149炉跡 (南から)



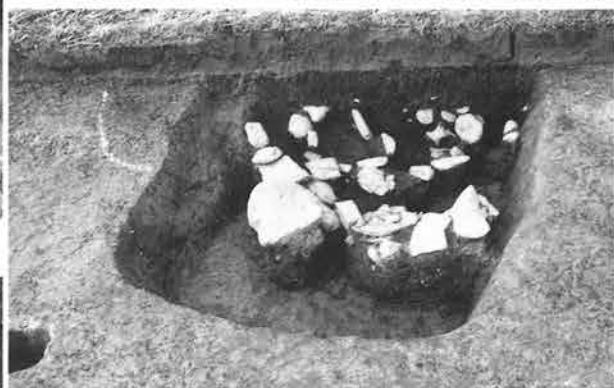
縦穴住居 61 石皿出土状況（南から）



縦穴住居 149 石斧(247) 出土状況（南から）



土壙 97 (西から)



土壙 89 遺物出土状況（南から）



ピット状遺構389 遺物出土状況（北から）



土壙 118 (北から)



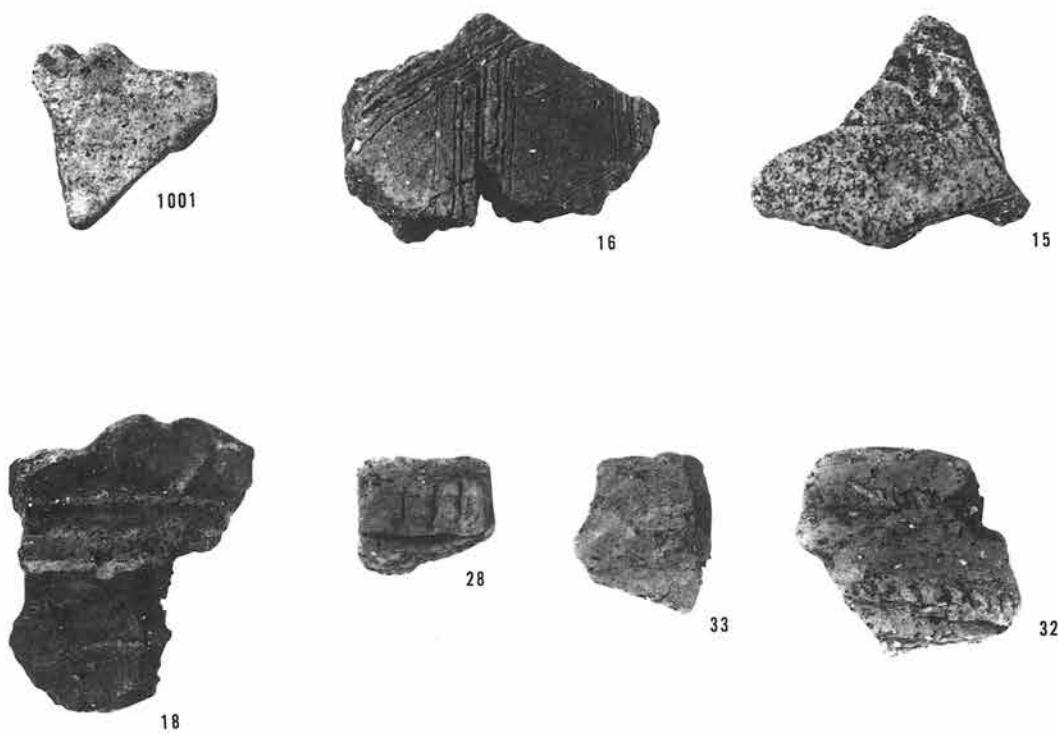
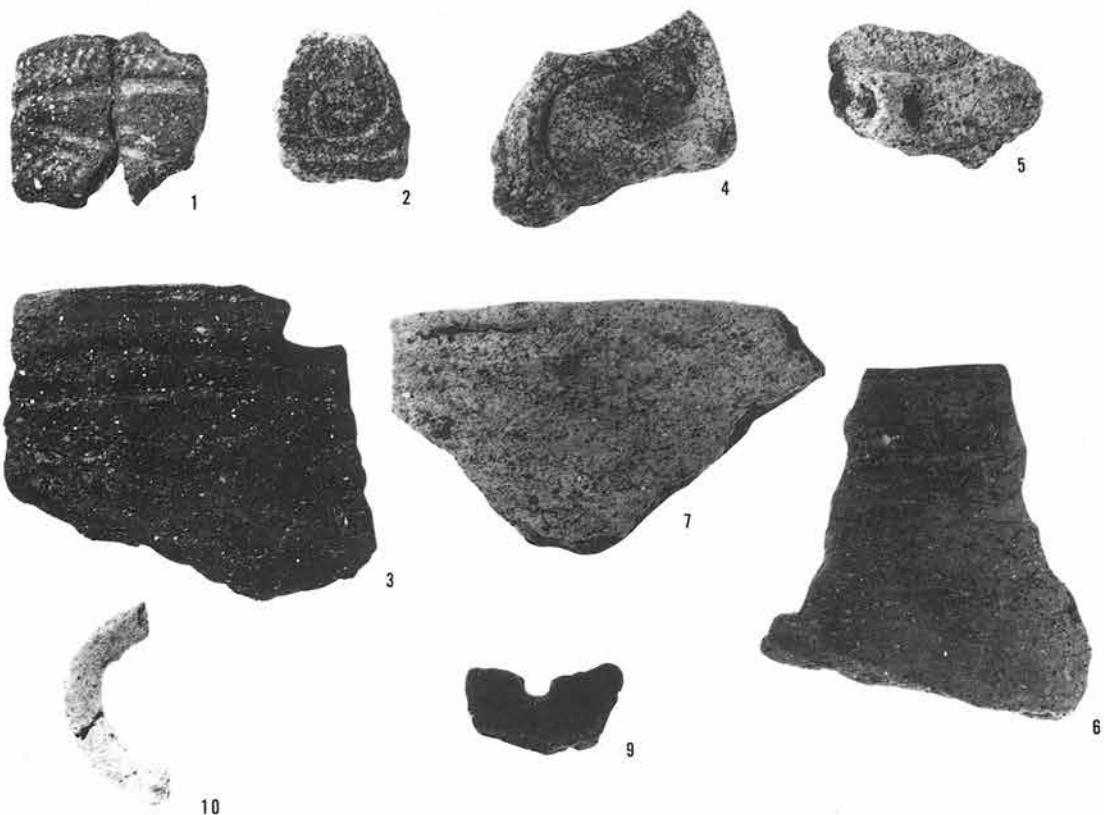
鋳造遺構 378 (東から)

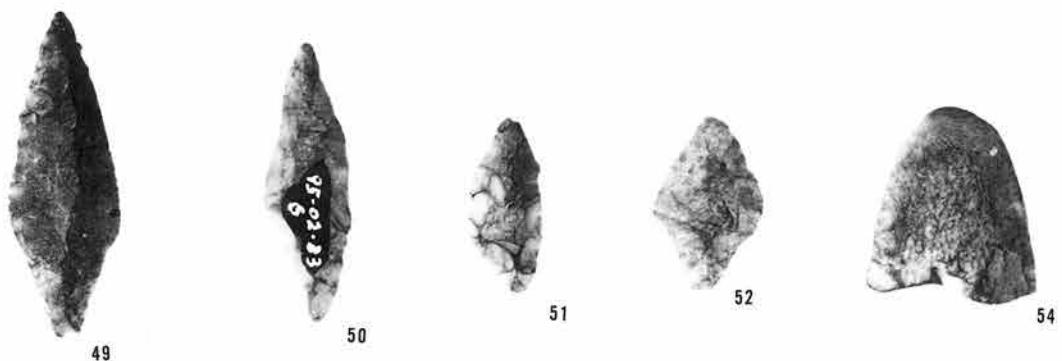
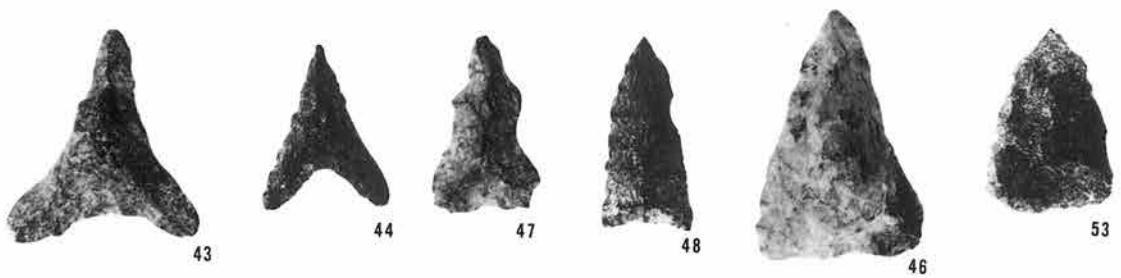


鋳造遺構 378 粘土貯蔵穴 (西から)



掘立柱建物跡 385 (南から)









8



66



63



71



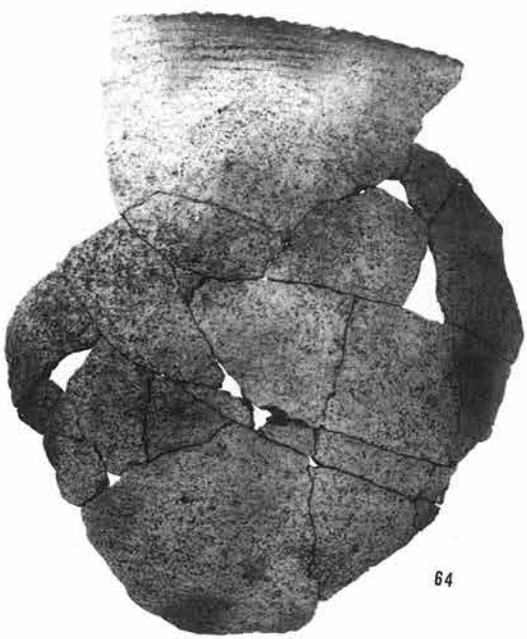
65



107



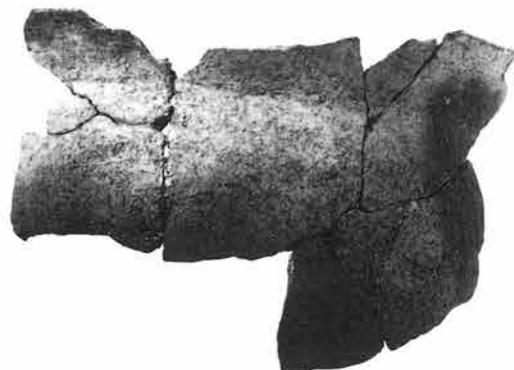
67



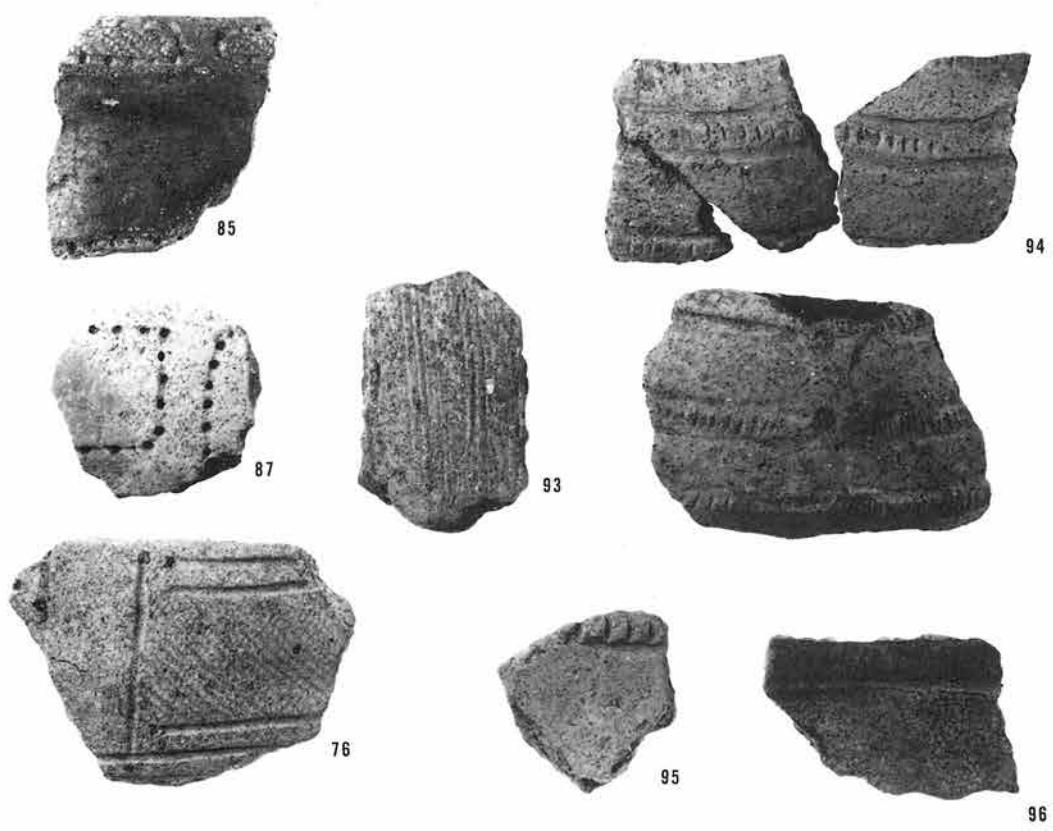
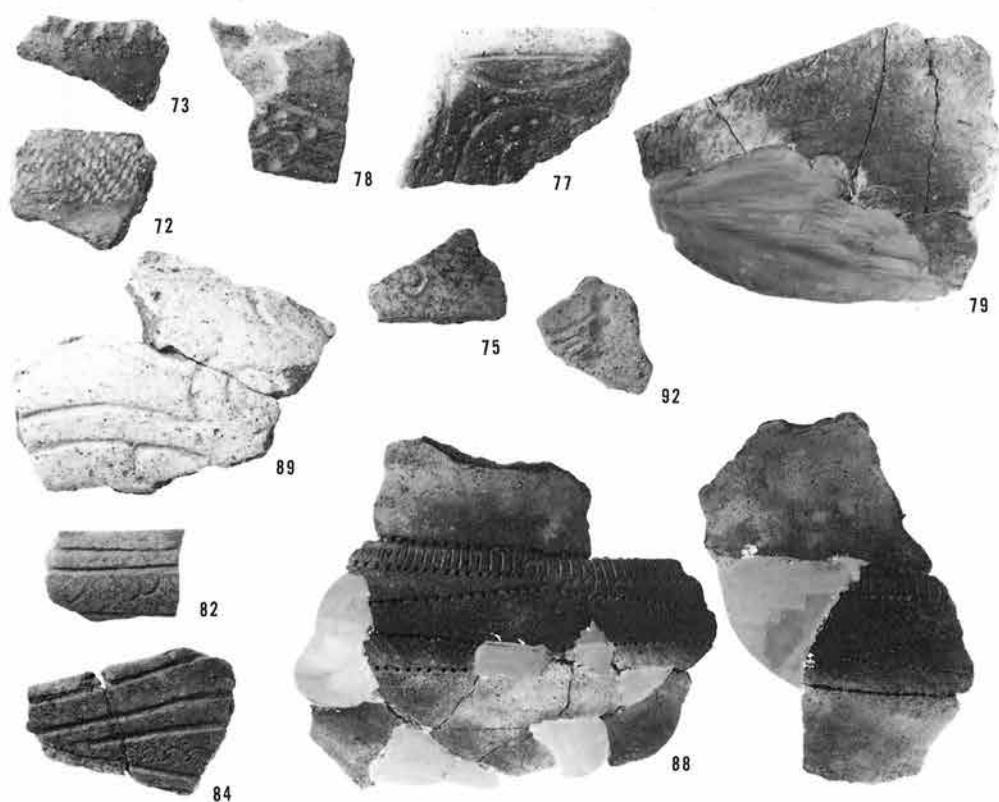
64



70



71





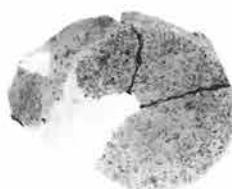
100



99



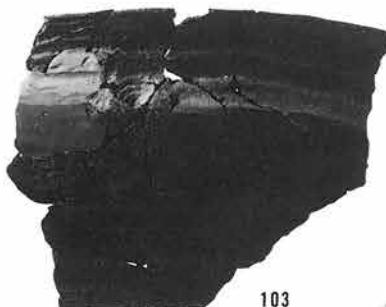
101



102



104



103



118



117



106



119



111



113



110



120



122



123



127



126



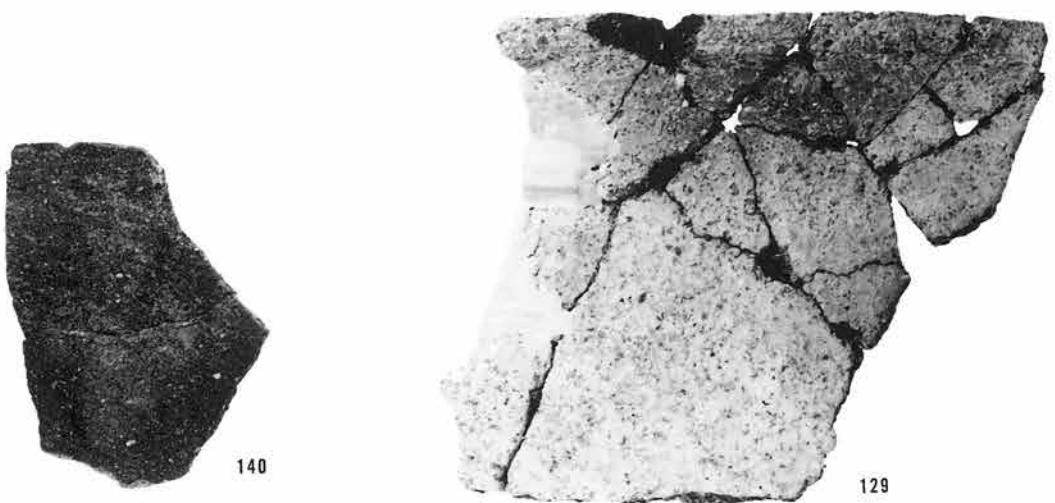
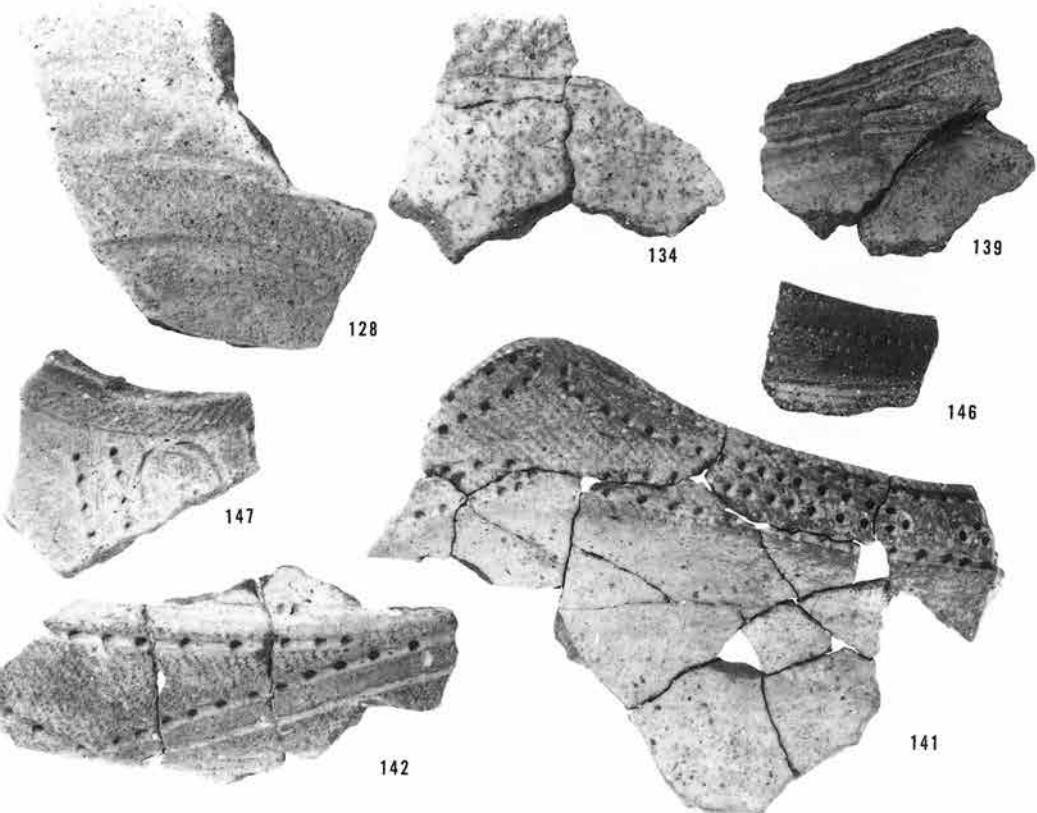
124

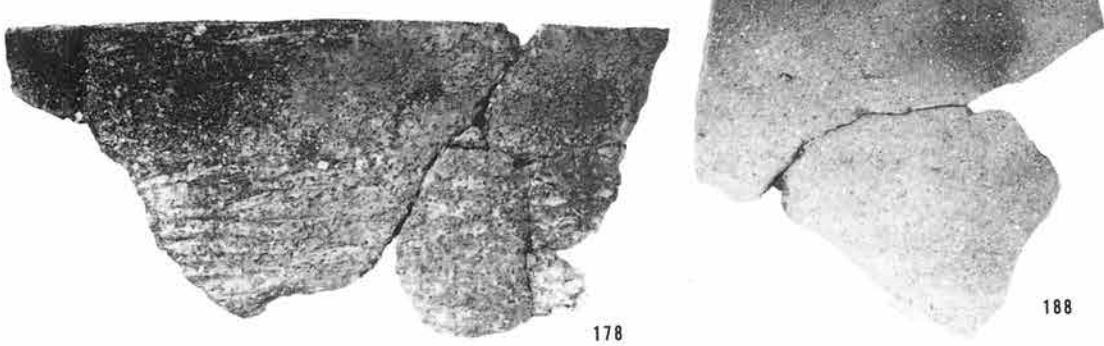
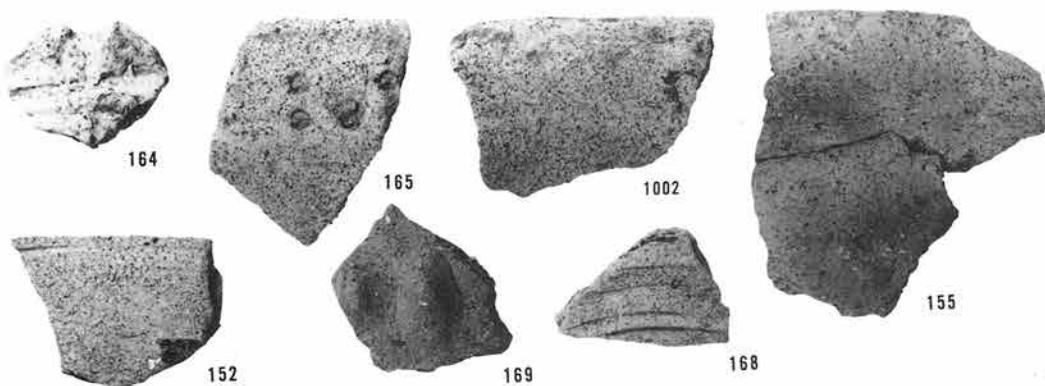


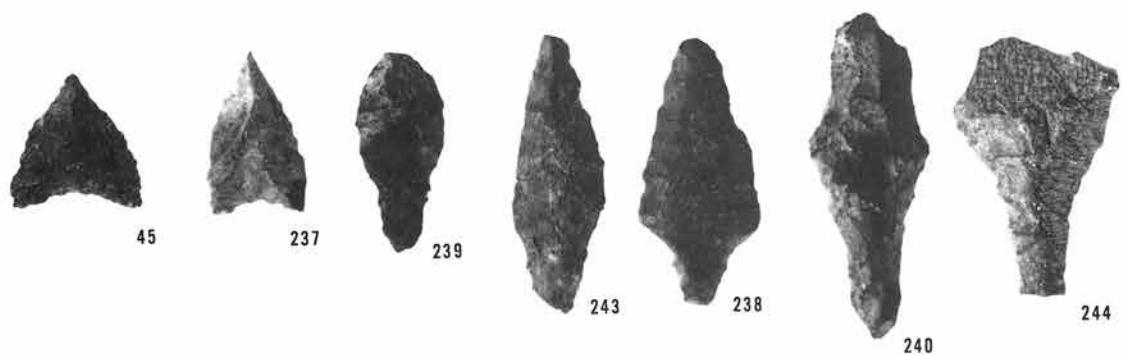
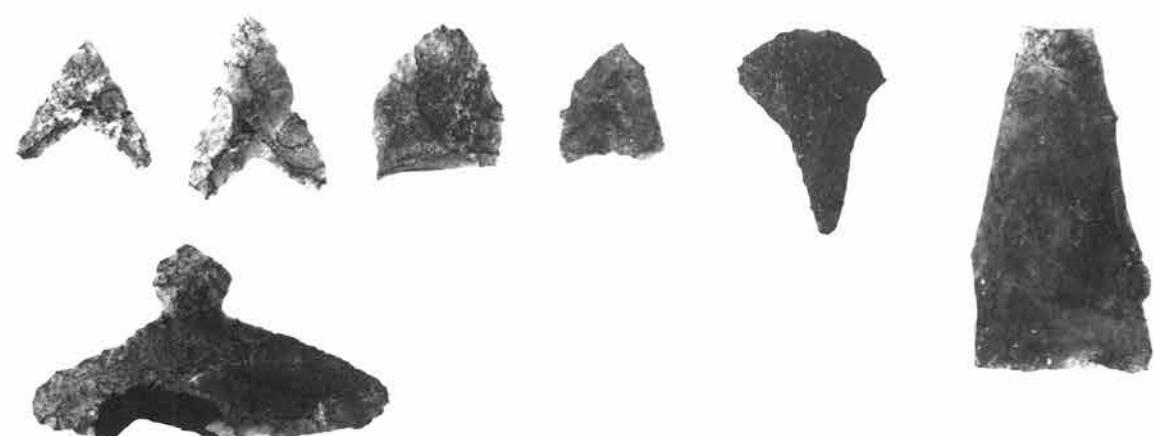
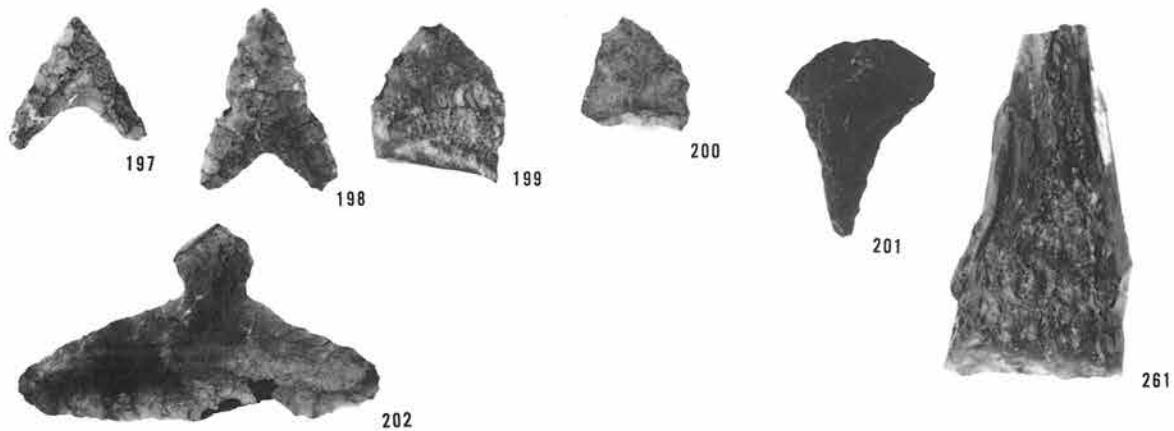
125



121









203

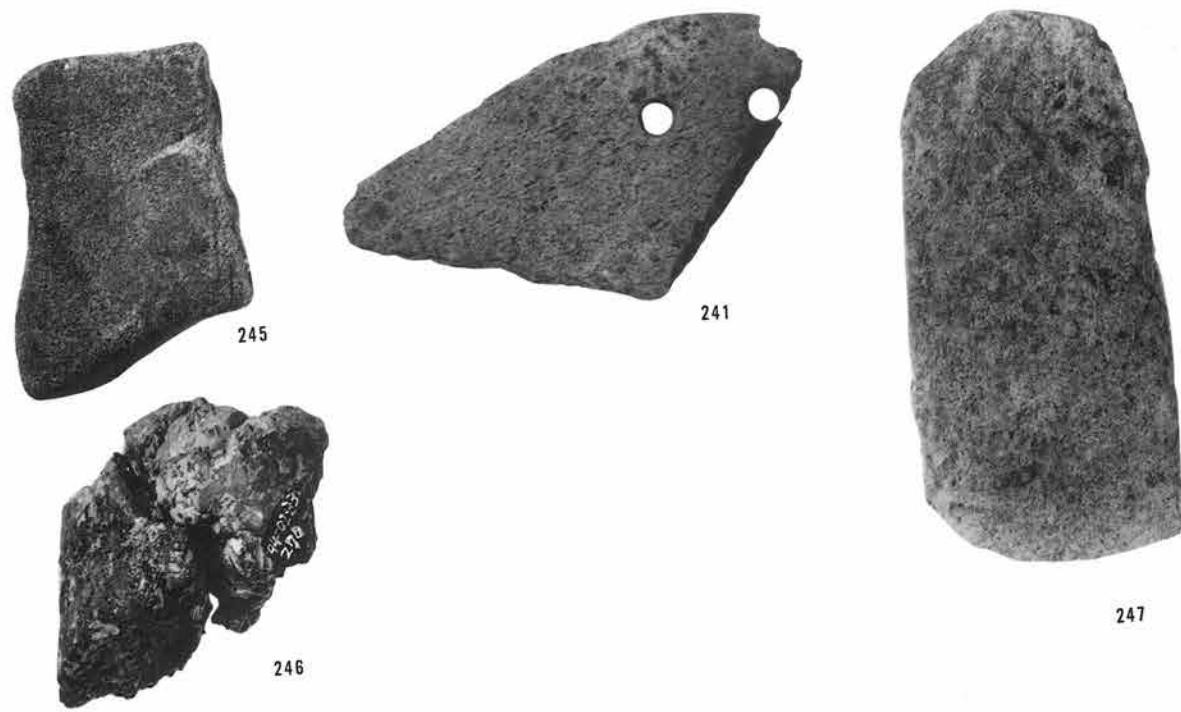


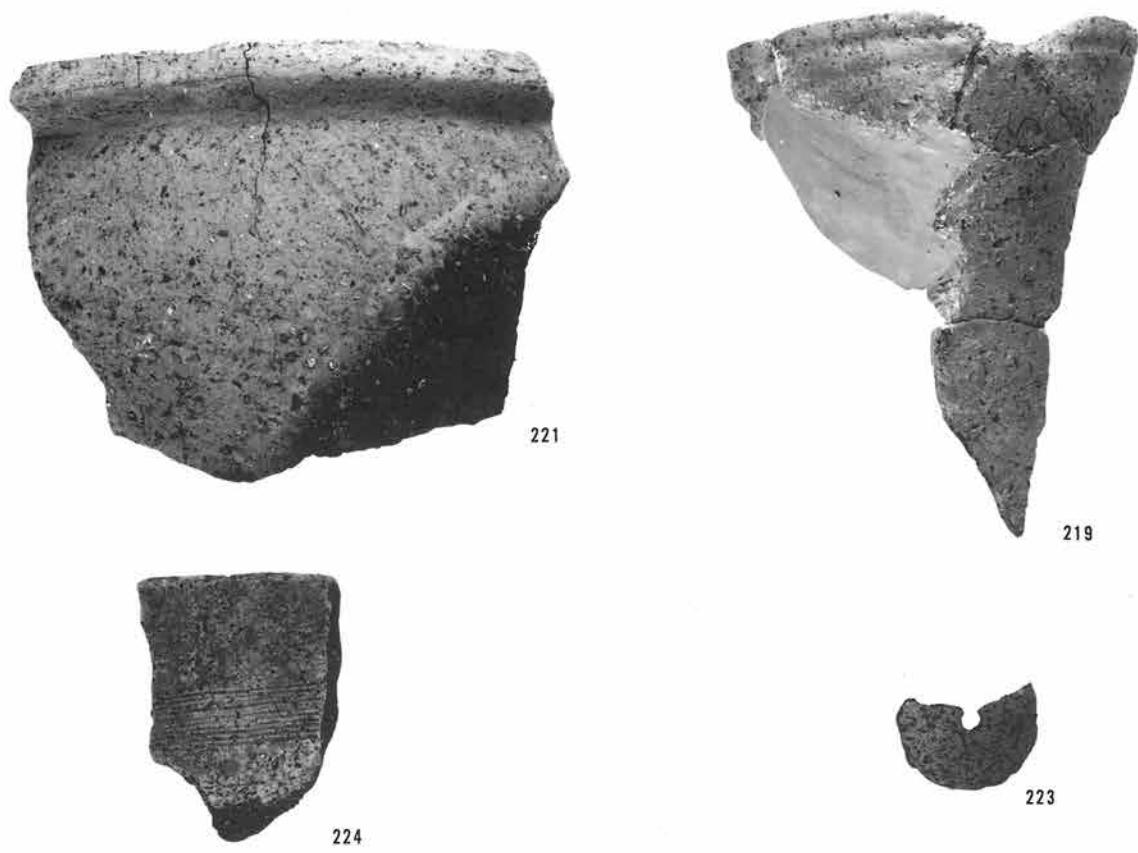
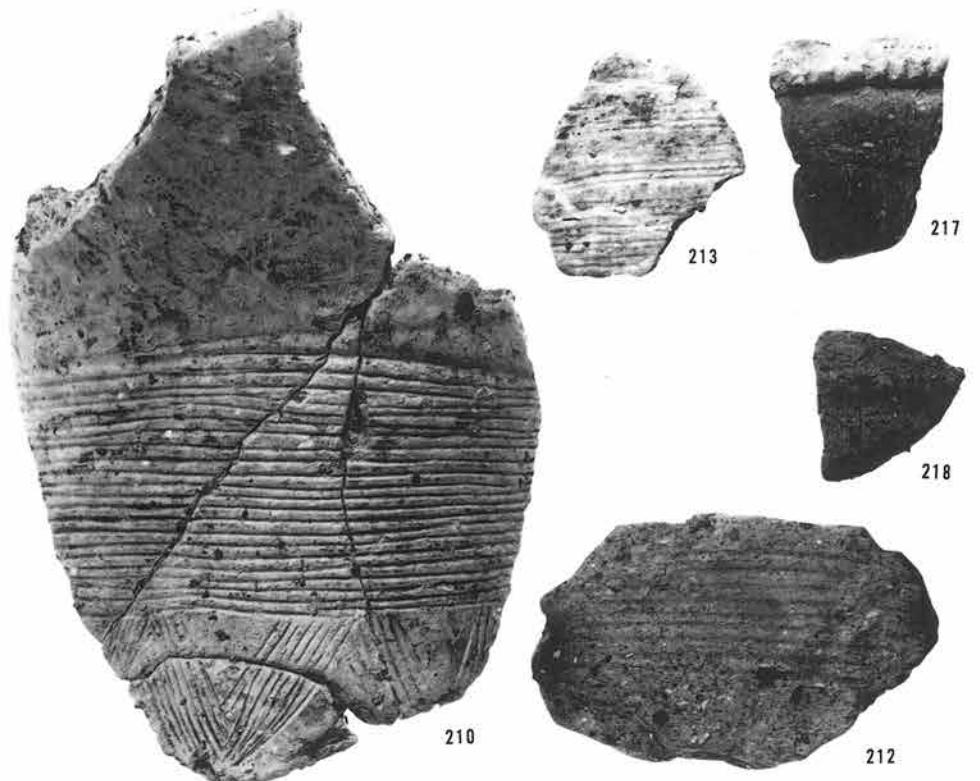
204



205









225



220



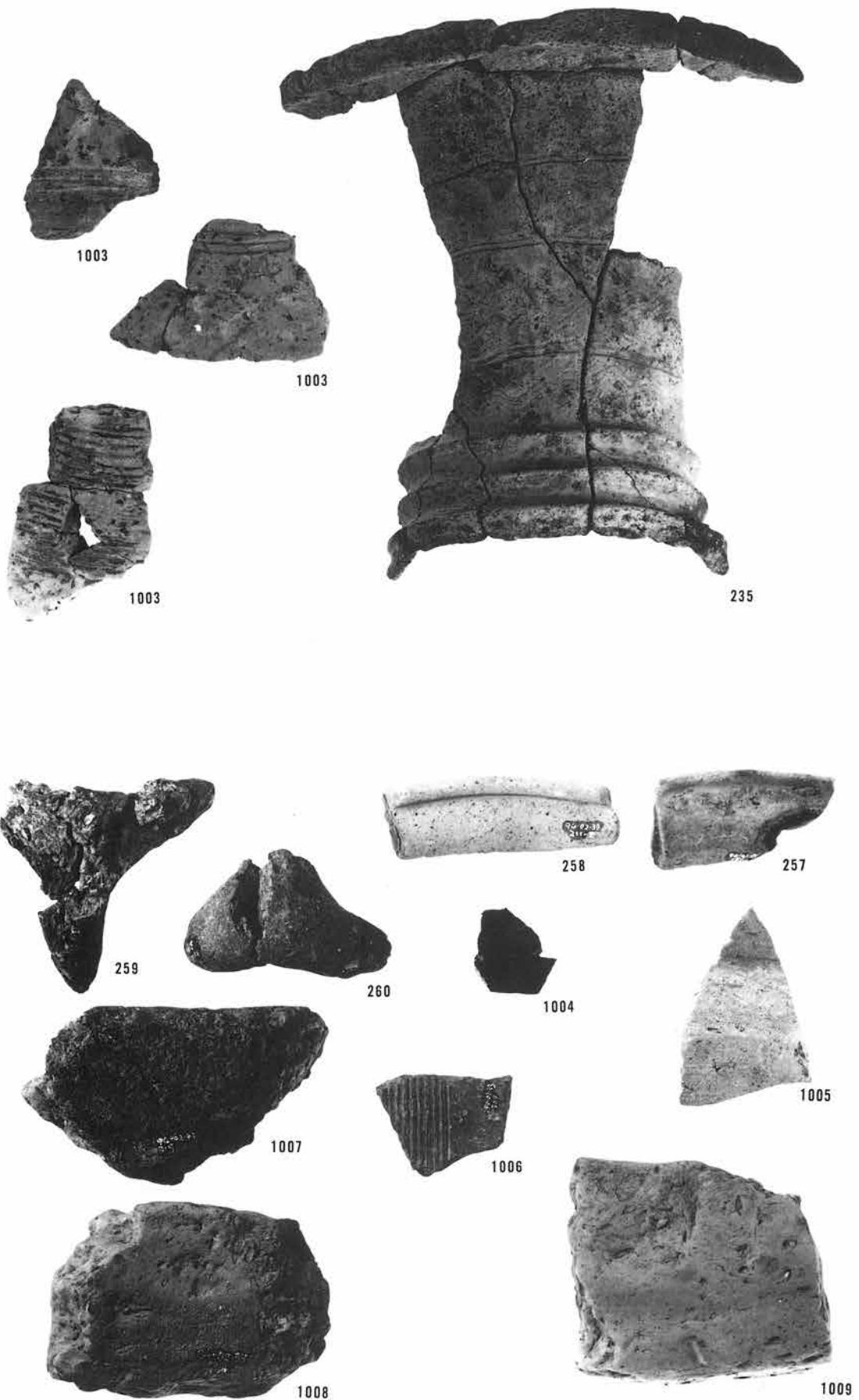
226



231



229





242

262



1010

報告書抄録

ふりがな	みぞのくちいせき はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	溝の口遺跡 発掘調査報告書							
副書名	団体営農道整備事業棕の木線建設にともなう発掘調査報告書							
編著者名	武内 雅人							
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	和歌山市広道20番地							
発行年月日	1997年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	
		市町村	遺跡番号				調査原因	
みぞのくちいせき 溝の口遺跡	わかやまけん 和歌山県 かいなんし 海南市 みぞのくち 溝の口	3020230	33	34度 09分 20秒	135度 15分 18秒	1994.12.19 ~ 1995.3.31 1995.11.30 ~ 1996.3.31	2050 m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
溝の口遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 中世	土器棺墓 竪穴住居跡 鉄釜鋸造遺構	縄文土器 弥生土器 鋸型				

溝の口遺跡

団体営農道整備事業棕の木線建設に

ともなう発掘調査報告書

1997年3月

編集

(財) 和歌山県文化財センター

発行

印刷 西岡総合印刷株式会社